## 们协协



川協加盟

No. 766

三月号

# いずも川柳会創立65周年

#### 記念川 柳 大会

会 日 出雲生活センターラピタ 4月21日田 午前10時開場 (市役所隣) 出句締切正午

(各題2句) 席題なし

35

宿

題

◎おはなし

高 風氏

な 茶 4

111

林 西 々選

久中恒津小小黒 松川 紅選

バランス

裕

心

3500円(写真·発表誌·懇親会)

代仕男選

会

・欠席投句の方は各題各々別紙に2句ずつ連記し、 氏名を記入のうえ、投句料1000円を添え、4月15 までに左記へ 住所 B

出雲市松寄下町284 きみえ

#### 発刊記念川柳大会 風 $\Pi$ 合 同 句

所 時 2500円 なにわ別館 5月26日(1) (句集・大会誌) (松江市干鳥町旅館団地 午前10時開場 正午締切 風の会負担

場 日

会

題 満ちる

ことば

石大森

夷

踊雷

2句以内、

宿泊

なにわ別館

申込は

690

締切

5月15日

松江市国屋町381 前泊12000円・当日泊6000円 なし(欠席投句拝辞 竹内寿美子 33

ŧ 催

風

句集頒価

1500円(送料別

## ボン・フチ

#### 西尾

野上ふさ子さんに与えた渾名で「小さくて賢いおばあさんのような人」というこ

野上さんは、日本の医薬関係の研究所、 大学、企業などで使われている実験用犬 猫、マウス、ラット、兎、鶏、豚、猿など 護験用に提供される動物は年間一千万匹 に及ぶ、この動物実験の在り方に問題が あるとして、五年前に十人足らずの仲間 と「動物実験の廃止を求める会」を作っ と「動物実験の廃止を求める会」を作っ

「あまり数多くの動物が、むごい手術や残酷なテストで苦しみを与えられ、殺 や残酷なテストで苦しみを与えられ、殺 されている。人間のためというのが至上 さのか、医学の進歩に貢献しているのか、 甚だ疑問が多いのである。

うした活動はすべてボランティアである。

企業や研究所を訪れ、動物実験の公開を求める質問書を出す。また、役所には実験用に捨て大捨て猫の払い下げをやめてと迫る。国会にも動物保護の法の充実を訴えるが、反応が一様に鈍い。『動物実験は必要だから反対運動は意味がない』を無視されてしまう。これが私たちにとって一番の壁である。私達の運動はまず、動物を苦しめてはいけない、という素朴な感情である。言葉で言えない、訴えることができない、自分で自分の身を守れ

は食べない。

の福祉にも通じるのでないか」と考える。の福祉にも通じるのでないか」と考える。 野上さんは専攻した近代哲学に自然が 欠落していることに失望して大学を中退 し、アイヌの盲目のおばあさんと十年ほ し、アイヌの盲目のおばあさんと十年ほ し、アイヌの盲目のおばあさんと十年ほ と暮らし、山も川も動物も植物も神とし で包み込む自然観に感動したのである。 その後、東京に出て雑誌編集で生計をた てながら自然や動物環境保護のため執筆 したり、選挙に出たり、多面的に取りく んでいる。そしてボン・フチの生活をし れでいる。ろしてボン・フチの生活をし ている。因にこの人は、魚は食べるが肉

私はこの一文を読んで、こんな素朴な感激した。そして川柳を作ることは如何感激した。そして川柳を作ることは如何にも平和で、他の生物に迷惑をかけていないことを喜んだ。



俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

路

情熱の女の帯の夢一字

私

0

句

岸

あやめ

#### 柳 塔 三月号目次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

JII

自選集 ...... 川柳塔 落ち葉となって ■巻頭言 (同人吟 ボン・フチ ..... 西 村 尾 太茂 栞 津 選 栞 : 1 34 4 2

■連載 ■川柳太平記 籠裏三篇研究 (154) 川柳の群像 米澤暁明 東 大 38 42

選 42

輪廻の姿です。

新春おめでとう会 -同人吟 水煙抄 (3 遠山可住 橘 ·松本文子 木 : 80 63 65 64

河内

天 智

笑 子選

選

出

:

70 66

熱をもっての川柳塔を運営していこうという。

新理事長橘高薫風氏の新年の抱負は、和と

大空のこころ

■女性コーナー 河系

茴香の花

秀句鑑当

賞

水煙抄

..........

# 落ち葉となって

### 太茂津



きわたす、次代の冬芽がふくらんでいます。 のために土台となる次代へ生命のバトンを引 「冬山惨憺として眠るが如し」と慨嘆して 川ガラシヤ夫人の辞世の の武将、 れ人も人なれ」戦国時代 てこそ世の中の花は花な 自分は枯れて、 散りぬべき時に散 細川忠興の妻細 子孫

をおこす役割を果たしています。 最終の『炎』を燃焼させると同時に、 いたのですが、黄や紅葉に変身を促し、 栄養分となって再び吸収される、自然の摂理、 枝をはなれて散る落ち葉、土に帰り、 落ち葉

如く座す」気分に少しでも近づこうと、 燵に膝を入れて、 開いたというが、七十六歳の私は、温々と炬 の件を深く反省してみるのです。 釈迦は、三十五歳で菩提樹の根元で悟りを 「人は人なれ」人間はどうでしょうか。 栞主幹の「元旦や我泰山の

■編集後記 三月各地句会案内 柳界展望 各地柳壇 ■句集紹介 ■各地句会だより 初步教室 路集 私 座右の句 の句 歳月を縫うてきれいに光る針 遍歴の果てのやさしい顔に逢う (佳句地十選/稲葉冬葉) 栄 美 高須賀金太句集『夫婦傘』 両川洋々句集 柴田英壬子・園山多賀子・政岡日枝子・福本英子 弓削川柳社の歩み 崎山美子・山本玉恵・さえきやえ・中塚遊峰 『枕木の詩』 田中正坊・奥田みつ子・小池しげお … Щ 浜 辻 村 原 垣 林 野 JII 寿 花子選 比 由 白 子 呂 多 女 克 渓 香 子 選 選 子 : :: 104 76 85 76 103 90 86 84 83 78 77 102

> 井の中の蛙でなく、コップの中の嵐でなく、 内側の交歓だけに止まらず、外界へ翔ぼうで はないかという。

72

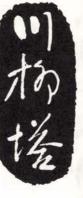
ひみこさろん

ワイド ……

東を忘れない多くの仲間たちです。 東を忘れない多くの仲間たちです。 東を忘れない多くの仲間たちです。 東を忘れない多くの仲間たちです。 東を忘れない多くの仲間たちです。 東を忘れない多くの仲間たちです。

羨望されるほど温くて太い絆となっています。 後継者の育成といっても、本人の "遣る気" は一つ」川柳という一本の糸で繋がっていま は一つ」川柳という一本の糸で繋がっていま は一つ」川柳という一本の糸で繋がっていま がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育たない、この「育成」が最も難 がなければ育なといっても、本人の "遣る気"

って泥をかぶる覚悟が大切だと思います。も積極的に接近を図り、その長所を生かしたも積極的に接近を図り、その長所を生かした



市 江 城 修 史

大阪

永

 $\mathbb{H}$ 

の干 嗤

く臭

10

由

紀

夫に

b

n

そう

な肉

体

だ

屋

座が魚に水を掛け田町クサヤの干物

けてい 物焼

る

となる妻に倖

ば

練

他人という絆 せ残さね

西 出

大阪

市

亡父の

歩いた道を子が行く孫が行く

人の心に飢える日も

腎不全 た

りたい帰りたくない故里よ

不全

起伏の旅 所詮

のいつまでか

++ 魚

4

フセイン汝を髭

剃

n

の刑

13

楓

楽

初 焙

春の雪

柾目

下

駄が欲 ほ

しくなる

じ茶が旨

V

ちら 0

ら降っ

てきた

鳥取県

新

家

完

司

ふるさとの!! 志だと思っていたら恋仇 0 山も街 の会社が買 川に油が浮 い占 いている

め

た

あ

時

中に生

まれ勝という名前

#

H

市

市

林

野

甦

光

たん 雪寒行 僧の袋にも

ぼ

あ

長一

電

話す

落ちてい

た

0

狂ってならぬ母の笛 むとつきもの

松原

市

谷

垣

史

好

らも来世も蛆は蛆である

言 U 春

13

のがれ出来ぬ写真に日付 がまわりみんなを脇役に

あ

1)

とことが不足だっ が来るまでと自

たり余ったり

分を甘や

か

す

ふれ 落ちる音を聞いてる苦労人 娘 女系家族は豊かだ ta

な出逢いを橋で待つわたし 0 も一度は誘って見るもんだ

儿 尾

選

4

ひとつ覚えの歌を大事にしていますパスポート稼ぐ気持にまだなれぬ車間距離きっちり守る倦怠期受付がときどきのぞくコンパクト ポンポコリンで老人会が手をつないい友に会う日カニ缶待っているベランダで育てた花です仏さま羽根布団 貧乏性になじまない 強白魚 タイ 先 瞑 千 大 体階 ゴ 木 雑 の仏 想や羊 き合 温 段 生 沓よヒントはいくらでも生 観 兀 も親 を降 にも ポコリンで老人会が手をつなぐ は を振る気ない ムリミットまでは笑っており 0 0 羊を飼っている枕 師 富 せ 王 りる でなし肩 弱気にも賽は役げら 商 0 の群れのなかに 石 鴉も飽 E 血筋を引いてい の仏もあたたか 法 科白 も書 なん がまだ出 が組 ので苦労する から て見苦し いて来た文化 降つ み易 V 7 る Vi る 10 ba れる まれ か 3 米子 F 竹 松 ます る 関 原 原 まし 市 市 市 市 た 林 玉 小 石 島 JII 置 荒 侃 重 蘭 流 介 人 洞 学歴を嫌う父から即兄、 あ口仏生忍 コンパ 極 TU 右 プリズムの 自 花 情 生 俑 打影 することがない 楽 楽器と 開 涯 顧 動ドアのように 束 + 踏 0 0 0 熱が三十八度超えてきた 涯を貫く 0 3 年夫婦 眸 世とやらの笛や太鼓 掌にも虫を殺 を莫迦で通 左 へは無理と知 2 Ш ねばならない駅へ星 字心に クト女仮 少しこだわ の影 \$ 眄 は今も本音を秘めて 何 瘦 嘘も上 向うで偽善者 から届 母の愛がある 時 している見 せ 書 たが今日 も本気で渡り合う 価を確 る鬼で憎め L ので庭の掃除 Vi る花言 た野の L 7 0 世 1 手になり てる霊 た跡 いる 日も 間は甘くなし 事だぞ か 霊柩 が降 があ が聞こえてくる 独 8 葉 吉 3 ŧ な 1) 2 を たい する 3 3 3 10 L 車 岡 た 補 取 < 県 市 県 安平 士. 嘉 次 橋 数

弘

道

螢

兆

酔うときは酔うてまあるい輪にしよう	何はともあれ身体髪膚ととのえる	去年今年また鈍行を乗り継いで	和歌山市 西	余生とやもて余してる好奇心	呪文効き過ぎた男ととろろそば	舞踏会の手帖は風にめくらせる	あとすこし生きたらバルセロナへ行こう	冬ざれや仏は何もおっしゃらず	あげ膳据え膳この世に怖いものはない	富山市 舟	合掌の手に欲ひとつもうひとつ	電柱がにぎやかになり地方選	盆栽の小枝も載った祝い膳	シクラメン無職の窓に花ざかり	気がもめる美人の部屋に用が出来	中心に美人をおいて会終る	奈良県 田	宝石を見て見ぬ振りをする妻に	毛皮屋の前だよ妻よ足早に	豪華だが花屋の花よ倖せか	条件を満たした儲け話だが	カトレアも野菊も一つ生命もつ	両掌からそれそれ今がこぼれるよ	八尾市 内
			山							渡							中							海
										杏							紀							幸
			幸							花							紀美代							生
	末席の目が旗いろを読んでいる	無病息災 朝からめしのてんこ盛り	おでん屋を出れば月形半平太	苦労してみたい喪服のうす化粧	人妻のいいとこばかり目に映る	ニコニコと笑い苦手をつくらない	松原市	冗談にまぎらしている口悔しさも	夫と手を結び心の旅つづく	まだ若い若いと主治医だけがほめ	人間陶冶 歩いても歩いても	ほろ酔うて軍歌両眼失くしても	霙降るあれは桜を招く音	島根県	薬湯のしみこむ温み雪しきり	指先が教えてくれたタイミング	深呼吸ここは平和なうちの庭	親ごころ そんな気もする妻を追う	ひとときを少年の日に戻す雪	両眼がサボってるから物忘れ	島根県	聞き役のはいといいえが難しい	片栗粉 温い話に飢えている	わたしから逃げ隠れする早春譜
							小							堀							堀			
							池							江							江			
							しげ							芳							正			
							げお							子			- 69				朗			

ほめる術無い白	雑草の新芽へ陽光向きたがり	時計にも命をつなぐ音がある	倉敷市	酒に酔い音〆に酔うた春の宵	調子のよい口三味線に乗せられる	バランスを崩してからの蟻地獄	喜怒哀楽やがては風化するものを	輪の中の思わぬ人が弓を引く	射程距離にいつでも置いてある弓矢	高石市	銀行屋 米屋それぞれ世を嘆き	この人は今日はあかんと思う猫	ふぐの味一度も知らず妻老いる	言うならば人も犬型 猫タイプ	去年今年走り回った諭吉さん	正月がやっと済んだら受験です	寝屋川市	ばあさんがもっとばあさんに席譲る	聖書にも喜びなさいと書いてある	満月の大つごもりは愉快だね	草原の星座の下の羊飼い	アルプスのホルンを羊は恋しがる	悟り開いて早起きなんか致しません	豊中市	
			小							浅							岸							安	
			野							野							野							藤	
			克							房							あやめ							寿美子	
			枝							子							かめ							子	
わたくしもこわいおばさま族にされ	包丁研ぎとても上手な娘婿	満開のバラへ約束などしても	こだわってみますトマトが熟すまで	松原市	公園のばら公園の夜に馴れ	歯ぎしりを聞くだけでもう負けている	心配な気球を一つ持っている	ボーナス袋にぶら下がるものばかり	半端ものばかりわたしの頭陀袋	西宮市	善人で黒を白だとよう言わず	老い二人 気楽に生きる市場籠	仏壇に亡母が生きてる飯を盛る	生者必滅 妻に先立たれては困る	耐用年数とっくに過ぎて生きている	奈良市	娘をしのぶ人形一つ買って来る	要るだけは要るで見事に年を越し	平凡と言う幸せを忘れてた	タクト振る何も忘れた顔に惚れ	気取り屋で野心少々強すぎる	倉吉市	頼られるこんな嬉しいことは無い	定年の背中で振子のふれやまず	
				佐						林						宮						奥	5		
				藤						は						П						谷			
				奏						7						笛						弘			
				月						絵						生						朗			

い齢をしてとけん制球が来る	春にかたきを捜す旅に出る	病んで他人ごとならぬ雪だより	寿草 背伸びをしない無事がいい	月の料理食べあき軽い飢え	藤井寺市 吉 岡 美 一	滴が終ると旅にあこがれる	草を食ったら肥満体になる	き恥と生き甲斐やがて似てしまう	蹴りの缶は主張を持たされぬ	あ夫婦汗と涙に風が吹く	和歌山市 牛 尾 緑	一重なら愛しても良いか知ら	「分けにせねば家族が和めない	眼に構えて時を稼ぎたい	急に求められては燃えて来ぬ	に皮算用をしたくなる	堺市楊井二	謝料を一度は持ってみたい嵩	そうあってほしい噂が立消える	にむせ煙草にもむせ成人の日	たもとのパン食になる松があけ	とし玉はずめば福の神にされ	堺 市 高 橋 千万	ーートの役身通学列大・大とに
	綱渡り贅肉たっぷりついている	息には息の行く道あらん油蟬	さみしさは磨崖仏の彫浅し	七十年私の物さしはなさない	房 人の世の生きざま聞きたし根尾桜	奈良市	一旦緩急の言葉忘れた平和呆け	手袋の指先の空虚究めねば	いつまでも迷う羊であとがない	一億初詣で性善説を疑わず	良 恋知らぬ少女が恋のカルタ取る	熊本市	柚の里の約束をするぬくい冬	一月九日 自愛に尽きる誕生日	更年期すらなつかしき夕凪よ	病み呆けと気付いた頃に風邪治る	南思い出し笑いで漫画読みふける	尼崎市	花図鑑開いて春を待っている	七転びやっと解った裏の道	招福の猫が淋しい顔をする	お目出度い仮面をかぶる三ヶ日	子 酸性雨浴びてロダンは思案する	<b>九郎</b> 市
						天						永						春						耄
						正						田						城						坊
						千 梢						俊子						年代						正月力

倉敷市 稲	七十年 年輪消えしデスマスク(兄急逝)	日記帳 事多かりき去年今年	コラムから拾ったネタでぶつ訓辞	まあまあというファジーな日本語	光らない石がいちばん役にたち	豊中市田	お年玉の外に福袋ねだられる	おじいちゃんがテレビで涙流してる	子も孫も仏壇の前にはおとなしい	独り身になって肥えたじゃありませんか	福寿草 恩師の面影しのびつつ	柳井市 弘	冗談が通じなかった間の悪さ	太陽に貧しい心覗かれる	世の中がどう変わろうと季は巡る	ちょっとしたことから絆揺れ動く	幸運の女神はいつも隣まで	高槻市 川	花柄の花瓶が花の気に入らぬ	涅槃図の隅へ私を置いてみる	終着の駅に家内がいてくれる	妥協した貝でヤドカリ風邪をひき	立っていりゃ柱 寝ころびゃ丸太ん棒	今治市 矢
田						中						津						島						野
豊						正						柳						諷						佳
作						坊						慶						云児						雲
三ヶ日まではばあさんおとなしい	笠岡市	お酒好きカラオケが好き女好き	大好きな煮ころがしの匂いする	どちらにも理屈があって姑が負け	喪服脱ぎ浮世の義理の寒いこと	七草粥 貧乏暮しを想い出す	七尾市	荒風を防いでくれる父の墓	切り札がなくなり減って行く味方	年金を三六五で割る余生	猪の妻へ引かない虎の嫁	言い訳の長さへ許す気が失せる	宇部市	倖せな予感に醒めた花の宿	人形にした人間の愛佗し	清水の舞台から飛び降りて来る蝶二つ	東郷元帥の髪が家宝になって来た	ドイツ留学合格の手に風車	京都市	老いの目に読めて分からぬカタカナ語	聖書を開くと軽い罪が重くなる	欲のない奴に仕掛ける罠が無い	扮飾の言葉を知らぬ律義者	初昇給 孫も一番出世する
	松						松						平						Ш					
	本						高						田						本					
	忠						秀						実						規不					
	Ξ						峰						男						風					

只今アッシーちゃんを募集中カプセルホテルで宇宙旅行の夢を見る	松江市 柳	鍬を振る老眼鏡へ子が背く	男には根性欠けて均等法	ジーパンが嫌う軍手を干している	体調がつい百薬の量を越す	わだかまり解けて蛇口の軽い音	松江市 恒 5	美人画の前でつくづく目鼻立ち	君だけの私でいたい竹トンボ	童歌たんと知ってる自在鉤	親切が無になる程の礼をされ	欠点を言い繕うて寒い夜	京都市 松	ドラマひとつで無名もバカ売れ千枚漬	愚かしや昨日の流れ矢に当る	カレンダーこれからの一年の持つ重み	大晦日 元旦の計など立ててる暇がない	来年来年って明日のことですがな	京都市都	外孫がスキーへ行くと年賀状	泡食った後が何とも言えぬ味	三つ指をついて主人は留守ですの	年回り羊だろうが馬だろが
	楽						松一						Ш						倉山				
	鶴						叮						芳						求				
	丸						紅						子						芽				
方言もかしまし女のひるさがりあなたならどうする一献差しながら	おしゃべりを忘れてしまった冬の川	出雲市 吉	いいおばあさんになると財布が軽くなる	残像を追ってわたしが負けている	絵具皿涸れて余白が埋められぬ	試行錯誤繰り返しては越える渦	義理と言う単語大事にしています	出雲市	夢無情愛はかけらもない筈に	大胆なポーズ連想する自由	若い日のそっくりですと娘と出逢い	本心を聞かぬに沈んだ角砂糖	客摺れの売子忘れぬ恋を持ち	島根県西	はらはらと横綱相撲見ています	貧富の差 神は賽銭どう裁く	馬おりてまだゆるやかな坂の初春	地球温暖化へほっと雪便り	百姓の性はさみしい増産譜	松江市 舟	神様を信じなくって四十五年	今日も健康 煙草のうまい朝	役がふえるたびに敵もふえる
		岡						山						村						木			
		きみえ						多賀子						早苗						与根一			

稜線がくっきり村を包む愛	裸木にも約束があり寒を堪え	湯豆腐を待つ残業の湯がたぎる	仲人の無駄足これでもかこれでもか	出雲市	ドライヤーの音孫も大人になりました	善人になれるまで灯の前に座す	七色の思い出織りなす糸車	山茶花の思い出ふれる冬座敷	半衿の色あわくして春の膳	島根県	音もなく雪子が残した足の跡	冬木立 今日も孤高の笛を吹く	こぶし咲くあれは造花かちぎり絵か	雪ちょっぴり天気予報へ義理をたて	方言でけんかしている懐しき	島根県	自己嫌悪覆う真赤なスカーフで	リボンの彩替えたくらいの新年で	三途の河 今ならきっと飛び越せる	泣く暇がないから笑うことにする	仮の世と信じられないから走る	島根県	皿洗い明日へ続く夢がある	中流を意識ほかほかカーペット
				東						栂						小						松		
				Ш						4						砂						本		
				良						F.						白						文		
				子						ŋ						汀						子		
イニシャルを付けた小筥に炎を溜める	丸帯に福を挾んで雪の道	チャンス今敵は冬眠しています	四角四面の豆腐この頃よく笑う	ニュースキャスターまだ未発表の服がも	米子市	サーカスの象で笑ったことが無い	だまし絵の皿にうごめく浮動票	酒の味おぼえて背丈父を越す	隣には内緒火の章書いてます	公園で逢うブランコの長い影	米子市	咲けば散る定めに燃えている花弁	夢旅行 疲れ知らずに金いらず	電話待ちイライラ血圧あがりそう	不幸な手紙不幸な鬼が書いている	天国から地獄へ落す株相場	出雲市	一人居へ迫ってきます照紅葉	こぼれ萩夕陽が急ぐ仁王門	金木犀 日暮れの路地を広くする	玄関でタップダンスの雪落し	あきらめをつかめぬままに爪を切り	島根県	一升ます昔人情あった頃
				ある	林						小						板						北	
											西						垣						Щ	
					瑞						雄						夢						民	

Z

酔

子

枝

		火を守る嫁さん春に			- 1		
		う七日まだ七草と遊び	み	な	坂	野	米子市
		返らない本思い遣る寝正月					あの峰へ遠いみちのりなど言わぬ
倫本	福	和歌山市					火花散ることも少なく夫の老い
		上だけを見つめて登る縄梯子					きている窓だ西陽が射して
		エプロンの男結びが気にかかる					子
		先に死ぬ 妻がこの頃いじめます					一輪古木も絆た
		好きじゃないセロリも付いた父の皿	鶴	田	戸	青	
		これも徳 私の胸のDカップ					畳目に添って雑巾裏返す
机	新	米子市					音を濾過す
		いつの間に流れて行ったうろこ雲					イトに友の
		何もかもたしかめたくて海へゆく					柚子の香りへ期待かけす
		偶然に同じ魚を嫁と買う					れないままに明日
		種をまくこの世に生きている限り	ど里	みど	沢	寺	米子市
		童謡を歌えば和む日暮れ時				3	ハンドルは妻いつも敷かれております
沢田	沢	米子市					で合鍵つくるお
		芝居にしてはとっても下手な朝帰り					信
46	くれ	若しもの時はポケットベルで呼んで					17
		偶然に出逢えるように家を出る					絆ぱっと
		ジョギングの友が二人も減っている	弥	亜	中	田	
		絆にしては釦ホールが小さすぎ					あの村も町の顔して寄せつけぬ
政岡	政	米子市					の祭りへ踊り狂
		身のほどほどに一人蛙へ念を押す					の人に紡ぐ糸
		いてと風の					*
		一つずつ訛りが消えて冬の辻					跳ねている鰯を割いて浜の昼
		キリストとアラーの神の戦かも	子	花	垣	T	米子市

大いなる誤算はめし屋継ぐという	の内に何とかな	カシミヤと愛にふんわり包まれる	黒羊べつに拗ねてる訳でなし	何くわぬ顔で新年おめでとう	和歌山市	バーゲンの案内兼ねて年賀状	中将湯母はおんなでありしよな	分を知った日から心に風の音	途中下車させてはならぬひとといる	髪梳いて熱い別離を耐えている	和歌山市	きっかけを摑んで嘘を吐き出そう	群集にまぎれて仮面つけ替える	寒ボタンとてもリッチな藁帽子	ダブダブの背広にあった頼り甲斐	羊の数五十位が眠り頃	和歌山市	窮屈な屋台になさけ満ちている	みの虫のブランコやはり選ぶ枝	珍客へ財布が先にあわてだす	一着のスーツ買うのに疲れ果て	神様が日にち薬を授けられ	和歌山市	うますぎる話へ嵌まる欲少し	こつこつと夜更けヒールの細い音	
					福山						木						桜山						内			
					井						本						井						芝			
					桂						朱						千						登志代			
					香						夏						秀						代			
長いものに巻かれた弱さ自省する		畳まれたままで日の丸年を明け	木枯らしや俺には鶴喜の鴨なんば	寸足らず河内木綿にあるレトロ	挫折感奮い立たせる竹の雪	諸行無常いろはの歌に知る八十路	大阪市	つり橋の上で喧嘩は売らないで	片足は踏みとどまっている理性	泳いでる噂 尾鰭は御自由に	明日あると思うて亡父も寝たはずに	川底の春を掬うて四つ手網	和歌山県	正直に申告しても赤になる	かじかんだ五臓六腑へ寒の水	烈しくてずるくて未おんなです	大根の腹を輪切りにしてごらん	うしろめたい心を庇うまち子巻き	和歌山市	切り札を温めたままに職を退く	勝ち取った回転椅子の軋む音	三味の音が聞けるコースの万歩計	豊かさの中の余命が気にかかり	美しい嘘へ神様目をつむり	和歌山市	
	河						北						寺						内						青	
	井												田						田						枝	
	庸						勝						裕						結						鉄	

美

実

治

美

佑

<ul><li>彼岸までノルマが有ると冬将軍 首からお金にもろいお役人 昔からお金にもろいお役人 大阪市</li></ul>	<b>輪咲く幸せの輪の中で寂びのわかるお方と南を得ぶ手近な梅便りを偲ぶ手近な梅便り</b>	し音人の きはち旗正いをさ芽 た沈足出し	遊ぶのが下手で連休持て余す一歩後退花を持たせる処世術妥協して次の打つ手は胸に秘め級得はいかぬがここは退くとする
藤	津	神	
田	守	夏	
頂留子	柳	典 清 子 子	
聞き流す主義にかえてからうまい酒無にかえる日がほしい花を買う無にかえる日がほしい花を買う自然には逆らわない主義冬の川梅一輪咲くを待ってる冬の月	<ul><li>であると今叱りたいのによそのお子きちっと今叱りたいのによそのお子きちっと今叱りたいのによそのお子きちっと今叱りたいのによそのお子りられてぜいぜい山の荒い呼吸</li><li>りるいけど夫のへそくり高が知れ</li><li>してである。</li></ul>	を は 要 を お 前 と 呼 べ る こ は 要 を お 前 と 呼 べ る こ は 要 を お 前 と 呼 べ る こ は 要 を お 前 と 呼 べ る こ は 要 を お 前 と 呼 べ る こ は 要 を お 前 と 呼 べ る こ	<ul><li>雑踏の波へわたしを投げ入れる 戦争か平和健忘症が多すぎる 大阪市 戦争が平和健忘症が多すぎる</li></ul>
ボ	宮	渡桝	冨
	西	部本	上
	弥	さと 美	光
	生	美児	代

立ち退きで便利な店が又一軒	大阪市 大 塚 節 子	変わる世も昔の風情三味の音	黒髪を亡母に手ほどき春の縁	切り捨てて残った義理も重くなり	イヤリングゆらゆらゆれる恋の唄	風邪ぐすりコマーシャルみてくしゃみする	箕面市 坪 田 紅 葉	地下街で迷って一たん外に出る	枯れ落葉 土に還れぬアスファルト	おふくろの味に戻った老いのⅢ	山里の夕暮れ亡母の背を偲ぶ	ファミコンに風の子取られた初春の空	大和高田市 岸 本 豊平次	安物を摑んだ決算大処分	風邪の妻 乗せてペダルの毛糸帽	点滴を聞いて居るよに目を瞑り	寝たきりの実家へ日割りのスケジュール	ハミングで孫の来る日の台所	八尾市 鷲 見 章	既往症に激しい恋を病んだあと	みえすいた嘘を聞くのも酒の上	箸袋に定紋がある古い宿	蕗の薹色と香りの春の膳	酒吞まそ笑い上戸の客なれば	八尾市 宮 崎 シマ子
雛まつりボーイフレンド陶汰され	窓際の気圧が揺れる年度末	年度末予算を役所もてあそぶ	唐津市 仁	ポケベルが鳴ってチョンボのペナルティー	監察医仕事始めの変死体	刃こぼれの男をヒモにして女	季語知らぬ台風が来るノーベンバー	高額な保険に媚びるトリカブト	唐津市 久	大金を抱いて金庫は不眠症	誰にでも出来る顔施がまだ出来ず	初句会金粉入りの酒を携げ	一家皆御用初めの靴磨く	元旦にならぬと詠めぬ今日の詩	唐津市 田	冬の街 四角のポスト馴れてくる	上等の半紙で悩む裏表	成田離婚 夢と現実違い過ぎ	叩かれて杭は立派にひとり立つ	弱点を握られている苦笑い	宝塚市 丸	英太郎 脇に徹した晴舞台	暖冬とは言えどつきない立ち話	爪弾きのしめる音色に菜種梅雨	気を遣ったつもりでしょうが娘の敬語
			部	1					保						П						Щ				
			四						正						虹						よ				
			郎						敏						汀						津				

真心という切り札へ神も折れ	選のダルマへ嘘は	賽銭へ神と鬼とが振り向いた	バンザイの声をダルマよ聞くがよい	自分史へ俺の傷口など書かぬ	鳥取市 両	群羊にボスは居るのか陽が沈む	大根がほどよく煮えた膳につく	喧嘩して頼られ老いの去年今年	屠蘇機嫌 唄は出まかせ風委せ	かかわりのあれこれなぞり賀状読む	鳥取県 林	人間と自然をつなぐ橋渡り	石橋を叩き過ぎては運が逃げ	馬の合う話に善人油断する	切り札を持たぬ善人石を蹴り	曳山ひかぬ児のはちまきがいっち良か	唐津市 浜	白兵戦さながら玄海 濤と岩	愛一途道草もない五十年	駄馬なれど正面席のお元日	若水を汲むしきたりも消えた過疎	まだ生きるつもり元旦屠蘇雑煮	唐津市 浜	進学の気圧今年の春も揺れ	花の種春一番にうまく飛べ
					]]]												本						本		
					洋						露						ち						義		
					Q						杖						ょ						美		
来るものが来て征ったまま寡婦も古稀	姫路市	お年玉の額でいいおば悪いおば	挫折感重ね重ねて古稀の坂	三ヶ日だけは封じる天の邪鬼	三代の牡羊揃って屠蘇祝う	嫁の手作りおせちを囲む温い初春	姫路市	胡座から正座に戻り模索つづく	一日の句読点かも時報鳴る	面会謝絶鬼気がこもりて静かすぎ	自転車の便利さがある路地に住む	男 女 シャツの赤さで見分けかね	姫路市	次郎には凍った星もみせておく	郵便受 南へ向きをかえてみる	御礼の相場神主さんにきいてみる	取りあえず飲む話からまとめよう	人さまの吃水線が気にかかる	鳥取県	シグナルへ握り直した子供の手	差し出した手がにぎれない腹の虫	新年号ミカンのシミがついている	波紋のなかの両方にいる野次馬よ	幸せを無風地帯にいて知らず	鳥取県
1.11	中						丁						大						江						松
	塚						坪						原						原						下
	遊峰						サワ子						葉香						とみお						たつみ

世 姑 良 ジ 言 孫お大 我優 難 昨 2 ï とある日 君 病 耐 131 代 L 若 慢することも覚えた肚 聴 2 h える母 Ĥ 0 くも悪くも 葉にすると大事なも もそろそろ心で泣くこと知り初 年に続く受賞をみ仏 IE しくなった妻よ 座がすこしは軽い靴をはく 何 7 6 機 結 で 7 がさよなら 出 0 新春いつかのね です し日 をし カー 頭 0 好 2 知 秋 0 る の夢に子供が増えたとさ 向 々爺 だ小指 まま 元ての 捨 う 婦 べてきれ た を引くこともあ て猫 ぶり 白 長 式 緒に回 はは の温 びし 0 地 好きなひ 転 6俺の行く: 妙には 番人ら 着物 球 車 平 板 が回 が知 いに につ る声 息子 成 に選 る夫婦 がい燃えつきる 0 帽 っとる 0 が 拭 ٤ 0 n \$ 0 毁 まる 3 7 b が虫 る父の指 先見えた 0 兀 名古屋 お 独樂 n n ぼい + 10 西宮市 岡 3 そう 3 3 路 山 80 県 市 市 坂 3 0 か 門 JII 越 宗 端 村 谷 たず子 枯 吟 柳 梢 4 7 一つ義理 がり がい お鍋 囲ん 一以こ 高 そもそもの原 L 師 お 努めても多弁になれぬ 春人 舌小 のび 守り 墨を塗り現役を自覚 や春大風呂敷を広げたし、生は狂わぬほどの当りく 0 ちさ 味 人 臓 ぶりを押さえる大きな深呼 らよっと足n にい嘘重ね語 恩を 伝心 B を妻と分け ままで下がるつもりは 0 四んでおり を五 会天 胃 寄 マイクの も忘 る老 思い 果し た顔でおめでとうを言 のあとへ 0 しあ 妻に つも買うて子を思い(長男大 狗 出させる寒 て疲れ n しゃべ 因 10 n 静 ば 他人の は に b 合う ないとこ かり てる忘年会 ボ か 本当の せ老母 お 12 1) ハンカチの りが たという 朝 U 生 でまとまら 7 しえる物 寒椿 きて す を 1 顔を見る こが気に入 椿 13 笑顔 との 3 出 L Ċ な Ŀ + 3 61 友が 吸 ル 忘 産 寝 43 げ 大阪 (お年玉年賀葉書 神 电 させ 1 う IE. 野 n 原 F 6 居 3 市 市 市 市 る 3 2 n 森 榎 Ш 等 井 本 Ш 美 蔷 美 吐

穂

居

来

子

ステッキをつくと喜劇の顔になる	キャスターの黒と赤とがよく似合う	まっしぐら親の道行く影法師(長男へ)	スクールバス春の息吹を乗せてくる	卒園の証書見ている揚げ雲雀	幼稚園(二句)	守口市 羽	和解する一つ二つは目を瞑る	オチのないコントをやっている笑い	リトマス紙 命を数えられますか	祝い酒 自慢話がしたくなる	水も春なにかいいことありそうな	尼崎市 奥	胸底に不開の部屋を一つ持つ	深追いをしては傷つく薬指	風向きで使いわけする鼻濁音	うかつにも鼻毛読まれていた笑顔	寒ざくろまだこだわりの解けぬまま	羽曳野市 吉	ノッポビル天使は里の教会に	傘とりに行ってかばんを置き忘れ	お経あげても明日の糧はとんで来ぬ	つぎつぎと産声あげるシクラメン	暁の祈りは神に届きそう	寝屋川市 江
						原						山						]]]						口
						5/07/5																		Н
						静						美智子						寿						
						步						子						美						度
	釣書に書けぬ本音を抱いている	一生に一度天寿と言う本音	候補者の本音 花野に置き忘れ	親の地図 子の地図 晴れの日へつなぐ	金婚へ今更本音でもなかろ	岡山県 小		ちょっとした親切涙ぐむも老い	気の弱りかも神詣でしたい春	別れる等思わず言わず五十年	初詣で願うは戦の無い世界	守口市 野	セットした髪に邪険なぼたん雪	イエスマンと呼ばれてこまめによく動き	感情の起伏忘れた呆け始め	めりはりをはっきりつけて妥協する	泣き言を聞いているのか欠伸する	東大阪市 森	深追いをしない情けはもっている	心もち加減したのが喜ばれ	何事ぞ妻も私も走り出す	ぶっちゃけた話あんたも策がない	シルエット少し疲れていませんか	羽曳野市田・
						林						呂						下						中
						妻						右						愛						透
						子						沂						論						太

加古川市	人生に疲れましたと置き手紙	職は出来ても水虫治らな	一本の牛乳テリアと分けて飲み	焼け	堅ぶつの養子に嫁のおちゃっぴい		おぼろ月 女心が変化する	土筆摘む約束柳友と逢う電話	0	止めて	人居	寝屋川市	組紐の糸もときどきいけずする	弓を捨てるときっと扉は開かれる	袋物好きな女で病気がち	つ身には空耳			<b>傘寿まであと一歳ぞおらが春</b>	達者かとひと言冬の日の別離	当落の音カタカタと絵馬冴える	な	Ш	奈良県
吐						福						柴						奥						長谷
田						浦						田						田						Щ
公						勝						英壬子						みつ						春
_						晴						子						つ子						蘭
	奈良県 上 田 翌	墓碑銘にかなう川柳まだ出来ぬ	冬知らぬ花を自販機売りまくる	雪 あられ 降れよ舞えよと僧の貌	花ほどの雪にはなやぐ桜の樹	子等の声とぎれると雪降っている	弘前市 真喜内	生き方を変える眼鏡を買いにゆく	フランス料理 気取った会話聞かされる	昭和史にふれるとおなか空いてくる	インタビュー馬鹿な質問多すぎる	シナリオにない突風に見舞われる	高知県赤川	日の丸を忘れ結社に利用され	裏門をはすかいに出てたこ焼屋	ほんとうに生徒と行く気かパチンコ屋	お寺さん兼務の教師よう休み	とぼけたはる先生笑顔崩さない	神戸市 中村 か	実戦を時にはしたい自衛隊	正面の弓より恐い味方の矢	珍しい病気で医者のモルモット	おいとハイ息を合わして来た夫婦	聖書通り生きれば飢餓のクルス抱く
	翠光						實						菊野						ゆきを					
							貝						±」						2					

式場で一人の咳に続く咳	岸和田市 清	リモコンのように夫を操縦し	平成の子は出臍など判らない	宇宙服無くてもゆける「月世界」	点滴のようにゆっくり酒を酌む	未来など全く知らぬ子を妊む	黒石市 相	保育器のおちんちん春ほとばしる	連作が土にストレス溜めました	冬苺そっと気くばる寒の膳	幾何学はどうであろうと吊る庭木	千羽目の鶴の涙を見てしまう	十和田市 斉	米寿なお未来にのびる樹を植える	芸術家を自認ベレーをはなさない	虎かなし王者の貌で芸をする	仔をねらう蛇へ親鳥弾となる	哺育器の孫に紺碧の空がある	五所川原市 加	重いだけ赤ん坊より手がかかり	あかんもんやなあと術後に立ってみる	電池入れ替えて心臓監視され	病窓にて	いつの間にやら余生とやらへ追いやられ
	野						馬						藤						藤					
	-						-												彩					
	う						花						劦						人					
音のないひとりの部屋の闇の咳	倉吉市	アムールの岸辺の町を捕虜で棲み	眠りこけその間は虜囚忘れよう	手を合わせ屍体裸でヰゲタ積み	シベリアの友が帰って来る名簿		広島県	消燈の九時です白い日記です	身の上話つくづく聞いているベッド	コルセットが仲間になった着替です	病院の空気になれたカレンダー	居心地はよいが個室の請求書	椎間板ヘルニアの手術を終って	岸和田市	腹立ちを修行足らぬと初鏡	新年に笑い袋を開けました	妬む程あの娘の暮し楽じゃない	ゴミの処理全部この母引受けた	よい天気旧知の友が来ると言う	有田市	固い事言わず折れるも処世術	竿売りの声のどかなり寒日和	退屈を捨てる畑があってよし	宅急便送り送られ十二月
	渡						田							岩	S					松				
	辺						村							佐	.:					井				
	菩句			, e			新造							タン吉						かなめ				

富田林市 室魚鉢 正月無事に越しました を魚鉢 正月無事に越しました を魚鉢 正月無事に越しました	山川草木 諦めるのはまだ早い 経の中の小舟で瞑想しています 歳の中の小舟で瞑想しています ない集い 西宮市	<ul><li>賛成の渦に巻かれて酔っている</li><li>場意絶頂ゴムはいっぱい伸びている</li><li>得意絶頂ゴムはいっぱい伸びている</li><li>第三者だからゆとりのある意見</li></ul>	石に目があるのかと驚いているあの虹は女神の帯と思っちゃうカレーの匂い嗅いで北風やって来た野心あっさり捨てて貧乏神と棲む
岩 松	西	三	
本 本	П	宅	
笑 今	V3	保	
笑     今日       子     子	わる	州	
嬉しさは喪中にも来た年質状嬉しさは喪中にも来た年質状 野り切れぬ円周率で回る街 割り切れぬ円周率で回る街 割り切れぬ円周率で回る街	東京では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	芸の道歩み始めたトーシューズ 新しい語へつなぐエピソード 美しい話へつなぐエピソード で変する で変でする で変でする	紅茶飲む朝の平和がある生活 文机へ今日は詩人の小半日 壁紙の好みも言うて姉妹
松	栗	秋	井
本	谷	元	上
た だ し	春	7	富
î	子	3	子

軽くても身動きさせぬ落し蓋	添え書の賀状で親密度を計る	資産分割株では損の頰かむり	カンラカラ笑っているのは羊だな	倉敷市 田	時止めてカントになれず餅を焼く	初詣で甘酒あって思い足る	喧嘩せぬ子を褒めようか嘆こうか	悲しみの日から格言一つ持ち	何事も夫の逝った日と較べ		手強いぞ孫を味方につけた妻	初泣きをしに来た孫にお年玉	広告が文化ささえている日本	宮仕え無理を承知の下戸の酒	詰め腹を切らされて知る不信感		無人駅なん度別れをみたことか	抜け殼のようでもあんたが居てくれる	振り出しに戻ってばかり土踏まず	明日より今日を大事にしてあそぶ	羊の貌で通しています狼で	広島県 藤	颱風のように北上梅便り	」に庭の言葉に弱い服斜胎
				辺			N.E			田						田						解		
				灸						あずき						恭						静		
				六						き						昌						風		
銀ブラをすれば江戸っ子の顔になり	***	又また泣寝入り	ついてない連休 大雨降りやまず	金借りに来たと思えぬ仏頂面	新春を待たず婿殿新居建て	大田市	健康は天から降ってなどこない	よそいきの言葉でないからあたたかい	冬草は無口の父の愛に似て	新春へ古典にいどむ老いの意地	今治市	ローランサン少女の好きな美女の額	戦争を茶のみ話にする平和	ブランドのおしゃれ似合わぬSサイズ	北風が吹いて戻れぬブーメラン	初春のひとつを願う鈴を振り	豊中市	食うて寝て起きてまた飲む三ヶ日	いたわりが仇で返って来る悲哀	片意地を貫き通して夜が長い	ボケが来る時の覚悟は無策です	覚悟して選んだ道は曲れない	岡山県	一隅を照らして安楽死を願う
	人					藤					越						辻						花	
	見					田					智						Ш						田	
	翠					軒太楼					-						慶						たけ志	
	記					八米					水						子						IT	

i i	バスを待つさも恋人を待つように ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	成人式 嫁にやるのが惜しくなり	傘寿ともなれば孫からお年玉	ローマから絵かきの孫が初だより	寝屋川市宮尾あいき	昭和初期でした あだ名がサイレント	石仏に供えるびんのバーコード	ロボットが初荷に代わる芸を見せ	CDの世にも祖母には歌留多歴	町田市 竹 内 紫 錆	倖せな顔でぼけてる毛糸玉	鍋つつく倖せ家族の初春の顔	食べて寝て二キロ太ったお正月	飽食の世をなげいてる羊達	大阪市 黒 田 真 砂	祝ってくれる話へ水をさしに行く (遠暦祝)	ばっちゃまが寝込むと騒ぎ出す家族	飼い主に似ていると言う褒めことば	喜んでばかりいられぬ年女	寝屋川市 稲 葉 冬 葉	蘇る翁囲んで春の膳	比類なき友好続く五十五年	人多し杖つく人もまた多し
F 7 3 3 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5	ネクタイを締めて出る日が続いてる	れているのがチ	居眠っているのではないヘッドホン	ほろ酔いの客は夜空を褒めて去に	和歌山市 堀 端 三 男	くっついて顔も姿も見失い	落葉焚き楽しむゆとりない時代	虫の目は山の高さも知らぬまま	使い捨ての罪を償うのは誰だ	和歌山市 若 宮 武 雄	話に花咲かして見ても旅の空	はるかなる人生喜寿の坂のぼる	時と場所ただそれだけで運不運	さまざまな色を重ねて白が生き	玉野市 小 谷 仙 山	日本人から見れば外人懶け者	働きすぎと言われ無理して休暇とる	空くじだけ買ってるような宝くじ	初夢を見る隙もなく熟睡す	仙台市 川 村 映 輝	女子駅伝 京の都に攻めのぼる	ふりかえる柳誌重ねて五十五号	友見舞う早く治れよ火打石

一年の計たてぬまま初詣 八尾市 山田姓も添えて教え子賀状来る 八尾市 山田 八尾市 山田 大田 一年の計 は 日本 一年の計 に は の は の は と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は を 詰 め し か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は か と は の は の は の は の は の は の は の は の は の は	<ul><li>○ 京と古りまと書</li><li>○ おりまと書</li><li>○ 中の私は燃えて</li><li>○ の中の私は燃えて</li><li>○ の中の私は燃えて</li></ul>	日の噂にぎやか美容院でまりの中で余生は気持だまりの中で余生は気持だまりの中で余生は気持ちる。	は別 見本のファッションは別 見本のファッションは別 見本のファッションは別 見本のファッションは	き放す愛情 寡婦は意地き放す愛情 寡婦は意地
下		内	上	井
美津留	さ よ 子	寿 恵 子	喜酔	千 寿 子
一歩退きバランス取っている夫婦子育ての母は時には鬼になる岸和田市での母は時には鬼になる。	大家が寝返りばかりうっている 一大家が寝返りばかりうっている 一大都ら後悔の道教えられ 一十和四 一十和四 一十和四 一十和四 一十和四 十二家が寝返りばかりうっている	鳥賊を干す島に一日陽が当る島の鳥 一日島の空で暮れまて行く人と帰るひと下町の酒は足から酔ってくる	張を解くライター 張を解くライター なんてシャボン玉	度でも起きるダルマにはげいしさを競う産米ふえてくのぐさな羊に成った三ヶ日
高須	<b>Bul</b>	小	片	細呂
貿	沿	寺	上	木
金		花	明	魯
太	進	峯	水	木

戦争はみんな嫌いと言うけれど		切な死角でソロバン	倍々に売れた時代のツケが来る	深海のルール魚もライトつけ	人間の言い分なげく神の耳	豊中市	女でも惚れる女将の黄八丈	金魚にも話しかけたい嬉しい日	金の要る話は父を素通りし	暖冬に豪華な毛皮売れる国	大阪市	倖せの過程に苦労というルール	無駄にする資源が泣いている汚染	見送ってその後の便り待つ長さ	年金をゆさぶる入学お年玉	香川県	胃酸過多 定年の日待ちわびる	死刑囚並みに電極手へ足へ	日曜日 風邪こじらせた焼香順	入院の粗食に感謝安眠す	奈良県	こころでは妻に白旗揚げてます	絆の中で浮かされている私	出世するつもり味方に弓を引き
	谷					江					板					松					中			
	П										東					村					原			
	次 男					明光					倫子					迷観子					比呂志			
正月元旦 誕生日なり祝うなり	竹原市	さびしくて月の雫も凍りつく	冬いちご皿一枚にこだわって	しつこいほどに女を生きる仮の世で	冬帽子 火種を少しくださいな	鳥取市	ハイ弁当 毎朝妻に掃き出され	赤提灯を消して片恋酒を飲む	エンヤコーラ ロープが痛いほど凍て	かばん頭に人混みの中をゆく	鳥取県	同じ趣味孫と語れば夜が白み	王義之を語る孫の眸の輝きよ	クリスマスお祭り好きの日本人	なまはげのどこやら聞いたような声	境港市	都市不信 扉がだんだん固くなる	訥弁のサービス嬉しタクの客	誰を撃つ拳銃競技か金メダル	釣船が揺れて私が釣られそう	福岡県	変な世だ餅つくだけで大ニュース	地権者が知らぬ間に杭を打つ	灰色のこんな地球に誰がした
	岡					小			てる		土.					細					横			
						小谷			る		土橋					細木					横地			
	岡								3															

練り過ぎた策に溺れた勇み足	大阪市	束の間の夢が一番性に合う	善悪をほどほどに混ぜ世間並み	かせて	い言葉を胸	1 1 1 1 1 1	わが鹿野 永久に歴史の匂う町	町の花椿はそそと咲きました	2	とつ		初鏡わたし若いと言っとくれ	癖あっ	別れ下手憎い男を又許す	3	今治市	面一本とってライバル抱きにくる	どよめきで心得ている賛成度	ゆとりある心が決める舞扇	離れ住む嫁の言葉が美しい	大阪府	法座では感激帰ればきれいに皆忘れ	短気は損気 余り長くて機を逃し	お金の倫理貯めて置くより使う為
	井					久					津					野					坂			
	上					谷					村					村					口			
	白					ま					八五					京					公			
	峰					まこと					重子					子					子			
ロボットという後輩に舐められる	和歌山県	年頭の挨拶さける回り道	出欠の通知 体調で老いは決め	御自愛と便りに書いて老いの恣意	それぞれへ報恩できぬまま老いる	岡山市	玄海の岩を砕いて波の呪詛	下関ふくに逢いたい途中下車	山頭火のムード嬉しい防府駅	私書箱へ留守を預けてパスポート	竹原市	席譲る少うし若い積りなり	決められることが嫌いで自由席	何何美人どれかに嵌るものないか	受験地獄 親程気にはせぬ子供	藤井寺市	どうにかなる明日へ心をおき替えて	口笛をおぼえてかえる風の中	一粒の薬おまえも荷が重い	少し進む時計を持って遅刻する	和歌山市	腹の虫胸に納めて妥協する	世渡りの秘訣撒き餌も食っておく	謙遜の辞退を鳶に攫われる
	西					井					信					福					田			
	口					上					本					元					中			
	忠雄					柳五郎					博子					みのる					輝子			

二階から妻がモミジの手を振らせ	唐津市	あらたまりましてもやはり寝正月	あい変りませずと叩く医者の門	総入歯いたわりながら初春のもち	芳紀八十杖にたよらぬ意地がじゃま	神戸市	我が陣地揚げる白旗置いてない	心をがんじがらめにする義足	寺町で生まれ臨終は此処国分寺	脇役が舞台の袖で背伸びする	大阪市	愛憎を抱いた万年青の実を愛す	偶然の成り行きにするおもいやり	膝の皿割らないように付き合おう	真っすぐに言ったが悔いてなどいた	米子市	満足のハミング湯気の中に浮き	コーヒーが苦いと判る退職期	ユーモアが素顔で返る齢となり	山一つ越えて古里いいところ	岡山県	気がつけばお化け屋敷に僕もいた	思いきり首を歪めてコンパクト	八ツ当り猫がぎっくり腰で逃げ
	Щ				4	仲					北北				ない	小小					· 荻			
	П					IT					山山					村村					野			
	口高					ど					悟					て					鮫			
	向明					どんたく					郎郎					い子					於虎狼			
厳寒を呵吽の呼吸飛び起きる	倉吉市 淡 路		騙し合い慰め合って来た二人	遠く見る眼つきで人の影を追う	鉛筆で測量してる絵描きさん	和歌山市 山 田	七癖をビデオカメラが追いつづけ	人違いの挨拶からのお付き合い	吹雪く夜は酒と相性いい豆腐	お願いを一つに絞りただ祈る	鳥取県 羽津川	雪衝いて鱈いらんかねえ鳥賊いらんかいね	老農から藁取り上げたコンバイン	傘寿いま自虐の詩が好きになる	雪の家守る傘寿の老夫婦	羽咋市 三 宅	冬枯れの山で炎えてる紅椿	二度の職いくさは低い靴にする	羊の毛愛をはぐくむ絆編む	お元日古希がすぎても紅をひく	米子市 茂 理		徹夜して買うた南座の券おとす	歌舞伎座の列に青い目紛れ込み
	M n					高					公					ろ					高			
	り子					夫					乃					亭					代			

障子の揺れる行動は慎もう	鳥取県	そして二月わたしの好きなアメジスト	この続き夫に内緒にしておこう	やんわりと電話の向うは強気です	不器用な手にしてしまう器用な手	島根県	まだ耳に長持唄の亡父がいる	無位無冠それでも靴を光らせる	金庫だけ飾りになって冬の部屋	春そこに心の扉あけておく	米子市	しあわせを綴る農婦の初日記	一升瓶添えて縁起の荷が届く	牛市のもどりは誰もみな無口	〆かざりつけて牛舎も初春の風	出雲市	終章へ努力の彩を溶く絵皿	核心に触れて絆を確かめる	雪しんしん少年の日の独り言	初詣で破魔矢の白に決意する	弘前市	足跡を重ねて帰る雪の道	外泊の子に念を押す句読点	帰省子に薬の袋隠すなり
	乾					小田					光					小白金					村			
	喜					Щ					井										田			
	与					智重子					玲					房					善			
	志					子					子					子					保			
五十肩背中のボタン遠すぎる	大阪市	太郎を返し次郎帰って膝寒し	炎たしかめ今年も日記帳を買う	鉢巻きを解いて老樹をあたためん	偶然を装う父の風に乗る	米子市	一歩前進 俺の持論の素直なり	美しきラストシーンへ善を積む	石橋を叩く歩幅に明日の夢	なけなしをはたいて獏の夢を買う	和泉市	それからのノリコ淑女に紀子様に	いつまでも親には娘でも娘は大人	ぜいたくな悩みグルメの迷い箸	斜めから見る計算も忘れない	和歌山市	目礼のやがては恋となるふたり	好きと言えず逃がした愛が過去にある	躊躇しているのに開く自動ドア	其処は浅いとライバルに騙された	呉 市	寒の朝野犬の声に起される	山の事故なぜこんな日に登るのか	餅をまだ三つも食べる元気です
	寺					Ш					西					Щ					槇		1/2	
	井					上					岡					Ш					田			
	東					より子					洛					克					英			
	雲					子					酔					子					詩			

判っ 女だか 札 お 新 佗 姉 亀 合 母と子をつなぐ 椅 きさらぎや神を悩ます 頑 旗ひとつ振れぬ男の 古くとも私の好きな義理人情 コーヒーとうどん並んでいる讃 金比羅へ石段踏んでする年賀 白 助 かい 週 と歩を合わせて今日 掌の指に謀反が 束の重さに軽 固 0 師 旗 仕 間 ない 匠 を何 を活けて抹茶のおもてなし 蹴って立てぬ中間 てて素直になれぬ老 でもひとり は腰の ら兄の優しさ身に沁みる 天地さがしに逝ったまま(全盲の卒業生Sさん事故死 切るわたしの椅子が宙に浮く 独身になる気ままなり 時 n \$ んで頭うっている 動きをや 振ってるお父さん い首に 情けの切手はる 頑張る父が 一つ住 軽い口 0 なる 絵馬 管 かましい 0 む 理 いの意地 ぼり坂 好き 0 職 岸 岸 陣 米子市 和田市 和 高 岡 知市 岐 H Ш 市 県 芳 小 金 Ш  $\equiv$ Ш 本 輪 地 澤 玉 通 狸 幸 夕 泉 子 恵 彦 村 雪 年玉 歩け 絵画 初 さあひつじ春の 子ひつじと地蔵の膝をなでてくる < お年 能 黒 意地っぱり手のなる方へ背を向 すみませんすんなり言えた爽やかさ 古寺巡りひと味ちがう雪の バカになるくすりをちびりちびり呑む 砂漠には ハイハイと素直にくらす老母 体な 玉  $\overline{\nabla}$ かさになれ 詣 0 に似る歩幅と歩く寒の だがゆを見て買いまし 歩け足が謀反をくわだてる 展 玉 は の礼が声変りする受話 が美味しく煮えておすそ分け で女の神へ 電卓だけがさわぎ出 孫のふるさと雪見せに い口が胃袋重く 無血無情 ひとね 嫁と行く日の日本晴 て不平のありったけ 0 わらじをはきなさい 一言茶を入れ たの 0 蟻 2 が住 する た春 路 事 京 L 2 の知 歌山 n 中和田市 の種(豊作うらない神事 茨木市 高槻 鳥 it 取県 3 惠 県 市 堀 竹 古 天 さえき 内 満 野 三千代 花代子 良 中 71

江

ž

妻はベッドで俺は畳で好きに寝る	高知市 北 川	秋の月噂の種が好きらしい	列に芝居を	産	世紀支えた		縫いぐるみおどけてはねる午後の部屋	人形よ一人語りの日が続く	冷たさもひとつの愛として受ける	タイマーに預けて主婦の時間割り	岡山県 松 本	情念を断つ禅堂に愛の鞭	宿坊の朝餉が匂う座禅堂	雲海を見下ろす高野槇の下駄	一切の雑念を捨て高野入り	唐津市 筒	世話好きのばあちゃんが居て共稼ぎ	すっきりと片づきすぎて落ち着かぬ	当分の分け前があり母看とる	絵空事並べて年頭所感かな	和歌山市 細	白い雲流れ鏡のようなビル	ざわめきの中から彼の声を聞く	てる
	竹竹					一御					平元					井朴					川稚			
	萌					前					江					電					代代			
よちよちが上手に摑むひなあられ	寝屋川市	言い訳を覚えてしまった九官鳥	ふられたら私はわたしボヘミアン	ジョーカーがふところにある無言劇	お手玉の小豆が鳴ってるメルヘンよ	島根県	春よこい姉と二人で旅に出る	心喰う虫が一匹離れない	まな板を乾かすと嘘ばれてくる	手を振れば手を振り返す姉八十路	松江市	杯を伏せて妻には言えぬこと	黒髪を巻いてうれしい日がつづく	凍る日は優しい言葉が聞きたくて	尽くしても春の情けはすぐ消える	出雲市	風は気ままで良い話悪い噂も乗せてくる	メガネ無用耳も達者でオバタリアン	翔んでます老けていくのが嫌だから	怖いほど思いが叶う六十路坂	岡山県	鍋囲む我存在の小天地	良心が裏道そっと行けと言う	長い長い旅の八十路の茶がうまい
	平					松					竹					石	る				千			
	松					本					内					倉					原			
	かすみ					はるみ					すみこ					芙佐子					理瑛			

三歳の智恵にほとほとまいります	割り込みのお尻が語る人生譜	御発展のためと乾杯したけれど	和歌山市 坂	泣くという手もあろうに意地を張り	浮き草はあわれ波紋にさからわず	女房には目配せだけで事足りる	諫早市 原	お正月済んで患者あふれる医者の門	投函の後で気が付く誤字の事	お年玉 子供万札かぞえてる	貝塚市 行	外吹雪 茶の間の温い鍋料理	屠蘇の膳めでたく揃う三世代	石段へ息をきらして神信じ	倦怠期 無言でねばる意地の張り	和歌山県 岩	娘が二人産んでよかった遠慮ない	昨日春 今日は嵐に身が縮む	暖冬に猫もうろうろ日向ぼこ	安心して食べているのはうちの柿	河内長野市 植	代理母そんな便利さ不思議さよ	遺伝子がどうのこうのと載るニュース	愛し児へ二目ゴム編しています
			部部				が田メ				天					口崎					村村			
			紀				イシ				千					瑞瑞					喜			
			九久子				ノユン				代					<b>.</b>					古代			
	菩薩にも夜叉にもなって子を育て	蜆舟 瀬田はしぐれて鐘の音	落葉焚く煙尼僧の冬木立	箕面市	雪やこん霰やこん行事減り(暖冬)	期待感 一転憎悪マイホーム (土地保有税	幾何学だ想い出したねビリヤード	西宮市	安物ばかり着てる私を買い上手	八方美人も妻には本心ぶっつける	爽やかな挨拶朝の小学生	大阪市	冬眠をするかのように里白し	仔羊の頃には迷いなど知らず	弥陀の掌の中で煩悩くり返す	出雲市	枯菊を燃やせば亡母の匂いする	一日が翔ぶ如く逃げ年の暮れ	妻旅行おでん一ぱい炊いて行き	堺市	怒らせて冗談だよと詫びを言う	顔立てる為には損もやむを得ぬ	年金と繋がる過去をふと思う	豊中市
				椎		11.		瀬				岡				竹				柿				上
				江				尾				田				治				花				田
				清芳				六郎太	62			ふみ				ちかし				紀美女				登志実

苦も楽も想い出はみな懐かしい	島根県	初詣で祖母の歩調はまだ確か	で挨拶してる里	帰りに開く甘		恵まれたエリートコースに穴がある	緩慢を許すと老いが深くなる	仕事には鬼と呼ばれた父の靴		孫が来て子が来て自慢の時が過ぎ	りだけ幸せ足りない年金	んがり		計が届く賀状貰ったばかりにて	えて待つシク	路地裏で猫も情けを貰い受け	大阪市	終章を飾る豊かな嘘ひとつ	諦めの境地に生きる幸もある	愛憎のはざまで回る夫婦独楽		どうせなら上手な嘘にしてほしい	佳い夢に朝のまな板よく弾む	インドへ踵を	吹田市
	藤				Ш				井				岩				町				安				茂
	原				崎				上				道				田				本				見
	鈴				君				照				博				達				晃				ょ
	江				子				子				友				子				授				よ志子
歩計 途中酒屋で止	靖国のみたまも戦否定する	曼陀羅絵描いて心の棘を抜く	鳥取県	節約も戦も知らぬ子が二人	ひと口のお酒で妻らしき色香	縁側の福寿草に独り言	堺市	慕われてもマザーテレサには遠く	入社した時から定年知っている	忙中閑 冬至の影をじっと見る	守口市	世渡りのコツ等いらぬ過疎に住む	良い友が沢山集い茶の旨き	いまに春 病の母を慰める	島根県	レジもない店で取られる消費税	減塩のおせちの味でお正月	ひな祭り男の孫の誕生日	大阪市	でさえ呼べば返事	折れた矢は子供に見せぬ父でした	無駄だとは思う高価な化粧びん	出雲市	粧えば一刻和む朝の雪	あの頃の夢を知ってる欠け茶碗
			幸				荒				結				高				神				小		
			家				Щ				城				野				保				玉		
			單				磯				君				律				拓				満		
			車				子				子				子				生				江		

出雲市	子の身長体重ふえて病気ふえ	使い捨て嵩じてごみに困じ果て	即位の礼祝うわたしは日本人	和泉市	虚礼廃止やっぱり嬉し年賀状	責任のない相槌に痩せてゆく	巣立つ子が巣立って見えてきた自分	富田林市	時どきは遠い耳になるもよし	焼きいも屋山の村までやって来た	豆腐屋が休業さては困ったな	鳥取県	贅沢に馴れて感激ない味覚	喜ばしたい玩具を選ってくたびれる	弓を射る禅の心が的を抜く	大阪市	宿命と悟れぬとこが凡夫なり	指輪一つ外すと自由の鐘がなる	引くドアの次は押すドア ビルに住み	豊中市	損得は度外視します親心	冗談に混ぜて本音を覗かせる	外孫の声正月を盛り上げる	岡山県
金				岡				片				田				冨				-				池
村				井				岡				村				岡				瀬				田
				やすお				智恵子				きみ子				温子				福一				半仙
妻連れて能登の旅	父連れて梯子酒	岡山県	お年賀に来た孫に背丈を追い越され	初風呂へ温泉の素入れてよし	大阪市	ことづけを届けてほしい亡母の耳	古畳 昔話を貯めている	米子市	ジャンボくじ外れてまともな年迎え	病む妻は詫びごと多い賀状書く	守口市	木枯しに開き直って寒椿	デパートの下着売場で待たされて	大阪市	飽食のもったいなくも餅にかび	足るを知る心静かに除夜の鐘	姿ない影に追われる十二月	寝屋川市	桜咲く十五の春を祝い合う	建前はどうあろうとも石油です	塞翁が馬 二十歳の君に贈ります	竹原市	川沿いに少し歩いて見る旅情	年金で妻をねぎらう旅三日
		直			清			木			森			塩				堀				石		
		原			水			村			Щ			田				江				原		
		- 1																						
	雲市 金 村 青 湖 妻連	の身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連	の身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅の身長体重ふえて病気ふえ 災連れて梯子酒 岡山県い捨て嵩じてごみに困じ果て	身長体重ふえて病気ふえ 身長体重ふえて病気ふえ 捨て嵩じてごみに困じ果て の礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越されの礼祝うわたしは日本人	の身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅の身長体重ふえて病気ふえ ど連れて梯子酒 岡山県 直い捨て嵩じてごみに困じ果て お年賀に来た孫に背丈を追い越され位の礼祝うわたしは日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越され	の身長体重ふえて病気ふえ の身長体重ふえて病気ふえ の身長体重ふえて病気ふえ が捨て嵩じてごみに困じ果て の身長体重ふえて病気ふえ が捨て嵩じてごみに困じ果て の身長体重ふえて病気ふえ お年賀に来た孫に背丈を追い越され お年賀に来た孫に背丈を追い越され が風呂へ温泉の素入れてよし 大阪市 清	身長体重ふえて病気ふえ 田雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 とではり嬉し年賀状 お年賀に来た孫に背丈を追い越されの礼祝うわたしは日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越されの礼祝うわたしは日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越されの礼祝うわたしは日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清のない相槌に痩せてゆく ことづけを届けてほしい亡母の耳のない相槌に痩せてゆく ことづけを届けてほしい亡母の耳	の身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 で身長体重ふえて病気ふえ お年質に来た孫に背丈を追い越され はの礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越され なの礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清での礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 が 単立って見えてきた自分 古畳 昔話を貯めている	身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 り長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 とづけを届けてほしい亡母の耳のない相槌に痩せてゆく の礼祝うわたしは日本人 の礼祝うわたしは日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 が風呂へ温泉の素入れてよし お年賀に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 ではり嬉し年賀状 お年賀に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清	身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 とは遠い耳になるもよし お年質に来た孫に背丈を追い越され が風呂へ温泉の素入れてよし お年質に来た孫に背丈を追い越され が風呂へ温泉の素入れてよし が関連ではしい亡母の耳 が異立って見えてきた自分 お年質に来た孫に背丈を追い越され が風呂へ温泉の素入れてよし が遅れて様子酒 とでけを届けてほしい亡母の耳 が異されてよし が遅れて様子酒 とされてよし。	身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 要連れて能子酒 身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 とづけを届けてほしい亡母の耳のない相槌に痩せてゆく の礼祝うわたしは日本人 の礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 ででごみに困じ果て おり長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅	身長体重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 守口市 森 学口市 森 学口、 一 本 学位、 一 本 学の本い相槌に痩せてゆく の礼祝うわたしは日本人 の礼祝うわたしは日本人 の礼祝うわたしは日本人 の礼祝うわたしは日本人 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし かしばり嬉し年賀状 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし お年賀に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 でも重ふえて病気ふえ 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅	島取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森 安連れて能登の旅 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 とでは困ったな 出雲市 金 村 青 湖 妻連れて能登の旅 とでは困ったましいこみに困じ果て お年質に来た孫に背丈を追い越され た阪市 清 でいればり嬉し年賀状 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし の礼祝うわたしは日本人 和泉市 岡 井 やすお お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 を 村 青 湖 妻連れて能登の旅 ともな年迎え といも屋山の村までやって来た お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清 とが休業さては困ったま は な年迎え というというというというというというというというというというというというというと	は関れて感激ない味覚 は 村 青 湖 妻連れて能登の旅 と 村 青 湖 妻連れて能登の旅 と 世界で持たされて に馴れて感激ない味覚 は 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな 富田林市 片 岡 智恵子 古畳 昔話を貯めている つ子が巣立って見えてきた自分 ことづけを届けてほしい亡母の耳のない相槌に痩せてゆく 富田林市 片 岡 智恵子 ことづけを届けてほしい亡母の耳のない相槌に痩せてゆく コーヤーが 関ロ中央 では、 一 本	はたい玩具を選ってくたびれる 村 青 湖 妻連れて能登の旅 としたい玩具を選ってくたびれる 村 青 湖 妻連れて能登の旅 と 村 青 湖 妻連れて能登の旅 と 対	までは、大阪市 塩 といい元具を選ってくたびれる といい元具を選ってくたびれる といい元具を選ってくたびれる といも屋山の村までやって来た とは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 でパートの下着売場で待たされて に馴れて感激ない味覚 鳥取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな 富田林市 片 岡 智恵子 たいも屋山の村までやって来た とは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たいも屋山の村までやって来た とは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たいも屋山の村までやって来た お中国之では、	大阪市 冨 岡 温 子 足るを知る心静かに除夜の鐘 大阪市 富 岡 温 子 足るを知る心静かに除夜の鐘 大阪市 清 御 妻連れて様子酒 女連れて様子酒 女連れて様子酒 女連れて様子酒 とっぱり嬉し年賀状 かり ない 相槌に痩せてゆく ことづけを届けてほしい亡母の耳 たいむくも餅にかび ちゃっぱり嬉し年賀状 かり ない 日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越され が風呂へ温泉の素入れてよし 大阪市 清 のれ祝うわたしは日本人 お年賀に来た孫に背丈を追い越され がしばり ない はい	大阪市 富 岡 温 子 と語れるとこが凡夫なり 大阪市 富 岡 温 子 と音を知る心静かに除夜の鐘とに馴れて感激ない味覚 鳥取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 いも屋山の村までやって来た きは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たばしいに見を選ってくたびれる 高田林市 片 岡 智恵子 たびれる まは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たびれる まは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たびれる ボーウンが巣立って見えてきた自分 ない相槌に痩せてゆく 富田林市 片 岡 智恵子 たびれる 大阪市 塩色に馴られて見えてきた自分 たい相槌に痩せてゆく コー 本をは違い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たびけを届けてほしい亡母の耳の礼祝うわたしは日本人 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし 米子市 木 で口市 森の礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清のない相槌に痩せてゆく スター 大阪市 清のない相槌に痩せてゆく カス・大阪市 海のよい石間に痩せてゆく カス・大阪市 海の本の礼祝うわたしは日本人 お年質に来た孫に背丈を追い越され としてごみに困じ果て 父連れて様子酒 女連れて能登の旅 要連れて能登の旅	と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり としたい玩具を選ってくたびれる したい玩具を選ってくたびれる したい玩具を選ってくたびれる したい玩具を選ってくたびれる 島取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな 島取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな 自取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな ことづけを届けてほしい亡母の耳のれ祝うわたしは日本人 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし 米子市 木のよい相槌に痩せてゆく 富田林市 片 岡 智恵子 ことづけを届けてほしい亡母の耳 た 大阪市 清のない相槌に痩せてゆく 第日本 ト 岡 智恵子 ないり嬉し年賀状 カ泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし 大阪市 清原止やっぱり嬉し年賀状 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし 大阪市 清泉と体重ふえて病気ふえ 光子市 木 で口市 森 は では では ともな 年迎え また は かん は としな は な ともな 年迎え また な が 風呂へ 温泉の素入れてよし な な な に 野 な に か に 野 な に か に	と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり 大阪市 冨 岡 温 子 とるを知る心静かに除夜の鐘とい玩具を選ってくたびれる に馴れて感激ない味覚 鳥取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな に馴れて感激ない味覚 鳥取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森屋が休業さては困ったな に馴れて感激ない味覚 鳥取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森のない相槌に痩せてゆく 富田林市 片 岡 智恵子 ことづけを届けてほしい亡母の耳 かいも屋山の村までやって来た きは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 ことづけを届けてほしい亡母の耳 かいも屋山の村までやって来た コーカ 神泉市 岡 井 やすお お年質に来た孫に背丈を追い越され 大阪市 清原止やっぱり嬉し年賀状 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし 米子市 木 古畳 昔話を貯めている 光子市 木 古畳 昔話を貯めている カー 大阪市 清原止やっぱり嬉し年賀状 和泉市 岡 井 やすお お年質に来た孫に背丈を追い越され 関山県 直 父連れて様子酒 とでは登の旅	世界である。ことでは関いては、 一つ外すと自由の鐘がなる と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり と悟れぬとこが凡夫なり といい玩具を選ってくたびれる に馴れて感激ない味覚 したい玩具を選ってくたびれる に馴れて感激ない味覚 自由の鐘がなる 意田林市 片 岡 智恵子 のない相槌に痩せてゆく 富田林市 片 岡 智恵子 のない相槌に痩せてゆく 高田林市 片 岡 智恵子 のない相槌に痩せてゆく 和泉市 岡 井 やすお お年質に来た孫に背丈を追い越されてよし の礼祝うわたしは日本人 和泉市 岡 井 やすお お年質に来た孫に背丈を追い越されないれている ことづけを届けてほしい亡母の耳が出立って見えてきた自分 の礼祝うわたしは日本人 和泉市 岡 井 やすお 初風呂へ温泉の素入れてよし 大阪市 塩 大阪市 清 変ない影に追われる十二月 と悟れぬとこが凡夫なり 大阪市 富 岡 温 子 をない影に追われる十二月 とでいい玩具を選ってくたびれる 第屋川市 堀 ドアの次は押すドア ビルに住み 大阪市 富 岡 温 子 をない影に追われる十二月 大阪市 塩 大阪市 塩 大阪市 塩 大阪市 塩 大阪市 塩 大阪市 清 のない相槌に痩せてゆく 和泉市 岡 井 やすお が風呂へ温泉の素入れてよし 大阪市 清 交連れて梯子酒 変連れて能登の旅	世界の次は押すドア ビルに住み と 村 青 湖 を で が 表 で が 表 で が 表 で が に は と で が と も 石油です と 性 の か に い なく も 付 に 別 る で が 果 立 って 見 えて きた 自分 の い 相 値 に 痩 せ で か て 来 た き は 遠 い 耳 に なる も よ し た い 玩具 を 選 か に 解 る で が 果 立 って 見 え て き た 自分 の な い 相 値 に 痩 せ て ゆく	要申市 一 瀬 福 一 建前はどうあろうとも石油です	世中市 一瀬 福 一 建前はどうあろうとも石油です は度外視します親心 豊中市 一瀬 福 一 建前はどうあろうとも石油です と悟れぬとこが凡夫なり 大阪市 富 岡 温 子 と信れぬとこが凡夫なり 大阪市 富 岡 温 子 と信れぬとこが凡夫なり 大阪市 富 岡 温 子 と信が休業さては困ったな 鳥取県 田 村 きみ子 木枯しに開き直って寒椿 いも屋山の村までやって来た きは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 たは遠い耳になるもよし 富田林市 片 岡 智恵子 木枯しに開き直って寒椿 守口市 森のない相槌に痩せてゆく 富田林市 片 岡 智恵子 た

流急娘一母 椿身 椿 U b つのうち そやか 期一 0 落 to たくし 忌 0 し振り袖 森に飛 会 0 へ傾い 七 に大きく 0 年も 今 着 日 び 12 てゆく椿のれば雪の紋 また雪 椿のひ は悲しい娘と訣 火をさせてか 椿 咲 らく かい 舞 7 音 3 木 43 6 3 n

> 藤 村

> > ま

た飲飲

んで帰る箸でも揃えとこ

でん屋に大根豆腐食べに

行

身近

挙ひ

びを入

小 林

由

多

八

木

Ŧ.

代

女

家運

盛

孫が

並

2

だ

お

年

定 好きですと言ってしまえば楽になる 妻もゆっくり朝を起き

遠

Ш

п

になるコツを覚えてよく泳 輪を握ったまんま息を引き 取柄とてない父でよい の合唱を行 0 暗 号解 く左 17 82 コ 遷 > 0 ピュ 3 7 有 働

宇宙

6

菜

0

花 か

何

知

恵

新

聞

0

見

出

L

E

みえる社

の個

をしたむ

3

10

か座

骨神

経

痛 性

ス 年 理

遅

延

雪も

ち

らちら風もでる

0

計

年

金でどう暮らそう

冬も寒波に

痛

む後遺

症

れ星に

浄

土へ

消えた娘を思

Va

野

田

素

身 郎 家族

0

涙すぐに出ず

が

逝

って巷は

乾いた風ば

か

n

千紫万紅

私は花より美

しく

力

のない

家でひ

っそりもてなされ

華麗なる脱皮 舞台は満開なんぼでも代打が出せる底

芳 仙

住

-34

もうとても似 擢 して だ 奏 0 勝 17 涯 0 軽 0 簡 0 た一 触る 彩 ょ ٤ 早 が 别 神 8 0 0 を K 12 10 12 も孫 をね 軽 重 悪 姉 n 平 3 0 H 12 V2 味 10 冷 う 安初 さる命 を我 夫婦 筆 ね 出 冗 妹 人 K 度 Vi る寂 と音 0 まだこだわ だられてよし生きるべし 0 例 番 談 0) くぐってああ が 庫 母よ母よと泣くごとし 顏 心 と勝 お だっ 昔 涙 期 外 10 から をじっ 語 B と年 痴 屠 値 が楽 話 を見てる雪 0 絵など画けませ 手に たとは 恋心 あ n あ 屋 12 蘇 0 が眠くなる 思わ 12 3 酌 ŋ か かい 孫 1+ と見 する ŧ 明 人取 0 13 司 かい でく ている帽 会決 材くる 17 事 n 知 しんど 聞 す らず 3 元 る < お 雪 月さん 朝 n め 雷 L ょ 子 水 辻 波 松 多 粉 JII 野 白 五 千 杜

渓

子

ステッ

+

0 6 嵐 服

癖 ばっ

は

何

返

魚 0 "

0)

包

か 末

りうち でも裏

0)

雑春ペ

夜 1

0

行

ふと思う

K

着

t

T

男を信

C

節

約

2

V

うも

0

かい あ

ŋ

7

た津秋木

腰

殊

伴気

仲抜ま

首お IF. 年 暑 突 意 を振 月も 0 H ない 欲 兀 (増える度忘り)寒いの変化 ば が手 H ま かい る足 らだあ 休 つに 日 3 82 凧 Vi 0 < 2 捆 貰えぬ だから た杏の 出 2 12 0 V きれ て老化 厳 こころを子 12 備 れと勘さ L 種 洗 步 な え燃えて 10 を待 ばなれ 冬の 6 濯 12 垂ら 3 違 機 てほぐさね 天に 老 たせ Vi 40 10 貰 とく 3 紐 う 0 舠. ば 久 家 代 仕 男

翁

書竹日青生

火消 てない す 換 な る た セ 毒 気 寺 < 3 .7 10 扇 0 n 坂 児 月 島 原 5 宵 몸 明

楽

庵

根順

来

坂

誰 K

か

がこわ

L

た道.

L

ぐり

逝くとは決

め 10 4

14 な

を

石

ころ

2

た て逝

43

踏

2

的

1

る

た

80

なる

ル

0

12 老

友

連

n

便 コ

n

金

井

文

几 ワ保耳去ホ 峠 妻 君五瘦 大国 意汐友爪窓 型 P 底 地風達 切開 0 身 3 D 0 寸 t 正会 E 者 ま 子 術 > 名 に 17 0 釘 蛙 0 百 少 0 0 7 らまで も大物 厳と滅 これ に叱 指 あ 1 バ は 誰 年 ぬ顔 0 頑 7 まり も応 党利 して 7 生 0 口 1 古 勝 n 63 43 ンガ は 終 6 算の袂 きてく 1 10 る か 痛 ル 多に ならば 6 12 名 拙 n n 3 カ 0 援 党 風 小 の鈴揺さぶるの鈴揺さぶる 下り たく は 羊 者だけでな E 好きな名飽 略 なは が側 派 手 追うて 無い てく 春従は 職 風 2 Vi な 出 坂 な 追 利 とい いてくる を入 かい 風 風 つうも と知 る茶番 お に あ 出れ 光 13 派 なる 父さん る 溝 う た 番 0 60 白 る か 入 か 劇 幅 な るれ す を 昼 書 岩 野 I. IE. 本 村 木 藤 雀 太 甲 水 茂 踊 津 7 吉 客 理笹舟 老妻 もう 儀 霊 底 石 紅 中 T 湾 洋 酔 ス 冷 雪 凧 庭 60 東 x 17 柩 と欠 色 です 陽 1) つ車の " 之 に 票 な 0 7. 0 0 1 華や は運 さん To 待 石 とさよなら 死 カ運 負 かい パ敵 チをする楽しさや古 命比 伸 は it 欲 をとっ かい 勝 ~ U > 武 托 つ全集と で合格 鴻 何 屋 ぬ 偶 鉢か クをさせ 茶士 0 L ささを 屋隠 たが情 毛ぼ となる日を恐 ぞここは に句 0 60 と書 より 出 た耕 の棲 僧 to L 雛 会 增 無 n 合 交 格 0 に流切 まひ 子も 花さん 0) ることに b 京 渡 す 10 軽 人 た善紫さん 10 7 お 0 月 金 境 平 す 城 冬の され 寺 橋 閣 n t あ 和步 地 方さん 3 なは 寺 かい か n 町 とニ 色 3 慣 軽 智 n 42 状 n ホ 本 SII] > 大 高 田 萬 矢 杉 恵 萬 + 鬼

郎

遊

朗

的

小 出 智 子

り立 ち i ŋ 7 て Vi る胸 梅 も咲 の奥

ごは せせらぎの音が んですよと言うてもらえるまで生きる 肘を突っ張ることもない

小路 に並 べてあった植木鉢

袋

寒色 身は一

0

好みはずっと昔から

0

実印

があ

ても使うことがない 亡妻によく似て立止

界

は

百段までと知

る動悸

ス停で今日

0

天気を話

合う

U

とつ

0)

絵 5

る

黒 III

紫

田 柳 宏

西

高 薫

橘

吠えるだけ吠えて負け犬姿消す 越境をしたなど雑草気にしてず

n

もよし

梅に

止

0

7

V

3

雀

一架にまだ敵中

横断

の小

石に月日書

V

た恋 百里 言うだけはきっ

ちり言うて来た辞

齡

だけは亡父を超えたが未

だ半

表端

けばこと足る役の難しさ

風

投

第 時 14 3月 皆生温泉会館 П 31 日 日 取 (米子駅からバスで約15 県川柳大 午 前 10時 開場

会 日

澤

車

高

薫

中 谷

恵美子

弘

香

帽 子

長谷川

些

光 朗

司

選 選

辿 3

3 す

「スプーン」

投句1000円 出席150 席題なし(各題2句吐・出句締切正午) 0円 作品集呈·3月15日必着 (作品集・昼食を含む 森 Ш 盛

会

費

懇親会費 句 先 20 T 689 00円 -35 米子市 (希望者のみ当日受付 吉岡 33 角田千

\*各川 鳥取県知事賞ほか8位まで(出席者優先 日宿 委員会宛 第14 柳社会長 泊 希望者数を3月15日 П お知らせ下さい 鳥取県川柳大会実行委員 は懇親 会の出席者数と前 までに -秋方 実行 会

-37 -

尾 金 新

崎

学

呈

橋立 橋立

を縦に見下ろすのは

男

橋立

を横に眺めて春

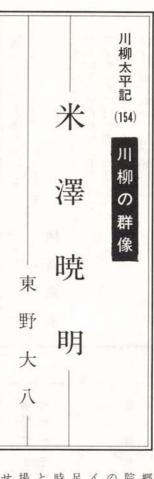
0)

情

賞

桜 Ш

選



花に包まれてちんまりと座ってござる。 城跡には中江藤樹の銅像が、春なら満開の桜 風光明媚な水郷都市である。 愛媛県大洲市は、 伊予の小京都と称される この五万石のお

澤暁明で、今も水郷川柳社の川柳屛風に収ま 親睦宴で、この色紙を頂いたのが他ならぬ米 ういう旅の句を遺している。この歓迎句会の 昭和11年ごろ、当市を訪れた麻生路郎はこ 社宝になっている。 この鮎は藤樹先生も食べた鮎 路 郎

柳教養講座とに健筆を揮い、誌齢もとっくに がこの誌を主宰し、水墨の表紙画と巻頭の川 今川椋影らに暁明、 た。椋影が昭和50年死去したあとは、 『川柳水郷』は、昭和7年4月の創刊で、 可州、 晩風らが世話人だ 暁明

> 世当時の思い出を纒めてみるとこうなる。 和62年に一年間にわたりエッセイを寄せてい 三百号を越えている。 この川柳誌に、晩明主幹の依頼で筆者は昭 暁明登場の部分を再録しながら、 彼の在

生活にとって、月一回の川柳句会は何にたと 身重の妻と住んでいた私の、なすすべもない 郎などのベテランがクツワを並べていた。 という立派な吟社があった。御大は今川椋影 えようもないほど楽しい一夕であった。 ンペン生活八か月、お寺の位牌堂の板の間に で米澤暁明、上甲可州、堀内暁風、 椋影さんは歯医者さんで、ここへくると水 隻手で海外引揚者、無一文で職もなく、 「私が郷里大洲へ引揚げた時、 水郷川柳社 井関 元

> とっては、当節の特級酒の味がした。この酒 院へ、月一回見当で医療品として日本薬局方 せて、柳談に話が咲いた。 場は技工室で、プラスチックの義歯をかき寄 足で変な酒を飲んで盲目になった連中もいた 時節なので、今川製の銘酒は、のみ助の私に イダーを混入して酒代りに飲む。戦後の酒不 の純正アルコールがくる。それにラムネ、サ 郷川柳社同人の誰かがいた。この今川歯科医

暁明さんは小学校の中年の先生。

説する。隻手になって二年目というこちらは まだ身障者なる領域から程遠いので、 は禁物、 『身障者を遇するには、同情や差別的言動 並みの人間扱いせにやいかん』と力

明センセイヨーと、まったくだらしない」。 と足下の瀬戸もの火鉢に足をつっこんで、 お互いがまだ三十台、頭髪黒く酒香満ちれ 「そうだ、そうだ」

暁

紅のカンバセであった。

は、郷里の人物だけに戦前の北京あたりから 詠、欄の諸家吟詠でお目にかかったもの。 の別囲いものの中にみる大洲市米澤暁明の名 などは本誌の前身『川柳雑誌』の 白墨の先が知ってる気短かさ 自転車にかけたくもの巣笑えまい

媛三羽ガラス』である。
郷でも書いている「川柳塔自選句集」の 。愛細でも書いている「川柳塔自選句集」の 。愛ったいのでは、この人と肩を並べて今まっかりおなじみだ。この人と肩を並べて今

等双光旭日章を受賞している。 等双光旭日章を受賞している。 等双光旭日章を受賞している。 等双光旭日章を受賞している。 等双光旭日章を受賞している。

川柳は昭和八年からで、柳号の暁明は師に 当る前田伍健の命名。愛媛川柳文化連盟副会 長、川柳塔社参事、水郷川柳社会長兼機関紙 長、川柳塔社参事、水郷川柳社会長兼機関紙 その底にあるあたたかい人なつっこい人柄は、 多くの人々から慕われ、四国の川柳人は、伍 健亡きあとの暁明先生で誰知らぬ者とてない トップ柳人である。

た大洲市長選挙であった。

地へはるばる同行して頂いたり、大変なお力内を一緒に回ってもらったり、また、昔の任暁明先生は不自由な足を引きずりながら、町暁明先生は不自由な足を引きずりながら、町

恥である」と岐阜の筆者の手許まで、彼の檄 させねば、わが水郷川柳社同人の顔が立たぬ、 幸男(たけし)先生にすぐ連絡をして頂き、 会となった。その時の情景はビデオに取って 館二千人の決起集会での激励の演説だった。 添えを頂いた。その上、きわめつけは市民会 ピーがこのあと到着 が舞いこんだ。そして当選の記事の新聞のコ が水郷川柳社の誌友で川柳人、なんとか当選 わが事のようにお世話を頂いた」(『川柳水郷 る。また、市長に就任するや参議院議員仲川 あり、私の家の家宝として永久に保存してい 会場は笑い声が絶えず、なんとも珍らしい集 ユーモアあふれる中にも迫力ある応援演説に "暁明先生の思い出、桝田與一 (大洲市長)。 この大洲市長選挙の際は「桝田候補は、 b

「こんなうれしいことは二度とない。わが「こんなうれしいことは二度とない。わがれたもこの人らしい一途さだと筆者はそいかにもこの人らしい一途さだと筆者はそいかにもこの人らしい一途さだと筆者はそれ、字和島からは『鹿の子』誌などが出たが、れ、字和島からは『鹿の子』誌などが出たが、れ、字和島からは『鹿の子』誌などが出たが、

時明居には、伍健染筆の色紙、短冊半折が 数多秘蔵されており、数年前に落成した結構 数多秘蔵されており、数年前に落成した結構 な本座敷の床には、立派な伍健の軸がかけられていた。川柳の話や、水郷誌の教養講座を れていた。川柳上の信念は「人間陶冶の詩」と いう路郎の教示と、伍健の川柳真情美の作句 は巧を掲げてきた。

60年5月であった。 60年5月であった。

生き場所がここにもあった屋根の草

平成二年三月十三日死去。享年八十一歳。句として使われた晩明の持ち句である。で、これは臨済宗妙心寺派の掲示伝導用の名

法名川柳院五山暁明居士

■次号は「長谷川鮮山」

暁明の心意気の現れとみてよい。

# 柳龍裏三篇研究(サ)

大 佐 田 藤 秀 要 干· 人 紀 木 内 木 迷 恒 敬 朗 久 . 七 西 久 原 保 博 亮

鈴木倉之助 故 岡 田 甫

106 べつかうの折レよ張形ハかわぬか

分からぬ 物屋の言葉らしいが、前半のごが何のことか 向に不明。 佐藤―誰が誰に向かっていっているのか、一 「張形ハ買わぬか」はどうも小間

からない。 七久保―小間物屋のセリフ、と思うが、分

説となろう わずかに、小間物屋の言葉らしいというぐら い。従ってもし解を付けるとすれば、各人各 岡田―大難句。本句には何の決めてもない。

107 女房が留守だとどふかしたく成り

> **欝勃してくるという人間心理の機微を捉えた** 句のようである。 まに女房が一夜留守なんかすると、不思議に 所にいる時は、格別欲求も少ないくせに、た く」という意に訳すべきか。何時も手の届く 佐藤一とふか」はこの句の場合、「なんとな

には、 西原―賛。「ない物ねだり」の類である。遂

岡田―同 時は得がたし留守のうちく 五五24

108 さつばつの音の尺八で門トへ立

時何処で敵にめぐり会うかも知れない。その 佐藤―虚無僧となって仇をつけねらう侍、 何

> んでいる、というほどの意味であろうか。 だから、瀏亮の尺八の音も、自然殺気をはら 時は、一刀の下に切り捨てるという意気込み あみ笠で殺伐の音を吹き歩き 拾一〇9

七久保—礎稿賛。

尺八は仇の無いが上手なり

岡田―同 西原一賛 口おしくなひ虚無僧は立派なり

よしの山しばらく過きてものを言っ

奥の千本といわれる日本一の桜の名所であ 佐藤=吉野山の桜、俗に下の千本、中の千本、 40

歓声を発した、というほどの意か。 しばし無言、ややあって我に返り、はじめて 主題句は、そのすばらしい景観に絶句して

七久保一「これはこれはとばかり花の吉野山」 吉野山引ッきりもなくほめて置き

で知られる貞室を詠んでいる。 吉野山お久し振りの様に誉め 吉野山十七文字でほめたらず

頭にないとおもしろくない。 西原=七久保説に賛。貞室の字余りの歌が念

### ―貞室の句です。

### 110 徳は沓をはいて、飯をくい

放されたという。 が、後、瘡毒を病んだため、門弟の列から追 佐藤=一徳は岡本一徳斎のこと。京都の医師 一徳斎はその一人に数えられてはいた 味岡三伯の弟子。三伯には四人の高弟あ

けの句案のように思られるが、どうであろう もので、単に、名前の「一徳」を援用しただ こと、近松門左衛門はその兄である。 いる暇もないくらい流行ったことも、 でもあったらしいから、ゆっくり飯を食って か。もっとも、江戸にまで名を知られた医者 その祖父は、太閤秀吉に仕えた医師である 主題句は、「早飯も医者の一徳」と諷した あるい

八木=一徳、名医より流行医か は事実だったかもしれない。

ある。 が益々ふえ、落着いて飯も食えぬというので 医とは限らぬが、いわゆる「口コミ」で患者 七久保=佐藤説賛。はやり医とて必ずしも名

者であったのを裏付ける文献が欲しいもの。 岡田―同。しかし一徳斎について、流行り医

### 111 出来ご、ろ土手に良馬が五六疋

ぐ光景、なのであろうか なった血気の若者五、六人が、吉原土手を急 かへ行く途中か、帰りに、急に北へ行きたく くつもりで家を出た連中ではあるまい。どこ 佐藤―出来心とあるから、最初から吉原へ行

に馬をつないでおいて、ご主人が吉原で遊ん 八木―想定される場面は佐藤氏説に賛。

との想像句であろう。 りに来た武士が出来心で、吉原へはいったな 六匹つながれている景を見て、さては、遠乗 西原=土手八丁、衣紋坂の下乗札に馬が五、

岡田―遠乗り説に賛

### 112 大手柄本所中の蛙なく

私の採集したものでも百句に余る。 う。慈雨に元気を回復した本所一帯の蛙が、 るので、単なる巷説ではなかったのであろ にもあり、その後書きに「翌日雨ふる」とあ をみめぐりの神ならば」の句は、 佐藤=例の其角の雨を詠んだ句。 一斉にケロケロケロケロ。例句は甚だ多く、 「五元集」 「夕立や田

句をほめるやうに蛙はなき出し 一九ス5

七久保―佐藤氏説賛。例句として 梅よほし瓜と中の郷大さわぎ

= = 29

夕立のしゃうばんをする中の郷 雨蛙すぐに其角がわきをつけ

 $\frac{\Xi}{34}$ 

宝一〇礼3

岡田―同

### 113 留守の事蟻の穴より壁の穴

狐を穴釣りにする機をうかがっているという を援用して、旅の留守は隣家との間の壁の穴 の方が危険だというのである。けだし隣家に 佐藤―「蟻の穴から堤が崩れる」という俚諺 に意志を疎通するには好個の場所だからであ のであろう。壁の穴は男女が他人に知られず 油断のならぬちょっかい氏が住み、主なき女

ている。

西原一賛

七久保一赞。

「壁に耳あり」の俚諺をきかせ

そして、 旅の留守別状たった一ツあり 「壁の穴は壁で塞げという諺あ

岡田―旅帰りのゴタゴタでしょうね。 し、旅の留守としないでもいいが。 ただ



JII 紫 香 選

じゃんけんぽん負けて愉快な鬼になる 鳥取県 西 原 艷 子 末筆 はい つもお祈りばかりする 八尾市

高

杉

Ŧ.

步

生母九十 咲 1 放浪癖はまだやまず 見舞う絆よ瀬戸の橋

幼なじみが伏し目ですぎる花手桶 嫁は娘でないと聞かせる愛の距離

女は愚かで一途につくす性をもつ

名古屋 市

うれ

L

い時は心素直になるわた

堺

市

桜

沢

あ

か 里

同

じ餌になんども転ぶお人好し

ひとあしちがい

これが幸運かもしれ

X

たとう紙の中に女の夢がある

大風を察して母がとんでくる

しあわ

粒

の命へ花を咲かせたし せのリボン夫と結び合う

どん底で友のやさしい声を聞く

ひとときの愉快虚しさ置いていく

坂は六十路で軽いつづらを選ることに い訳をする日の鬼の瞳が哀し 業 の谷にコーヒー よく香り

言

主

婦

老人クラブでほつほつ拾う花言葉 詞 はまだまだ続く 箸枕

本市

字

野

昭

代

あっさりと転職決めてくる若さ 金の贅沢S席二枚買う の決意がうすれかけて春

年頭

年

**戯言を二言三言言うミミズ** 死ぬの生きるの人騒がせな碁石です

向

地蔵なにかいいことありそうな

宇

宙

からみんな元気で無事

カ エル 八尾

市

片

上

英

井 高 子

藤

学のを対している。 は夢結んで開いてちりぬるを は夢結んで開いてちりぬるを 富田林市 笛で闇の深さを確かめる さしさにめっぽう弱い北の風	おり申子をするけを子さと寄ってくる。 一行錯誤のペンが友達面をする に行錯誤のペンが友達面をする 佐賀県 佐賀県	対行の外ない人生九十九折り に乗って明るい春の夢 追い風に乗って明るい春の夢 追い風に乗って明るい春の夢 追い風に乗って明るい春の夢 を活け にい夢へ今日の私は花を活け にいずへ今日の私は花を活け に崎市 がが方一つで女が占える	談のようにあっけなく逝
池	寺	児 沢	
	中	玉	
森	三 枝	歌	
子	学	子ん	
日生きる倖せ熱い茶をすす。 祝伝の隅に涙のしみが見え の蓋やっと一人になれまし の蓋やっと一人になれまし の蓋やっと一人になれましるさとの雪を見せたいひと	いたわりを包む風呂敷持ち歩く がの扇にされてしまった愛の唄 がの扇にされてしまった愛の唄 がの扇にされてしまった愛の唄 がの扇にされてしまった愛の唄 がの扇にされてしまった愛の唄	ま庫くみいました。	傘の周りで噂話がよくはねる
木	森	<b>倉</b>	<b></b>
下	脇	垣 3	奈
道	和	thr	美
子	子	美	子

熊本県	敗者にも藁を一本投げてやろ	二度の職ためらう妻を説きふせる	笑い上戸に恋のウイルス飼ってから	げたらあ	結納金なくとも実直さを買おう	久留米市	打って出てみよう今年は年女	理不尽な言葉ひとまず引きさがる	男なら笑って済ますことだけど	苦労した頃が私の充実期	も金脈もなしおら		約束がもうカレンダー詰める幸	2	中ぬくい話	湾岸のニュース大にも聞かせとく	77		約束の手紙通りに来る女	い出	善人が鏡の前で立ち止まる	0	形を抱いてわたしの	鳥取県
大						鶴						堀						足						西
Ш						久						畑						立						浦
幸						百万						靖						由業						小
子						両						子						美子						鹿
和やかな暮らしが欲しい離婚印	尼崎市	エリートを自負して二度の職がない	新築ヘローンの重みのしかかり	てんてこ舞いしても小店は高が知れ	孫入試 娘も来ない初春となり	残り火ヘマグマが騒ぎ出す出逢い	東予市	弁解が余りに長く聞きあきる	一言が多く辻褄合わぬ人	良い話あれは嘘ではないかしら	掃除機は言う事きいて良く動き	もう世話は焼かぬと妻は背を向ける	静岡市	愚痴を連れはるばる里の母が来る	定年が延びネクタイの皺伸ばす	向う岸の火事が鎮まり冴える月	許す気になり明日の米洗ってる	社長に連れられ食べたスッポン鍋	尼崎市	戻り寒虫があわててもぐりこむ	宅配で帰った夫の高いびき	一つ覚えの笑顔だけは絶やさない	春間近 風にも角が取れている	白足袋へしばし女らしくなる
	尾						小						浅						森					
	宮						山						子						安					
	弘						悠						まつ						夢っ					
	治						泉						五						之助					

	湯煙の里で充電して帰る				たたいたら案外もろい壁だった
	ちょんまげが現れそうな萩の町		13	, めな	オーミングアップそ
	尾瀬を舞う蝶は天女の如く見え				のって来た顔で一線越してこず
森	広島市	かりん	本	宮	堺市
	おだてには乗らぬ財布の固い紐				半年で離婚劇とは絵にならぬ
	満ち足りる				赤い帽子余生楽しく飾ろうか
	もう一人の私が自慢して困る			1	目を入れるとダルマはどっと疲れ出す
	三寒四温ひたひたひたと春の音				雑魚なりに競争相手知っている
Щ	吹田市	美代子	浦	美	鳥取県
	単身赴任 酒でバランスとっている				渡
	どの道を往ってもやはり空っ風				桜茶に胸の疼きは知らされぬ
	に大の男が身				十本の指が歴史を語り出す
	やがて翔ぶその日を待てぬ冬の蜂				大空へ幸せさがす凧ひとつ
神					卒業へスーツで春の風を切り
I	髪染めて女の見栄をまだ捨てず	智恵子	西	中	鳥取県
	痛いほどの寒さに耐えるシクラメン				ロボットが人手不足を嗤ってる
	詩の友また一人逝く春の雪				妻病んで子の気配りが嬉しい日
	子から父 父から孫へお年玉				寝不足の朝寝にベルがうらめしい
Ŀ	大阪市				中東の火種 家計に飛火する
	線がき絵 古墳の歴史話し出す				趣味多彩 金にはならねど呆け防止
		治幸	本	浜	唐津市
	金のない幸せもある共白髪				歌麿の色気をチラリ宿の夜
	外目には派手なピエロの泣きぼくろ				碁敵が下手な寄せ植え褒めにくる
野	0.55				赴任地の新春をテレビがアップする
es					いたわりに甘えて嫁の背を拝む

本

希久子

田

文

原

文

田

柳

影

瀬

昌

子

例えばの話になって耳向ける	袖の下出さぬからかと僻んでる	月始めまくり煎じてくれた亡母	姫路市	ふる里に母の笑顔が待っている	包装紙替えれば中身良く見える	里の	踏すが		おみくじは半吉だったまあいいさ	伝言板書かずに帰ることにする	どうしろというのか秘密聞かされる	寂しいと言わずみかんを山盛りに	藤井寺市	生き甲斐の趣味はお金になどならぬ	輪の中でニコニコだけの疲労感	一省	川向うの人とリズムが少しずれ	松山市	地下足袋が政治を嘆くコップ酒	納が来る	末席にいる正論を数で斬る	出せと春	松山市	名前だけ書いた名刺にある温み
			福					西					高					宮					白	
			本					Ш					田					尾					石	
			好					和					美代					みの					春	
			花					子					子					ŋ					嶺	
春うらら恋も悩みも包みこむ	校長の式辞涙がわいてくる	人混みの中なつかしい国言葉	岐阜市	いい話 思わず拍手してしまう	クラス会いつも肴にされる人	約束を軽くするからすぐ忘れ	都会とはいつも何処かで工事中	静岡市	アベックの息が合ってる市場籠	妹の内気が先に嫁にゆく	嫁はんに人妻褒めて叩かれる	出稼ぎで与作 花嫁連れかえる	尼崎市	母没して父も逝きけり曇天よ	ふる里は日向ぼっこに似て温し	冬の天ひとも苦節のうたを持つ	定年の身に纒うものは風	柏原市	病弱なはずの彼女とよく出会う	冬眠の私にレモンのひとしぼり	転勤族ふるさと幾つも持っている	ひるまない鳩に自転車止められる	大阪市	美しい歯並が目立つ中学生
			渡					小					的					大					新	
			辺					木					場					峠					井	
			杏					久					+					可					泰	
													<u> </u>										~	

にかで 向犬な屋 す丸けあ なの田す んつ通猫	亡母の忌が無沙汰の顔を皆集め	性善説疑い知らぬ妻に負け	道端の草いじらしく春を待つ	姫路市 は	まだ未練あるのかはなしむし返す	何かあるまだ何かある肚の底	天罰を受けても懲りず山削る	暗誦番号忘れたカード二つ三つ	尼崎市公	共稼ぎ靴を磨くはパパの役	手足ないダルマに威張られ負けやせぬ	駅前のうまいお店に借りがある	長電話嫁の相手もよほどヒマ	尼崎市	はげましの言葉ライバルからもらう	ロボットに心のときめきわかるまい	医者嫌い母は元気よく動く	孫が来て午後の会話が弾みだす	岡山県	すき間風 気にせず愛をみのらせる	耳そうじ待ってる妻のひざ枕	雪どけで弾みがついた水車小屋	失恋をやさしく癒す寒椿	寝屋川市 业	川片で着力近いと指刺
波留吉  本すなろ  表し、 一  表すなろ  表し、  表し、  表し、  表し、  表し、  表し、  表し、  表し														200											
大阪野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫を通し自問自答のつらい夜化耕田 父は都会でシャベル持ち北国のグルメは旅の人が食べ北国のグルメは旅の人が食べ北国のグルメは旅の人が食べ北国のグルメは旅の人が食べれまりあげた拳に迷い少しある最高音をせな男が尻にしかれてるより向けば風が笑っている小春をせな男が尻にしかれてるより向けば風が笑っている小春をからは団地の砂場陽が燦燦を終めらは団地の砂場陽が燦燦を終めらは団地の砂場陽が燦燦をいるいるいる小春に見るから争いごと絶えぬによっている小春に動物に雇われ仲人席につきを終えるといる。				4															あす						
大阪野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫と目が合うてからの縁野良猫を通し自問自答のつらい夜化耕田 父は都会でシャベル持ち北国のグルメは旅の人が食べ北国のグルメは旅の人が食べ北国のグルメは旅の人が食べ北国のグルメは旅の人が食べれまりあげた拳に迷い少しある最高音をせな男が尻にしかれてるより向けば風が笑っている小春をせな男が尻にしかれてるより向けば風が笑っている小春をからは団地の砂場陽が燦燦を終めらは団地の砂場陽が燦燦を終めらは団地の砂場陽が燦燦をいるいるいる小春に見るから争いごと絶えぬによっている小春に動物に雇われ仲人席につきを終えるといる。				<b>ப்</b> 17					15-16					2420					りなる					留	
	敷に雇われ仲人席につ	からは団地の砂場陽が燦	角で見るから争いごと絶え	崎	り向けば風が笑っている小	良犬にうさん臭いと睨まれ	せな男が尻にしかれ	酒屋の女将に聞かす嘘	広島市	する父の脇には酒があ	い総入	だけはつくが騙したことがな	りあげた拳に迷い	JII	魚なりの主張が的に届かな	国のグルメは旅の人が食	耕田 父は都会でシャベル持	翔する掛声ばかり置	田	んだ日は空ばかり眺め	んつけの匂い恋しや亡母の	し自問自答のつらい	良猫と目が合うてからの	大阪市	へれも明らす垂傷もみずり恋し
				谷					村					橋					澤					井	
谷 村 橋 澤 井				石										政					裕					円	

要

良

子

女

舟

長 浜 澄 子	テレビ見て泣いて笑って老い一人	冬晴に遠回りして充電する	青春はアルバムだけが知っている	鳥取県	寒かったただ寒々と錦帯橋	へそくりをする楽しみが無くなった	墓地までも霊苑という規格型	不安抱き悔いをかかえて六十九	三木市	結婚の挨拶状が来る安堵	宝島略図はいつもポケットに	大の字になって寝られるうちがある	礼文島からす大きい顔をする	長岡京市	北風に庇うてくれる人がある	輪の中で背ききれない風を抱く	群れて咲く一つの世界 水仙花	年金で買った夢にも消費税	西宮市	日だまりで久しく夫婦でお茶を飲む	インテリで波乱含みの嫁が来る	内気でもここ一番の爪は研ぐ	七草も現代版に妻の知恵	尼崎市	夜遊しの 掘か 猫に も 夫に も
登子 大																								5,50,00	
子 保け老人無心で童呼うたう 具塚市 池 子 ためらいを聞いてはくれぬ自動ドア 本当の味方苦い薬を飲ませよう 言葉には出さぬ想いを大切に 弱い者がいつも煙に巻かれてる 世話好きが過ぎて悪口言われる羽目になり 外来語判った顔で聞いている 世話好きが過ぎて悪口言われてる 世話がきが過ぎて悪口言われてる り																									
子 保け老人無心で童呼うたう																									
人無心て童呼うたう 具塚市 池 いを聞いてはくれぬ自動ドア 味方苦い薬を飲ませよう 味方苦い薬を飲ませよう は出さぬ想いを大切に がいつも煙に巻かれてる かいつも煙に巻かれてる きが過ぎて悪口言われる羽目になり 中った顔で聞いている きが過ぎて悪口言われてる きが過ぎて悪口言われてる きが過ぎて悪口言われてる これる亡き夫の命日に なり 大れる亡き夫の命日に なり は 大の部屋にする った がいつ がい でした振りかえり な 原佐野市 大 に通る町並みんな友				枝					拙					子					エ					子	
	邪薬どれが効いたかわからな	河慣れたか錦鯉も住	ップ酒飾らぬ話聞い	崎	つ買い	て通る町並み	幸せでした振	し合う挨拶温い寒の	取	は話題持たずに来て座	一つ返して暮れのくぎり	って我が一人の部屋に	生れる亡き夫の命日	泉佐野市	世話させてもらう気持のありどころ	世話好きが過ぎて悪口言われてる	た顔で聞	録立てて追われる羽目に	岡	い者がいつも煙に巻かれ	葉には出さぬ想いを大切	の味方苦い薬を飲ま	めらいを聞いてはくれぬ自動ド	貝塚市	呆け老人無心で童唄うたう
壁 吹 工 村 田				明					伊					大					大					池	
				壁					吹					工					村					田	

静

子

正

雄

寿美子

富

恵

敏

之

特を着てては話はずまない 海鳴りがわたしの心呼びもどす 母の生きざまそのまま映す姫鏡 酒飲まず煙草もすわず嫁が来ず 僧らしい笑顔で王手かける夫 平凡な手相で余生つつがなし	少し登れば下り坂になるの悔いは軽いドラマとして捨てるの悔いは軽いドラマとして捨てるのなら動く時計を笑えないれたら動く時計を笑えない。	た馬燈幸せだけを影絵とす 仕舞湯に流す苦労の泡寄せて と でしのべる隙間がほしい別れ窓	事故ニュース安堵の顔が泣いている 事故ニュース安堵の顔が泣いている 事故ニュース安堵の顔が泣いている	ふくむすめらしくもないが福娘
Л	Щ	酒	山	吉
崎		井		永
ひ か り	三 千 子	<b></b> 子		伊三郎
東橋子の影が動か 車椅子の影が動か 車椅子の影が動か でき上げる粉雪思	酒断って男に思うことがあ 土壇場でもう運だけに頼り 土壇場でもう運だけに頼り	をの陽へ少し をの陽へ少し	広島菜美味なるも 寒風夜ガソリンス 寒風でありいほど	トゲのあるバ
##がたんとある ##がたんとある ##がたんとある	では、本音つい洩らしたけに頼りきる。 に来てました。 豊中市	陽へ少しおしゃまな蕗の薹 がそっとくすぐる母性愛 がそっとくすぐる母性愛	のに音がある のに音がある	バラと知りつつ手を伸ばす
世 を で が で が で く 朝の膳 を で の ら せる を で の ら せる	ました 豊した 豊した	老母の迷い箸 くすぐる母性愛 おしゃまな蕗の薹 南国	のに音がある 大阪狭山市 大阪狭山市	りつつ手を伸
世 を で で で で で で で で で で で で で	くじ 豊中市	老母の迷い箸 くすぐる母性愛 おしゃまな蕗の薹 南国市	のに音がある 大阪狭山市 桜	りつつ手を伸ばす
神 神 く朝の膳 く朝の膳 米子市 中 かつづく ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	は 取り きる 豊中市 三	を を を を を を を を を を を を を を	<ul><li>へ遠会釈</li><li>のに音がある</li><li>大阪狭山市 桜 井</li></ul>	りつつ手を伸ばす

熊本県 岩	バスが来て土産品屋を周章てさせ	敗者復活 老人クラブの役に就き	孫の声春を先どりして駆ける	島根県加	コーヒーはブラックという細い指	オルゴール止まると逢いたくなってくる	小羊の夢はフワフワ雲になる	竹原市 古	留守宅を訪えば山茶花咲きこぼれ	吞み仲間久しぶりの顔で寄り	歳暮贈る相手も同じ店で会い	子育ての疲れをいやすその笑顔	熊本県 増	一坪の庭に幸あり四季の彩	雑草とれば絵になる形で咲いている	しんしんと夜の冷えトイレは寒かろう	編棒の根気編んだりほどいたり	熊本県 高	安全な運転 助手席もう眠り	餌箱に雨も気にせぬ雀達	又昔話がはずむクラス会	友達と言うだけのん気に居候	熊本市 北	偶然がつづけば少し恐くなる	
切切				本				田田					田					野野					11		
康				千 義				比比					ш					宵					<i>//</i> !		
水子				我良				比呂子					乗					芦草					進		
愚痴っぽい男 確かに運もない	鳥取市	フルムーン寺と温泉入れた旅	出しきった勝者の涙輝いて	羊の絵百態 春を告げに来る	和歌山市	登る朝日へ愛は無言のままでよい	一粒の涙が人生かえました	水たまりにも幸せがうつってる	鳥取県	たくさんの笑顔に包まれて生きる	愛という必殺技を持っている	ありがとう添えて吉報届けよう	鳥取県	精いっぱい咲いて雑草邪魔にされ	消しゴムでごしごし本音までも消し	鍵一つふやしてウツが深くなる	旭川市	愚かさに早く気付いた方が楽	言い切ってしまえば空しさだけ残り	失って知った記憶の重い価値	熊本市田	何時からか蛸配線になった趣味	落凧がふと煽られて舞い上る	遠慮したばかりに流れ変えさせた	
	大				谷				大				大				朝				黒				
	坪				П				角				角				倉				田				
	天				信				幸				正				大								
	涯				子				代				道				柏				緑				

五孫に貰ってま も自然に通じる も自然に通じる	第二章 妻がパートに出ると言う設計図変更ばかりする余生 会所をズボンにつけて今日終る 田田	空涙流す勇気がありますか キョイチョイと妻がエンジンかけてくるチャレンジしてます老いの赤い服 高槻市 芦 田恋すちょう私一人のあなた欲しメキシコパール輝き旦那もう来ないがで雪ジュースもまじる祝い酒 大阪市 今 西音もなく柩の蓋のしめられる子のいない夫婦を思う寒い風 大阪市 今 西音もなく柩の蓋のしめられる	アルバムの妻は笑ってばかりいる雪が舞う冬の暗さにひとり居る
向 義		静静	
西嗣	宏	子 江 子	-1.1
心臓の病を武器にしたおんな 気まぐれな私を誘う北の宿 負け犬に孤独と寒さ吹きだまる 料管らいの一言胸に灯をともす に変を変いるがまる がである。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 がある。 が	日々平穏夫の背なを頼りきる地球から平和が消えてゆく不安	金り箸ははげても使う老夫婦 自由主義で地球の裏がもめている キンと鳴り電子レンジの酒が出る チンと鳴り電子レンジの酒が出る 果かくそれをノルマとする日課 共白髪パントマイムで足りる日々 共白髪パントマイムで足りる日々 鳥取市 語字脱字 見向きもしないラブレター 二階から見れば近所にある旅情 方言に心の傷を癒される 京都市	きもせず過去の想い出語
奥	Ш	小 西 井	佐
野	根	林 村 上	野
テ	八	英 黙 たか	六
N	重	子 光 儿	浦

出雲市	箱入りにさせておきたい父の情	初春や川辺に白いゆりかもめ	お年玉渡しそびれてポケットに	八尾市	マンションとビルの間で陽をあびる	向き合ってプイと逸した男の目	人伝に消息きいてくれている	和歌山市	決断に夜空の星が冴えてくる	愚痴少しこぼせる部屋が温かい	新しい日記に今年の夢を書く	岡山県	老母の足 受話器まで待つべルならす	旅に出て二日目主婦がしたくなり	見送りの君へ振り向くタイミング	千葉県	出来るだけにぎやかに振る神の鈴	天ぺんはここかもしれぬカタツムリ	寒椿しばし雀が来てしゃべる	出雲市	無視されて雑兵なりの正義感	財産を譲ってからはボケ始め	とぼけてもやらねば嫁の座がもたぬ	佐賀市
森				松				森				福				上鈴				岸				古
Ш				本								原				木								Щ
健				芙美								悦				春				桂				-
步				美子				茜				子				枝				子				徳
親馬鹿が振込んでやるお年玉	新潟県 喜	果てしない夢 定年へたどり着く	それなりの理由でバラに刺がある	老人と呼ばれて負けたなと思う	今治市 渡	決算で十円違いが探せない	顎上げて女ドリンク飲んでいる	猫飼うて女一人の愛溢れ	大阪市 小	指切りを軽く交わして縛られる	夕焼けがきれいゆっくり軍手脱ぐ	船降りた海の男が色褪せる	鳥取県石	回らない舌で子供の村芝居	朝食の味問われてる宇宙船	太鼓橋 福受けた顔受けぬ顔	泉佐野市 直	週刊誌ゆっくりと見る美容院	イミテーション価値はなくてもいいので	銀杏の葉蝶ちょのように舞っている	静岡市	冗談でしょうと善人取り合わぬ	碁会所へ通う陽気な定期券	約束をした小指にも悔いがある
	高				渡				小				石				真		です		片			
	野				辺				糸				谷				崎				平			
	不				南				昭				美恵				浪速				静			
	$\equiv$				奉				子				子				子				代			

			団結のパワーのすごさシクラメン					路旅ひとつの傷
			淡々と年賀を交わす兄の友					半ぱでない意欲一段ずつ昇る
			幸福という木三本買って来る	笑	好	Ш	北	和歌山市
彩	崎	Ш	枚方市					間延びした顔が揃って事始め
			平和像バックに若いVサイン					成長株と持て囃されている重荷
			ぬるま湯に浸る平均値のゆとり					添え書きの一句がうれし年賀状
			くちびるが乾いて一人きりの夜	ね	4	中	田	和歌山市
おさ	山	中	枚方市					叱るのはよそう涙を見てしまう
			亡き戦友を偲び同期の桜寄る					人の名で呼んで大猫ご飯どき
			五時からは愉快な酒にして飲もう					惜しまれて去る職場は温かい
			生字引になって定年追い出され	華	柳	倉	永	静岡市
喬	原	岩	鳥取市					寒い夜は熱燗一杯がご馳走だ
			パン一枚焼いてる朝のセレモニー					コスモスの種散っただけ咲いてくれ
			好物へ箸もふれ合うハネムーン					成績があがって手を出す孫の笑顔
			郵便もだあれも来ない日の孤独	智	抜	Щ	森	広島県
かつ	尾	石	鳥取県					手のひらでかまきりの子を遊ばせる
			読み返しやさしい友の年賀状					極楽の声でうなっている湯船
			おしゃれして蕾も開き娘の盛り					外孫はたまに来るからかわいがる
			偶然に救いの神が目の前に	石	礎	塚	中	相生市
朗	部	服	米子市					お互いの接点見ぬまま恋終る
			石段が苦になりだした宝山寺					LLのリンゴが届く嫁の里
			白髪でピンク着こなす身の軽さ					飲むことの多い月です異動月
			老妻に殺し文句の言える夫	雄	高	村	家	大阪市
芳	田	米	奈良市					消費税用一円が場所をとる
			大声で言えぬ激怒が胃にもたれ					ぬけぬけと絵馬 東大と書いてある

静岡市	郵便受けが雀の宿になる長閑	ふる里を偲べばやさしい顔になる	元気いい凧で凩大好きだ	鳥取県	休憩をすれば調子が狂いだす	手をにぎるだけの見舞に行ってくる	妻と眼の合う時があるバスの中	広島県	点滅をさせて時々自己顕示	心張棒外して泣ける母の膝	自分史を手繰れば傷が痛み出す	和歌山市	上べだけ飾った家にすき間風	飾り気のない人で友があふれる	それなりの幸せがあり苦労あり	鳥取県	同じ物食べてて妻はダイエット	脛かじる方が外車を乗り回し	青春を謳歌リンゴの丸かじり	河内長野市	老い二人迎える初春は一里塚	朝の駅追っかけられてる人の群	馴らしたり馴らされたりの五十年	宝塚市
柳				西				岸				榎				今				大				末
沢				Щ				田				原				本				西				次
た				和								公				早				文				
ま				子				武				子				苗				次				真
すみません言えば返って来る笑顔	和歌山県	宇宙との対話本番釘づける	釣堀りに弁当が来る嫁と孫	年金のくらしに雑費多過ぎる	茨木市	涙ぼたぼた親の心が今にして	満ち足りて初日の中で紅を引く	いりすぎのごまめすまして重箱に	羽曳野市	土壇場で妻の機転に救われる	逢うてどうするでもないを旅仕度	ヤッパリと言う結論に負けを知る	羽曳野市	悪口の聞こえる耳をそばだてる	聞き捨てにできぬ話へ耳動く	隣には畳を替えて嫁が来る	鳥取県	心許す人には口も軽くなる	まんがだな一人笑いのもの忘れ	パズル解けて終着駅が近くなる	羽曳野市	宝くじ当ててやめたいアルバイト	寒かろう仏壇の戸を締めて寝る	世話を焼きそして焼かれてみたい夜
	森				藤				徳				麻				小				芦			
	三				井				山				野				西				田			
	一枝				正				みつ				幽				五				絢			
	子				雄				つこ				玄				十鈴				子			

船へ春待つ種のメッセージ	日の丸は褪せても意固地感謝の日	大阪市	御先祖の足跡だから冴えて見え	子羊を囲んで森の音楽隊	たかが漬物されど漬物母の樽	岡山県	建設省の巻尺が来て気を揉ませ	明け暮れの箒に四季のある日本	事勿れ主義定年を意識する	能本市	ちぐはぐな敬語で初対面をする	ふるさとにお地蔵さまの森がある	爼のくぼみにのこる母の影	鳥取県	美しく食べる人あり食さそう	宿題を一つ残して今日も暮れ	偶然の出逢い重なり共白髪	米子市	足なだめなだめて今朝も靴を履く	兄弟会十一回目の笑顔です	信じないつもりのみくじに揺れつづけ	島根県	翔ぶ夢を見つづけて来たカレンダー	ごめんなさい素直に言えた歯が白い
		武				土.				遠				乾				木				松		
		田				居				Ш								村				本		
		昌				ひで				夏				隆				はる				聖		
		Ξ				での				生				風				るえ				子		
長生きを済まなく思う薬づけ	遊ぶのに飽きて宿題思い出す	釣竿に今年の運をかけてみる	鳥取県	ハイキング家まで種がお供する	始球式外れ場内和ませる	排ガスの無い自転車も数の害	尼崎市	ふるさと便 母の愛情揺れて鳴る	かごめの輪 路地に響いて声温く	富士山に乾杯しよう初春の朝	静岡市	聞く耳は持たぬラッパの高い音	違い	酷使され根本で折れたマスターキー	神戸市	境遇を聞くと演歌だなと思い	ろす指にも冷えが	アルバムに笑い話が一つある		壁一つ妻と不貞寝ごっこする	雑魚ばかり捕まえた籠大事げに	気の利いたテーブルそこは予約席	鳥取市	金策へ外車もごと日 御堂筋
			久	8			前				宇佐				岩	i			佐々				近	
			野				田				美				$\mathbb{H}$				木				田	
			野				6				寿				信	Ì			芳				帆	
			草				b	Į			美				義				IF				雀	

銀の匙ゆっくり溶ける角砂糖	もう少し句を明るくと息子の助言	淡雪に親しみうすいアスファルト		ワープロをぼつんぽつんと叩きます	友の読む弔辞に遺影笑みを見せ	が友	逝きし友憶う(二句)	島根県	嫁の箸がやっと揃った過疎の新春	スーパーで息子の会社の品を選る	7	出雲市	幸せの構図にはめて無理がある	四十歳危険な橋と知っている		弘前市	宝くじ当りそうなのよって買い	耳に蓋しても鼓動のひびきあり	外食にひまを出された弁当箱	大阪市	日本の伝統 匠の手に生きる	ゆとりなどない暮しでも生きる知恵	お隣へ電話かけてる暇なひと	唐津市
			田					福				伊				肥				清				Ш
			中					間				藤				後				水				П
			孝					博				寿				和				絹				d.
			子					利				美				香子				子				さ子
	一線を引くと越えたくなってくる	能弁な奴についつい気を許す	四面楚歌 世渡り下手な凡夫婦	姫路市	大欠伸しながら春を待っている	つまずいた同士で石をくらべあう	北風に凍った窓が開かない	鳥取県	酔いざめの水がおいしい二日酔い	新人がすごく陽気で活気づき	子の笑顔 明日のファイト湧いてくる	十和田市	わたしならこうするものと第三者	どこまでが本音でしょうか半開き	これ以上肥えなさんなとリフォーム屋	今治市	善人の顔で正座をした上座	紀子さまは皇族となるお人柄	生きてゆく張り今日も米を研ぐ	岡山県	アルバムで旅出の用意をしておこう	精いっぱい余生を咲こう野の花よ	書き初めに和の字を家族へ書き遺す	岡山県
				谷				鈴				阿				藤				伏				牧
								木				部				本				見				野
				清				公				喜な				のぶ				すみ				秀
				柳				弘				久江				か夫				かれ				香

岡山県	ふるさとに安らぎがある木守柿	毛糸編む手が思い出を語り出す	雛菊を咲かせて嫁の庭にする	京都市	人の字に相手の大切教えられ	酒 煙草ぶっきり方にもお家芸	やっと自由ほっと成田で日本人	東大阪市	ごみ出し日 隣は旦那うちは夫	一票を上げたい人が二人いる	嬉しいと見知らぬ人に会釈する	米子市	朝寝坊したい日曜日が明かい	夫稼ぐあいだそれほど気が付かず	正面に映る鏡を拭いて見る	鳥取県	食の頭回転したが	何かあるそっと二階へ子が上がる	ひとり住む家にも朝の陽はまぶし	岡山県	丁重な粗品と書いた贈りもの	好物を供えて詫びが届くなら	ローンより手軽なカードが恐しい	寝屋川市	
後				Щ				大				小				橋				江				坂	
安				海				平				塩				谷				П				上	
do				友				太				智				静				有				高	
さえ				兒				郎				加恵				江				朗				栄	
いたわりが嬉しい涙になった夜	堪え忍ぶ女心か寒椿	岡山市	倖せをもたらす絵なら見て置こう	灯の消える寸前までも祈ってる	鳥取県	都会から七草がゆを恋う便り	ビジネスで読経も無表情となり	とび入りの音痴を舞台もてあまし	青森県	長男と同じ齢の訃報欄	都会のまん中私というひとり	呉服屋の相手次第で尺貫法	寝屋川市	鬼の面脱げば優しい風に会い	出さずとも元日賀状待つ勝手	グループで女わいわい露天風呂	岡山県	四季知らぬ胡瓜になって味がおち	目をとじてしばし興奮やわらげる	昔は風の子今はテレビの子	今治市	母の恩報いる悲しい紙おむつ	病院の布団の中で風邪を引き	思い出の出湯に金婚迎えられ	
		中			浜				荒				井				後				越				
		嶋			田				田				上				安				智				
		千			民				つ				す				江				青				
		恵子			子				る				みれ				Щ				袁				

香川県	上塗りをするほど嘘がばれやすい	梅の香にちょっと浮気な血が弾む	鳴門市	木枯しの吹く日別れた北新地	夕刊がくるまで朝刊見ています	豊中市	臘梅のかおりに唐の国しのぶ	散歩する犬に心を覗かれる	枚方市	開発は地響き連れて夢削る	宮掃除思い思いの冬帽子	静岡市	満更でない顔でいる肘付き椅子	オーバーに抱きついてみるゆれる橋	静岡市	雪が舞いやっと故郷らしくなる	寝てる間に美事な庭の雪化粧	鳥取市	妻の留守不自由なことが身に沁みる	参考のためにマンガも読んでみる	寝屋川市	馬鹿にしたシートベルトに助けられ	それぞれの子の持ち味に夢を抱く	鳥取県
工			八			滝			森			増			青			美			河			Щ
藤			木			北			本			田			柳			田			合			内
吟			芳			博			節			扶			金			旋			時			芳
笑			水			史			子			美			吾			風			弘			江
選ぶ気はないが相手がみつからぬ	鳥取市	思いつめたように小雪が舞う街に	ほっとけぬ事が溜って夜に余る	芦屋市	里がえりあっという間に来て帰る	サボテンの棘も囲うて冬の部屋	島根県	傷心の僕に小石が語りかけ	帰省の子方言そのままの愛しさよ	八戸市	内緒ばなしの方がきこえる聴診器	目に見えぬ所で親の七光	岡山県	句三昧 舞踊三昧 酒三昧	優しさにやさしさ盛って花開く	吹田市	口答えするようになった孫連れて	福は内招く豆なら安いもの	藤井寺市	栄転に単身赴任がつきまとう	子供にも予算があってお年玉	松江市	夜の道 心を読まれそうな月	当確になって味方が急に増え
	中			根			菅			島			福			西			菊			松		
	居			来			田			田			原			岡			地			浦		
	武						か			昭			辰						繁			登		
	士:			敬			つ子			治			江			豊			男			志子		

叱られて尚縋りつく母の手に	張替えて初春待つ部屋の明るさよ	唐津市	育児書にそう書いてあるので信じ	二人して愛という字を書きました	鳥取市	理想論は寝てからにして缶ビール	欲の形に口が歪んで浅ましい	字部市	大中小 小を選べる年となる	医者嫌い酢大豆食べて竹踏んで	豊中市	大学を出たのに多い誤字脱字	脇役が一番似合って三十年	富田林市	金婚式あらためて見る妻の艶	孫のような医者がマンガ字書くカルテ	大阪市	お雑煮を若者お義理で食べました	背中から温もりくれる古里よ	島根県	年末年始 出発ロビーは花ざかり	青空に心を干しに出る散歩	字部市	つじ褄の合わぬ論議の長いこと
		入			近			中			田			Ш			森			渡			野	
		江			藤			村			中			原			崎			部			田	
		喜ん			秋			Ξ			道			昭			忠			好			豊	
		久亭			星			良			胤			水			禄			栄			子	
	正確な時計が守る無人駅	暮らすのを記す日記の裏を行く	今治市	おんぼろ家 地上げやの目ににらまれ	共稼ぎ妻より先に首になり	鳥取市	羊ふと群を離れてみたくなり	聞いてない言うたと夫婦もめている	八尾市	遊んでも老いの動きは知れたもの	御神籤があまり良くない初詣	松江市	近頃の表礼 家族勢ぞろい	一代で金にはならぬ杉植える	東大阪市	年末も新年もない信号機	当分は結婚指輪して静か	静岡市	犬っ子人っ子皆幸せになる年よ来い	ニホン支えて来たのに粗大ゴミ扱い	摂津市	行先を訊かない妻に見送られ	融通が利かぬ鏡の顔憎む	鳥取県
			渡	3		前			吉			原			松			Ξ			もよ			Ŀ.
			邊			田			村						Ш			浦			りづ			田
			伊			_			_			長						つ			き遊			俊
			津志			枝			風			三			隆			ね			美			路

島根県	肩がきは沢山あるに頼りない	元旦に和尚さんから賀状くる	鳥取県	外人が海外旅行を当てている	鳥達も冬の案山子を哀れがり	十和田市	再生が出来ず頑固の仏顔	初詣で願い事ばかりする私	岡山県	北風が枯葉の愚痴をみんなきき	愚痴みんな抱いて主婦の座降りる	岡山県	電話では言えぬこれから来るという	玉乗りのピエロ楽しんではいない	広島市	目に見えた金では勝てぬ選挙戦	千秋楽に無くてはならぬ顔がある	大阪市	あの世までそっと寄り添う落松葉	客帰り貰った土産値踏みする	羽曳野市	時が経ち今では強い妻となり	初めての席へ笑顔で迎えられ	香川県
今			Щ			小笠			森			富			名			乾			Ш			辻
Ш			本			原			下			坂			和						本			上
三津			正			敏			正			志			喜			哲			たい			よし
江			光			夫			子			重			郎			静			けし			しみ
柳腰何所とはなしに粋なひと	静岡市	松越しに琵琶湖は光り夜は明け	おみくじを袖でかくしてそっと読み	泉南市	歌好きな亡母にとどけよハーモニー	友逝きて次は誰かと問う人の逝く	静岡市	子の寝顔見ながら背広脱いでいる	子を風呂へパパの責任ひとつでき	和歌山市	ライバルというて胸襟ひらく仲	時差信号見込みの青に渡りだす	大阪市	借金払い日頃の恨みみんな言う	あっさりと判を押したら家とられ	鳥取市	職安へ行く度落ちる職の質	差し押え一つ残った招き猫	大阪市	祝膳主役の曽孫は無関心	現代っ子のファッション眺め見飽きせず	姫路市	水すましお前も私も忙しい	皇室のアルバムが好き老母と私
	大			坂			中			Ш			Ш			谷			Щ		ず	山		
	石			根			西			田			北			П			原			崎		
	た			流						博			=======================================			侑			章			おさ		
	\$			水			雅			章			Ξ			里			久			むむ		

人形のセールス祖父母的にする。河内長野市、杯	可 を 子 可	寒い中動きがとれぬ着ぶくれて	唐津市 山	決断の心をくれた影法師	損をした気持にさせる買わぬクジ	八尾市 籾	新人類孫の賀状は横文字で	成人式の天気今から気をもませ	岡山県 杉	好きな花活けて正月客を待つ	夢抱いて長寿へ希望満ち足りる	兵庫県 西	売り家の土間に転がる招き猫	薬より酒三合で治る風邪	藤井寺市中	振袖の値ぶみしている十五日	新築のようにみんなが祝うてやり	弟妘居 (1句)	大阪市 平	正月の富士は一際映えて見え	湾岸の危機で寒さもよけいつのり	香川県 木	おしゃれして若い気持で町へ行く	
4			下			Щ			本			井			島				井			村		
如			岡			114			. 伊			つつ			志				露路			明		
于			司			隆			久栄			や子			洋				芳			人		
贅沢がパンクしているごみの山番者にいて自弘をに言る主も	リニィン牟瓜虫ニ草を食	古本市懐手して佇つ恩師	定年も悪うはないで寒い朝	箕面市	お年玉当てに孫達やって来る	昆布巻作って正月寝て過し	鳥取県	死亡欄に同じ名前の人がいる	夫婦茶碗に熱い絆が入っている	米子市	私用ですこっそり抜ける靴の音	雪やこんこんしんみり話入ってくる	鳥取市	ぼたん雪あなたの傘がほしいです	約束を守らぬ人でも待ってます	出雲市・	時代小説ばかりを読んで死語ばかり	たまに酒供えに来いと亡友の声	大阪市 1	冬休み縄飛びの子の頬染まる	抱っこされパパの頼ずり冬の街	姫路市 二	颯爽とまではゆかぬがペダル踏む	
	出			岩			中			池			中			富			尾			福		
	H			津			藤			尾			澤			田			崎			島		
				ようじ			俊			保			正			蘭			黄			姫		
	枝	Ę		É			子			子			恵			水			紅			女		

囲炉裏端 耳をすませば救急車	お正月孫と遊んで日が流れ	富田林市 浦 田	福の神 私の前はすっと行く	サラリーマン ラスト考えず生きている	池田市 岡 本	天井からつるす真っ赤な鶴一羽	血の出ない大根だから切る平気	島根県岩田	寝せてくれとても眠たい日曜日	夫と子も待ってる黄泉に立った叔母	叔母の計(1句)	唐津市 野 田	肩ばかり張って人の輪見失う	火種吹く愛は他人となってゆく	兵庫県 北 川	相槌の電話に期待かけ過ぎた	海外へ大阪弁で電話かけ	藤井寺市 武 部	似たようなお人がここでもだまされる	境内で忘れ去られた忠魂碑	橿原市 西 本	砂時計平成の世を動き出し	猫柳春を待ちわび雪かぶる	松江市 佐野木
		1			吉			Ξ				旭			٤			敦			保			み
		シヱ			太郎			和				恒			とみ子			子			夫			え
	息子が煙草止めてなにやらおちつかず	えべっさん今年もよろしくとササを買う	富田林市 加	あいさつができたぞ今日は吉の日だ	幸せ測る目安は笑顔です	米子市 寺	手抜くことおぼえ年金板につく	麦めしといわしに耐えた気骨見せ	和歌山県 吉	裸の王様秘密どこへもかくせない	鬼の面伏せて女の厚化粧	羽曳野市 福	ごうごうと山が鳴ってる寒い朝	年の暮れ孫も手伝う大そうじ	島根県児	政治家も片目ダルマのままがよい	退職後水得た魚趣味に生き	和歌山県 三	初釜に見合いと知らず着飾って	完走し明日への夢温める	唐津市 福	邦人の目にも地球は青かった	うちのサッチャーは財布を離さない	奈良市 井
						10500												200						
			藤			沢			田			田			玉			原			島			上
			みつえ			典			武			悦			幸			Ξ			紀			
			ż			子			治			子			子			究			_			大

## 麻生路郎の作品とその周辺

# 橘

薫 風

(3)

中温泉にて

像の外に候」と、八月号の巻頭に書いている。 蚊帳の中にて蚊遣りを焚くありさま、全く想 行をし、六月には「歩こう会」などと銘うっ 子)、第十三支部句会(大阪市平野・松本助 いる。「山中の蚊は鳴尾の蚊より猛烈にて 歓迎宴があり、その後、山中温泉で二泊して と夜行で北陸の旅に出た。金沢で歓迎句会と て新和歌の浦へ吟行に出かけ、和歌山市在住 は第三支部主催で「金熊寺から砂川へ」の吟 活性化に力を致していた。そういえば二月に 六)が発足したり、川柳雑誌社の支部増設と この頃、第十二支部句会(函館・亀井花童 路郎はこの年の七月三十一日、橋本二柳子 だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

> ぬ他社の行動力を、私はこれでなければと常 の会へ中央から大挙して出掛け支援を惜しま ことながら、わきまえ実行した。現在、 川柳雑誌の発刊されたこの大正14年の路郎 眺めている。

> > 子よ

という子煩悩ぶりを示す句で、九月号に掲載 作品で注目したいのを列記すると ある時は子をだんばしでくいとめる 子煩悩がったんがったんしてくらし 子にやった机で履歴かいている 昼の風呂泳ぐ気にさえなる父よ 失職をしてから父の声でなし

> 示されたようで、これらの句に繋がる ておく。句集「旅人」には、 の佳作に強い感動を受けたのを思い出す。 の句作りの要諦をこれらの作品あたりから教 ここで路郎の句の分かち書きについて触れ その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ その日ぐらしも 子よ妻よばらばらになれば浄土なり

こぼるるよ 軒に雀が

これも石川啄木ばりと言えそうだ。 ぞれの気息に合わせた形で分けられている。 とあり、他の作品も一行と二行と三行にそれ 十一月号の巻頭言は次の通り。 ばらばらになれば浄土なり

ねばならぬ。また、変り過ぎてもならない。 られたように思う。川柳は時代とともに変ら 易流行こそ川柳の向上に大切なものだと教え この示された一句に、私は秋を介して、不 淋しいも秋おどろくも秋の空 川柳が滑稽なものだとのみ思うている人達に

「次の句を読むとしんみりとさせられる。

読を乞う。

には先ず動くことの肝心なのを路郎は当然の の仲間を驚かせている。会員読者などの獲得

とするのではないか。初心時代の私は、路郎

したまろやかさで子を詠んだのも路郎を嚆矢

るが、大正時代にこのようにじょうじょうと その後もまだまだ唸らせるようなのが出てく のものである。子供たちとのからみの句は、

#### 同 人 前月号から 吟 句

### 怒ったら恐い男を怒らせる

たこともあったのに男は怒らなかった。女は のうちに、何度もその線のあたりまでは触れ その男を怒らせてしまった。言葉のやりとり むしろ人一倍あたたかで寛容な心の持ち主だ。 ついついけじめを忘れた。もう取り返しはつ 怒ったら恐い男はむやみに怒ったりしない。 島 蘭

### むしられて魚冥利につきる鱈

せている光の源、冥利に尽きる生命の燃焼で むこの魚の肉を、その美しい鱈子を求めて漁 に出た。知らず知らずのうちに鱈自身を輝か ってくれて、私たち人間は昔から、深海に棲 か。全身それこそ尾の先、内臓までも役に立 今頃、北の海では鱈漁の真っ盛りであろう 花

あろう。

## ゆきも帰りもおんなじバスになる他人

うと狙ったわけでもない。心の動きの捉えか 登場人物の揺れが生き生きとして句の中に風 がある。飾った言葉はない。解りやすく書こ てある。よくある日常の景ではあるけれど、 のシナリオにはあったかとも思われる。あと で重要な意味をもって再びめぐりあう事だっ 偶然かも知れない。けれどもしかしたら神

代

## 徐々に徐々にふくらんでくる朝の音

端から起こしてゆく。心もつれて朝になる。 動感はない。意識して朝を自分のからだの末 老いに近い朝の目覚めにはかつてのような躍 ける順までだいたい決まっている。その早い や団地と違って、町家にはたいてい玄関を開 一軒から始まった朝が次第に町を朝にする。 朝の早い家が朝の音を立てている。大都会 充電をしたらやさしい絵になった

ていたのだ。充電をしようと気がつくまでの が無かったからその絵がけわしい表情に見え 別に絵は変わったわけではない。自分に自信 充電したために本質が見えるようになれた。 夏

> は素晴らしい感じかたができることを、優し く告げてある。こころの自画像が書けている。

過程は書いてなくても十分に届いてくる。今

## 大きめのコーヒー碗といる疲れ

口いわる

ない。ほとんどの場合、大きい碗に振り回さ れている。その碗を選んで出したくせに。碗 のせいにしているところが何ともおかしい。 言いたくなる。ところがなかなかそれができ たが適量を入れたら解決することでしょうと んな朝がよくある。カップは大きくてもあな 真面目なんだなあとおもう。そして私もこ

## もしも逢えたら月の砂漠を歩きたい

逢うことはないと思う。月の砂漠を二人で歩 でも歌っている。 くこともありえないと知っていて歌う。それ 少女は、昔うたった月の砂漠を忘れることは なことに違いない。けれど心の中にいる少年 が平和なときであっても砂漠を歩くのは至難 ない。その夢があるからこそ暮らせるのだ。 湾岸戦争がはじまった今はなおさら。それ

### 少しだけ春が私に耳打ちする 大根を抜いてうぬぼれ頂点に

#### 水 煙 抄

## 句

前月号から

#### 正 子

押し寄せてくる。春への思いがあふれます。 た哀しみと憤りが呼び覚まされて不安の波が 戦争へと一点に向いている。父を戦争で失っ ことを恥ずかしく思う。今、世界の目が湾岸 す冬を映している。雪にロマンを感じている 朝のテレビニュースが積雪ニメートルを越

### 皿洗う母は哀しみまで洗う

みを洗い流そうとする強い意志が視えてくる。 つ一つ哀しみが溶けてほしいと願う 作者の想いが胸に届いて広がる。母の哀し 原

### 正月が済んで静かな台所 行方まだ決めかねている迷い犬

おんな正月も過ぎて静かな台所への思い。 慌しい年の瀬も過ぎ心新たなお正月、そして と耐えています、春になればきっと。二句目、 んの迷いと重なって……春を待つ花芽がじっ 迷い犬を見ているやさしさが今の美代子さ

### さみしくてまっかなバラを買いにゆく 大事な人をいくさなんかで死なせない

をストレートに表現されて心惹かれる。 がやわらぐことを願っています。激しい思い れた感動。二句目、まっ赤なバラを買って心 なせない」と言い切った美雪さんの痛みにふ 防毒マスクを着けた幼い死を聴いた。

## 追憶の花は真っ赤に燃えている

若々しい想いの句に引き込まれました。 景色が今を支えてくれているのでしょうか。 義良さんの胸に咲く真っ赤な花、 遠い日の 良

### 神さまがくれた笑顔に溺れよう 憎いおとこの肌着をいちど洗いたい

も笑顔に託そうとするやさしさに深い心を感 ます。素直に表現されたまつ女さん。二句目 想いの句強い言葉の内に哀しみが視えてき

## 振り向けば長いシナリオ劇一つ

森 子 幻に呼ばれ振り向いてしまう

郎さんの胸に人生がしっかりと見えたのでし 想いがどんどんと広がってゆく心象。 して、そんな声がして振り向いたけれど…… どれ位歩いたのだろう「振り向けば」十四 森子さんの感性の句ですぬ――そんな気が

### ょうね。まだまだシナリオが続きます。 狂う程泣けばぐつぐつ煮こぼれる

だ表現力に圧倒されました。 迫ります。「ぐつぐつ煮こぼれる」とつない 心あふれて激しく胸が傷むその刻の表情が 川とみ子

## 風待ちの港やさしく船を抱く

きます。 う美恵子さんの心と美しい風景が重なってゆ 時を待って心に風を待って港のやさしさを思 今はまだ旅に発つ時ではないのです。その

## モーニングサービス身の上ばなしまだ続く

買い足して買い足している年賀状

高級車あふれ孤独になってゆく 歌

畳目に逆らわぬよう拭いている

由美子

寒月の情けわたしを放さない

海沿いの墓に別れの帽子振る

滝つぼに散る紅葉のいさぎよい 昌 子

木枯に似合うマフラー選っている

たくさんの佳句を心に残しました。

#### 河 内 天 笑 選

友だちに泊ってゆけと酒を出 父という凄 平成三年の静かなる山河 い男がひとりいる 1 橋

答

しぶちんの妻が 鏡とのつきあい女果てるまで 確に覚えてぎこちない英語 はりこむ祝い酒

神夏磯

典

子

Œ

雑巾を干して芝居を続けよう 米子市

荒

介

親が躾けぬ 窓からは潮の満ち干がよく判る ぬ日まで男可愛や見栄を張り からおばあちゃんが叱る 大阪市 東 倫

子

死 少しはなれて港ぜんぶを見渡そう んだ人にしばらく手紙届くなり のために抜け穀拾うなり 米子市 T

급

飲む飲まぬ揺れて両手でジャンケンポン かたき打ちに行くので赤い靴をはく 天才に負けないように努力する 米子市

出しゃばりな口を時々縫い合わす 身障者手帳と蛇行する命 羽曳野市 Ш 寿

美

足袋白し喪主の姿のきびしかり 宝塚市

渡り鳥高圧線を五線譜に 小うるさい奴だ挨拶しておこう 箕面市 江

きつ ちりと約束守りまだ小者 橋

り気のないスピーチに湧く拍手 癪玉の乾燥剤を入れ替える

飾 癇

箸を割る心を決めているように 鳥取県

凩がわたしの首をねらってる 米子市 Ш 夕

微熱がつづく低い山から登ってゆ 冬の海あなたの芸は本物だ <

航海を終えてマストは山へゆく 夢芝居いつでも馬鹿になれる親

代

冴えぬ犠打ばかりで父は老い給う 賽銭箱のそばにも欲しい両替機 日枝子

子

Œ

真

清 芳

はるお

西 浦 小 鹿

子

富美子

米子市

唐津市 Œ

敏

傷 だらけの膝で陽気に生きている 絆いつでも断ち切れる

宍道湖の声を白魚から貰う 有頂天になってる捻子が弛んでる 米子市 瑞

枝

北国の冬をもそもそ生きている 甲 吉

美しくまつ毛に咲いた雪の花 出 貞

みな健康隙間だらけの家ですが 年金が時には汗をかけと言う 人

目先きく人と歩いて草臥れる 白菊のもつ悲しみを知っている 本 沢 あか里 かりん

大切にしまいこまれて毬しぼむ 鳥取市 美っ千

真夜中の郵便ポスト人恋うて 貴男への夢が溢れて困ります 7

豊中市 Ш 慶

外は雪ショーウインドは春を着る 牡丹雪何もなかった傘たたむ

明 光

灰色のアラブにおこる砂嵐 福ばかり追うから鬼が顔を出す

秀 峰

燗ざまし集めおでんのかくし味

生きてゆく

演技鬼にも仏にも

何げない顔でさぐりを入れてくる

																	707-20							Driver.			7555	
雑草に育てそこねた子の未来	和泉市中川機	飲んで吸うて妻より先に逝くつもり	ぶっつかる個性なだめてまだ夫婦	倉敷市 田 辺 灸 六	ご先祖の血が騒ぎ出す大とんど	くるまくるま腸閉塞の高速路	寝屋川市 江 口 度	屋台にはひと味ちがう味があり	スポーツに国境無しは建前か	摂津市 もちづき 遊 美		桃咲いて義母の七回忌を飾る	鳥取県鈴木公弘	〇型で人の難儀は見逃せず	声出せば届く島だがよその国	岸和田市 三 輪 通 彦	新聞も読まず二日を旅の人	賑わいに遠い鄙にも宵戎	堺市 山 本 半 銭	誂えのお重牽制し合う箸	人間の欲ピリオドを打ち忘れ	大阪府 深 日 白光子	オロオロと言い訳してる落ち椿	不自然な背伸びがマークされている	和歌山市 桜 井 千 秀	ちちははと呼ばせ横文字アレルギー	親しみがひしひし誤字の便りから	今治市 渡 辺 南 奉
一本の鍬がわたしをはなさない	鳥取県さえきやえ	新しい手帖に君の誕生日	和歌山市 田 中 輝 子	欲抜けて祖母はかわいく惚け給い	寝屋川市 堀 江 光 子	ひき算が上手になって救われる	和歌山市 後藤 正 子	勇ましい仮面外して孤に還る	鳥取県 上 田 俊 路	何気なく蹴った石から渦の中	和歌山市 堀 端 三 男	ジングルベルは軍艦マーチより疼く	八尾市 籾 山 隆	神経は研ぎすましてるなまけ者	吹田市 栗 谷 春 子	秘密ない夫婦で垢を流し合う	自分だけ若いと思い友と逢う	姫路市 福島 姫 女	心まで酔える仲間と居るのれん	その人の質状しばらくてのひらに	堺 市 高 橋 千万子	しあわせを信じています綿帽子	めぐり逢いこんな素敵な人もいた	鳥取県 西 原 艶 子	ひたすらのいのちよ土に還るまで	歳月や石の丸さへ問いかける	兵庫県遠山可住	久しぶりニックネームが先に出る
	見て見ない聞いて聞かないのが敵だ	鳥取市武田帆雀		倉吉市				羽曳野市徳山みつこ	一日の疲れを癒せない無職	海南市 三 宅 保 州		鳥取県乾隆風		寝屋川市 稲 葉 冬 葉		羽曳野市 芦 田 絢 子		米子市 茂 理 高 代	でって来る		ってくる	佐賀県 寺 中 三枝子	逢いびきのお終いにゆくラーメン屋	鳥取県江原とみお	耕せば土正直に返事する	今治市 越 智 一 水	届かない処で赤い実が揺れる	香川県

京都市 松 川 杜 的		兵庫界 酒 井 靖 子	測るもの持ってる男嫌われる	鳴戸市 八 木 芳 水	人形の家に電化が進みすぎ	名古屋市 藤 井 高 子	おんな心に男重ねてみただけさ	鳥取市大坪天涯	厨では妥協に遠い皿の音	和歌山市 青 枝 鉄 治	海遊館 人間様が見られてる		ジャンケンで負けて炬燵を出る用事	和歌山市 古久保 和 子	定年の闇に落ち葉が積り出す		男運あきらめてから逞しい	米子市 石 垣 花 子	負の匂い持つ人だった縁など	和歌山市森茜	目を閉じてごらん自分が見えるから	今治市 矢 野 佳 雲	好物を知っててくれる贈り物	岡山県 池 田 半 仙	番犬のようにおっさんよく吠える	門真市 藤 田 翔	テレビ故障しばし無風の中に居る	藤井寺市 菊 地 繁 男
側に居るだけで温もり分かる人	香川県 辻 上 よしみ	二人なら地獄極楽問いません	和歌山市 榎 原 公 子	輪の中で一息置いて返事する	西宮市林はつ絵	殊勝気に少しおくれて影法師	米子市 中 井 ゆ き	子が親を選べないからドラマあり	映輝	遺言が要るほど遺す財は無い	鳥取県 林 露 杖	ぎりぎりの暮しへ花は咲かせてる	米子市 光 井 玲 子	嘘おっしゃい不倫願望ないなんて	和歌山市田中みね	痛んでも手足ある身に先ず感謝	唐津市浜本ちよ	酒好きな女性の友がふえてくる	八尾市 山 下 美津留	内心は揺れているのに知らぬ顔	八戸市 島 田 昭 治	半世紀妻の鼾に耐えました	口忠雄	土壇場の女が息をととのえる	岸和田市古野ひで	おしゃれにはすこしとどかぬ冬帽子	藤井寺市 高 田 美代子	電卓をきっちりたたき母卒寿
	ジャンパーの姿が似合うコップ酒	香川県工藤吟笑	ポケットを調べたようなことを言う	松原市 小 池 しげお	物忘れ齢の所為にはしたくない	高槻市 川 島 諷云児	学校で息抜きしてる塾通い	十和田市 阿 部 進	栄転へ孤独な椅子が待っている	姫路市 中 塚 遊 峰	灰汁つよく八方美人にはなれず	和歌山市 山 口 三千子	真直ぐに歩けば落し穴がある	<b>笠岡市 松 本 忠 三</b>	見る人は見てます尻尾つかまえる	和歌山市山川克子	産声にいよいよ父となりたるか	岡山県 小 林 妻 子	打ち消して欲しくて口に出してみる	宝塚市丸山よし津	他人同士我慢重ねた夫婦です	鳥取市岩原喬水	馬鹿にしたシートベルトに助けられ	鳥取県山内芳江	女房よりともかく先に死んでやれ	大阪市 塩 田 新一郎	非行児に育てた寡婦の反省記	静岡市 渥 美 弧 秀

コスモスの種をいじめる雪の修羅	弘前市 波多野 五楽庵 遅咲き	打ち寄せる白波海の裾模様	唐津市 野 崎 ハ ル 恒例の	かじかんだ手に寒鮒の暖かさ	唐津市 野 田 旭 恒 米寿ま	正月だ心の窓も拭いて待ち	倉吉市 奥 谷 弘 朗 デスマ	曖昧と四角四面が同居する	広島市 中 村 要 これ	午年をオグリキャップが締めくくり	藤井寺市 中 島 志 洋 雪女	神様の地図にもあったテリトリー	砂川市 大橋 政良 早春の	行き先を探して戻る年賀状	高知市 北川 竹 萌 凍てつい	絶対に土地は売らへんおばあちゃん	大阪市 尾 崎 黄 紅 雪だの	労死を会社の所為にする甘え	大阪市 北 勝 美 七草を	端た株持ってしょぼんと寝正月	橋本市 岸 本 木 魚 午後六時	変化球投げても受けてくれる妻	羽曳野市 麻 野 幽 玄 赤鬼の	られて涙とすする晦日そば	寝屋川市 坂 上 高 栄 無病息		姫路市 大 房 葉 香 雑念を
競馬易の繋がアップで出こティご 京都市 山 本 規不風	きの花も実をつけ披露宴	唐津市 山 下 剛	風邪を引いてる誕生日	尼崎市 春 城 年	まで三段跳びで行くつもり	唐津市 田 口 虹	スク七十年のしわも消え(足	豊中市田中正	までと大屋根の雪滑り出し	茨木市 堀 良	性善説を盾にする	出雲市 園 山 多賀子	橋で別れた人のこと	島根県竹内すみこ	いた星座の底の露天風呂	川西市 松 本 ただし	み漬物つけて待つお宿	大阪市 大 福 留	を食べて今年もがんばろう	蘭	晦日の月は気が早い	尾あい	隣の席が空いている	出雲市 森 山 健	病息災ばあちゃんが飲む寒の水	倉吉市 淡路 ゆり子	雑念を誦してくれる第の層
▼受可は、毎月5日までに川卵答事務所へ-風 ほんのすこし残っています命の火	岡山田	司 補聴器を奉納して福もらおう	大阪	pH	東大阪	汀 白酒で今宵は老いの雛祭り		坊 二日分花に水やり旅に出る F が	景気良い音で隊へ来た初布		威張ることなんにもないが満ちている		バイバイとあっけらかんに孫が去ぬ		仕事初めハワイで焼いた顔を出し		ささやかな足跡だけど残さねば		ともかくも死ぬまで進歩する積り	4	也欠雪の付舎	がいて 対対がいて 一日 一善・	ノドロレ寺ら切しないで背負って	7	1トローストニー 羽由	縞タイを黒タイに代え急ぐ午後	i i



私もガ れそうな釦をし み 0 ラスの の子を探してる 尽きた匂い 靴を履いてみ かと付け直 袋を宥めよう お 月様

子 ふさわ 淋しさ 育て 1 0 が Vi 猫 V ことば モンの黄 に わたし をさがす冬の まで を置き替える 辿り 屋 根

逆らわ

ぬ

人

が重荷になっ

てく

貝

たなる

番やさしそうだから

寺沢

みど里

これ

からも木綿

V

腐

0)

味でい

3 屋

びを言

皮山

盛りにして

笑

声

女より 焼芋 屋 灯 男を先に見て 呼 ぶため ŋ がい つも 6 Vi 歩か は 傾だろう せ

H 咲 1 \$ は 桃 花 しも愛の告白 お 喋 動 フォルテの 10 n 2 12 罪を深 7 た三輪 お 1 に昏 では 10 < L 符 n を な 13 てゆ る か 御 飯 <

1

0

格

言

通

りやってみよう

理

山県

玉

千万子

知

义

を描

1

ます

歌山 西 Ш 在各方名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名

歌山市 西宮市 茨木市 松江 後藤 竹内 田 す 3 み子 良江 Œ

名古屋· 歌山 大阪 吹田 米子市 大阪 西宮市 歌山 政岡 板野 近 H 本 藤 榎 西 林 井 中 原 出 は H 枝子 公子 つ絵 楽

> みか 年賀 黒を調 二ん月 温 真 人 お 実は 顔 相 0 年 んの で聞い は 輪 玉 選 15 状 無口 の中で る明日 書 \$ 厳 ようやく 鬼 冬の L いて下さる地蔵さま口な人に聞くがいい て思い 专 10 0 18 勝 b 0) 優 \$ ま 手 ズ U たし 孫に î 倖 ま 12 0 to から せ V b 姑 恵まれ 0 深 信 顔 猫 1) 0 感をする 樹 くなる じつ 買 座 かい から 0 が定まら てい べさん 実 UN 戻 す 82

美子 水割 意地 点滴 アイ スラン きり ゴー 遅咲 参道 きの花 辿っ にア わ 0 張 ル まで く心 底 0 春 + プ ŋ 7 T ット で 0 F 舞 スキ に手 0 お 蕾 沈 1 Vi 1 ぼれ 思 か 0 する生甲 かい ホ 心默考 b 步 もう F 抜 1 きかも なわ きの 7 丰 40 ル ムなたこ焼 た 届 庭 0 3 たし 詫 人で食べてい 地 0 斐は何だろ 数あと幾

石

てしまう

歌山市 歌山市 歌山 歌山 内田 松本伊都 H 桜井 江 田 中 本 すみ子 たず 冽 勝子 結 実

和歌山 和歌 富田林 藤井寺市 島根県 岡山県 歌山 豊中市 松原 鳥取 富山 市 松本 光井 舟渡 佐藤 西原 辻川 Ш 古久保和子 高 池 居 H 美代子 慶子 森子

出番待 幸せはゆっくり 非常階段 住みついた猫へ鈴買う春はそこ 薬にも毒にもならず紅 娘には娘の段取りがあり保 さみしくて風の噂を鵜吞みする 夢は夢はずれくじにも礼を言う エネルギー 四角皆切 覚悟して今日は打たれる杭になる ひとり抜けふたり抜けして春うらら 小さい手を引いて早 七草を摘んで喜ぶ故郷がある 寄り添うて小さな傷を被い ふるさとの喜怒哀楽を積 あう 蔵庫少うし空 面 つからか娘に負けている台所 いワインが焦れ しさを労るように椿 n 下 が 出を美しい絵に描き変える の街 れし今日 の妥協 つ芽にやわらかく春の 優先だからな を一 0 を春の庭からもらっ た余生を労られ もあし 度は昇って見ることだ 歩い ホット て七日粥 ている雪景色 つか考える たを信じている て来 自 13 VD をひく の宵 な三 小たの む尾 合う 存 面 か 記 事

> 和歌山 歌山市 大阪市 鳥取県 歌山 岡山県 尼崎市 大阪市 (塚市 福井 春城 亀井 鈴木 矢内寿惠子 さえきやえ 内芝登志代 坂 紀 寿 年代 久子 美子 円女 節

> > 気紛

n

な筆におさまる楤んぼう

じわじわと気付かぬ

ように値が

Ŀ

か n

和歌山市 寝屋川市 八尾市 有田市 歌山市 西宮市 中川 高杉 堀江 森 Ш 生馬芙美子 西口いわゑ 口三千子 千步 光子

寝屋川 兵庫県 歌山 倉垣 Ш 本 あ 8 恵美

寝屋川市

平松 桜沢

かすみ

堺

rhi

あ

か里

苦労 茶の もやもやを吸う掃除機 雪ちらちら手をとり合って師 間 なら したむかし昔が消えかかる 炬 X 燵い 景色だとてもよく が欲しくなる 柑 が 置 判 いて 0) る 墓参 あ 3

子育ての記憶薄れてしまうほ 生と死の境界線を医者 菜の花の浅漬け今日 自分史とダブらせて見る青い ての 煙草モラルが追 1 が引く V い夢 いかける 恋 を

和泉市

楓

寝屋川市 米子市 岡山県 大阪市 吹田 大阪市 米子市 米子市 大阪市 堺 神原 井上 板東 石垣 金山 千 町 原 H H 一磯典 智加 7 夕子 花子 理 妙子 菜月 惠 磁 文

と淋しがっているのです。句は上からも下からも、 目。そう言われてみるとテレビの好きな子が増えて、 すら出来ない人があまりにも多い。やりきれない現実を一句にされ よくよく思い当る。三句目。「ガラスの靴を履いてみる」と作者の よく物を見て作句しなければいけないと言われるが、このことだと めてみたらひそやかに匂い続けるものを大切にして頂きたい。二句 しれない。だが匂い袋というのが如何にも女性として相応しい。宥 人」とは読む者の心にも重くのしかかる。 心を表白された。 ゴシックの一句目。匂いの尽きたものとはあるいは自身の心かも それが作者の人生の一齣として残される さて何が始まるかと期待をさせる。 女は何時までもそんな思いを心の隅に抱いている 今世の中には逆らうこと 四句目。 そして横からも お月様はきっ 「逆らわ 82

ガキに雑詠る句。

兵庫県 倉吉市

西井 淡路の

や子

ŋ

111

サエ

投句先 大阪市生野区勝山 出 18 子

# ひみこさろん

### 春の夜の夢

### 柴 田 英壬子

「また世の中が良うなったら、きっともっ や日用品などを手に入れていたものです。 や日用品などを手に入れていたものです。 私の古いお雛様も、そうした頃に五升程の お米と引換えに人手に渡ったのでした。

「また世の中が良うなったら、きっともっと佳い綺麗な一揃いを買うて返してあげるさと住い綺麗な一揃いを買うて返してあげるさかいに…」と祖母は言いましたが。 近ごろ何故か、とても雛人形が欲しくてならないのです。それも〇〇作の豪華なケースらないのです。それも〇〇作の豪華なケースらないのです。それも〇〇作の豪華なケースらないのです。ぼんぼりに灯を入れ、桃の花でいいのです。ぼんぼりに灯を入れ、桃の花でいいのです。ぼんぼりに灯を入れ、桃の花

> を汲んであのメロディーに心を洗われたい。 緑の星になり給うた人のこと、南の海に散 った二十六歳の叔父のこと、ETC。 肌寒い春の育にふんわりした空気に身を包 んで、生きている幸せを味わいたいものです。 ところが生憎、主人はそう言ったことが嫌 いな人ですから、世の中は思うに任せません。 けど、夢は捨てない!いつか私のお雛様を我 が家におむかえしたいと思っています。 桃の花内緒ばなしをみんな聞く 英壬子

# 雛人形の思い出

### 園 山 多賀子

立ち尽くして人形に目を凝らした。そして、立ち尽くして人形に目を凝らした。しばらく七段飾り緋毛氈の豪華な飾り雛。しばらく七段飾り緋毛氈の豪華な飾り雛。しばらく

よっと四十五年前の娘の雛人形が土蔵に眠ったままのことを思い出した。娘は終戦の年の十二月生れ。衣料も切符制で私は専らミシンを踏んでリフォーム、祖母の長襦袢がワンピースに、赤いモスリンの裾除けがスカートに化けたり、姑のコートで作った服を近所の披露宴に臆面もなく着て出たり、今では考えられない苦労をしたが、それでも結構楽しかった。家に帰ると何はさておき、土蔵の棚から人形の箱を取り出した。タイムカプセルを掘り形の箱を取り出した。タイムカプセルを掘り形の箱を取り出した。タイムカプセルを掘り形の箱を取り出した。タイムカプセルを掘り形の箱を取り出した。タイムカプセルを掘り形の箱を取り出した。タイムカプセルを掘りが高くと一対のお雛様。顔の胡粉も剝げ、家に帰ると何はさておき、土蔵の棚から人で話りない。場色に認せた新聞を強くと一対のお雛様。顔の胡粉も剝げ、ないないというない。

健康食品として梅も評価された。 もの実と交換という条件だった。戦後のこと、 はない時代に世話好きな身内の小母が、

その後、三月のお節句には床の間に少し不れられてしまった。今、娘も四十半ば、息忘れられてしまった。今、娘も四十半ば、息がのことなど思い出から消え、そして私も今子の大学受験などで梅の身代りになった雛人

## 雛人形と官女

### 政 岡 日枝子

いなーと思いますよ」
「ボクの母さんは、雛人形の官女のようで
がなーと思いますよ。
いなーと思いますよ」

「ある宗教の教祖のようなことをしていま

青年はたて続けに母のことを語った。 その青年が雪の未だある頃大山に行き、行その青年が雪の未だある頃大山に行き、行た。米子に来られた方はご存知でしょうが、た。米子に来られた方はご存知でしょうが、た。米子に来られた方はご存知でしょうが、たっぱいの高さを誇る富士山に似た雄姿を持つ中国一の高さを誇る富士山に似た雄姿を持つても、いつ登っても魅力ある山です。

言葉にならない叫び声を出しながら、流れ去を聞いた。岩場に立って髪を張り乱し、何かを聞いた。岩場に立って髪を張り乱し、何からと、「ウォーン・ウォーン」という喚き声た。青年のために、その夏、灯籠流しをしてた。青年のために、その夏、灯籠流しをしてた。青年のために、その夏、灯籠流しをしてのいると、「ウォーン」という喚き声いると、「ウォーン」という喚き声にならない叫び声を出しながら、流れ去

って行く精霊舟を見送る青年の母の姿をそこ に見たのである。

「三人官女のように綺麗ですよ」 「三人官女のように綺麗ですよ」 と彼が言った母は、今、官女とはおよそかけと彼が言った母は、今、官女とはおよそかけと彼が言った母は、今、官女とはおよそかけと彼が言った母に、これず駈け寄ってそを見せているのだった。思わず駈け寄ってそ。まるで官女の手のようだった。春が来て雛人形を巷で見かける頃になると春が来て雛人形を巷で見かける頃になると

## お雛さま

## 福本英子

総属な瞳がうるんで見えます。ご家庭の事情 が島神社へいらなくなったお雛さまや人形な 次島神社へいらなくなったお雛さまや人形な どが、供養して海に流してもらうために、沢 どが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、供養して海に流してもらうために、沢 とが、は、こちに違いにまいります。 になってお雛さまたちに逢いにまいります。 真新しい立派な内裏雛を見つめていると、 全国

魔なのが無造作に山積みされています。孫さんに贈られたものでしょうに、そんな綺などからか二、三年前には実家から可愛いお

大切にしていて空襲ですっかり無くした私大切にしていて空襲ですっかり無くした私

い方だとか。 三月三日のお祭りに、二艘しか出ない舟に

子供から大人までいつまでも夢を持たせてといお雛さま、雛流しの行事にも公害論の出ているこの頃、積み残された人形のことはあまり聞かないことにしています。今、雛人形売り出しの真っ最中です、いつきでも大切に可愛がって下さるご家庭へ買わまでも大切に可愛がって下さるご家庭へ買われますようにと祈っています。

### お知らせ

哀しい裏話を書いてお雛さまごめんなさい。

雛流し霞み遠くに淡路島

す。 一日本子は は、領収書を発送しておりますが、会 計事務簡素化のため、4月からこれを廃 計事務簡素化のため、4月からこれを廃 にしますので、ご諒承をお願いいたしま で、ご前承をお願いいたしま

川柳塔社会計部

## 茶の間

### 崎山美子

私の家は、駅から歩いて三分程のところにある。街の中央商店街から一歩横道にそれたある。街の中央商店街から一歩横道にそれた数楽街の一角にあり、着物の洗いはり、京染歓楽街の一角にあら、茶の間にカラオケの音が流れてきて、知らぬうちにハミングしていが流れてきて、知らぬうちにハミングしている。時がある。我が家の茶の間の構成員は、高島時がある。我が家の茶の間の構成員は、高島の母と妹と私、それに三歳になる雄犬の三人一匹である。

せまい家で商売をしているので、本来の茶の間になるのは、週一回の定休日だけで、茶の間も時には、仕事場になったり、事務所での間も時には、仕事場になったり、事務所でといつも物であふれていて、他人が見ればよといつも物であふれていて、他人が見ればよく、何がどこにあるのかすぐ解るようにいよく、何がどこにあるのかすぐ解るようになっている。

もはって毎日記入している。テレビドラマでってあり、健康管理のために、家族の血圧表壁には、お客様や外注先への連絡事項がは

見るような落ちついた茶の間にあこがれていら有難いもので、どこへ出かけても家へ帰っら有難いもので、どこへ出かけても家へ帰って狭い茶の間へ座り、番茶を家族そろって楽しんでいる時が、一番落ちつくから不思議でしんでいる時が、一番落ちつくから不思議でしんでいる時が、一番落ちつくから不思議でしんでいる時が、一番落ちつくから不思議でしんでいる時である。また、私が下手な川柳をつくるのもこの茶の間である。茶の間は我が家の中心であり、生活の全てである。これからもますなれてい

## 大 黒 柱

#### 山 本 玉

恵

この柱を拭いてくれるかしらと考えるきょうこの柱を拭いてくれるかしらと考えるきょうこの柱を拭いてくれるかしらと考えるきょうこの柱を拭いてくれるかしらと考えるきょうこの柱を拭いてくれるかしらと考えるきょう

# 夜市川柳募集

投句先 最終回 第11回「賭ける 第10回 「越す」 <del>=</del> 593 猫 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑方 橘高 薫風 藻介 堺川柳会 4月末 5月末 3月末

このごろです。

十年程前から、私は一人暮らしをしております。しかし、お正月、お盆ともなりますと一遍に茶の間がいっぱいになります。それはたいへんな賑いです。もし大黒柱に物が言えたいへんな賑いです。もし大黒柱に物が言えたいへんな脈いです。もの大黒柱に物が言えたいへんないです。

を思いながらせっせと柱を拭いています。 と思いながらせっせと柱を拭いています。 と思いながらせっせと柱を拭いています。私 の悲しみ、淋しさ、うれしいこと、みんなみ の悲しみ、淋しさ、うれしいこと、みんなみ んな見て聞いて、でんと構えていてほしいと 念じております。私もこの大黒柱に負けては おられません。留守を守ってバトンタッチが できる日までがんばり通し、生きて行きたい できる日までがんばり通し、生きて行きたい できる日までがんばり通し、生きて行きたい と思いながらせっせと柱を拭いています。

## 花のささやき

## さえき や え

# ◆優雅にはあらねど平々凡々と◆

雪の中、狂い咲きのさつきが美しい。うすな雪と美の競演をして、ほっぽっと咲いては、まっ白紫の彩をして、ほっになったのは、勤めていたいと夢を描くようになったのは、動めていた頃より、こんな花の美しさ、何気ない野の花たちの美しさに魅せられていたからでもある。今、野菜の傍に沢山の花を咲かせている。その花たちが、畑へ行く楽しみを倍加してくその花たちが、畑へ行く楽しみを倍加してくれている。花たちのささやく畑で、おいしい野菜を作りたいという長年の夢が、やっとかないかけている。

# ◆くだがゆを信じてにぎる春の種◆

神様は、もう一年間の天変地異など、すべてご承知だろうか。氏神様の正月神事であるてご承知だろうか。氏神様の正月神事である「くだがゆ」のお札を見て、春の種を選ぶ。「くだがゆ」のお札を見て、春の種を選ぶ。

一分と出ていた「くだがゆ」に逆ら

れなるかな百姓よ、であった。
 ◆杏子お前 亡父の言葉が分かるのか◆ 三十年もたっていた杏子を、生前の亡父の三十年もたっていた杏子を、生前の亡父の共いずれの木が芽を吹いた。亡父の思いや言葉が分かっていたかのように、年々花をつけ、集をつけては、新しい息吹きを与えてくれてまをつけては、新しい息吹きを与えてくれている。杏子の花はほんとに美しい。

## 余暇うれし

### 中塚遊り

りました。私事ですが、戦争中の昭和十九年りました。私事ですが、戦争中の昭和十九年 二月、両親に説得され、思いがけない所へ嫁 ごました。先方にはご両親と長男の本人のほ がは、次男がすでに戦死し、三男は製鉄所勤 かは、次男がすでに戦死し、三男は製鉄所勤 かは、次男がすでに戦死し、三男は製鉄所勤 がは、次男がすでに戦死し、三男は製鉄所勤 がは、次男がすびに戦がは、一人のほかがけない所へ嫁 でいることが、対し、一人のほかがけない所へ嫁 がは、次男がすびに戦死し、三男は製鉄所勤 がは、次男がらないままに三か月が過ぎたある 日、来るべきものが来ました。その後、私は悪阻にな り、月日も満ちて空襲警報の中で難産に苦し

骨が帰り、婚家と話合いの上、父を知らぬ子ところが夫は戦死、そして敗戦。やがて遺みながら身二つになりました。

ってまいた大豆は、一合の実もとれず、あわ

人一倍、有意義に利用させていただいており、人一倍、有意義に利用させていたが、今にきました。辛い勤務ではありましたが、今にきました。辛い勤務ではありましたが、今にきました。辛い勤務ではありましたが、今にかって年金が頂戴できるようになり、余暇もなって年金が頂戴できるようになり、泉の洋裁学校や会社の寮などの仕事もし、県の

青墨で大黒様画く余暇うれしずがる樹もよる傘もないすぎた日々すがる樹もよる傘もないすぎた日々

# 川柳塔用箋 (1冊1100円)

# ※数量がまとまれば、「ゆうパック」で

#### 村 d 女



美

美を愛でる日本に集う美術品とを愛でる日本に集う美術品と、 変わり続くいい料助を 悟る 娘の顔美しい大祭りの火に燃えるもの男肌はほえんでごらんきっと美人になる鏡話はえんでごらんきっと美人になる鏡話なんではないが笑顔が個性的美人ではないが笑顔が個性的美人ではないが笑顔が個性的時人ではないが笑顔が個性的時人ではないが笑顔が個性的時間である。 人も仏も美しい 対して 変わり 続くいい 料 からこぼれる披露宴り く 交 わり 続くいい 料 からこぼれる披露宴り く 交 わり 続くいい 料 からこぼれる披露宴り く 交 わり 続くいい 料 からこぼれる披露宴り と 変かり にして成人式 大美席秋美美美美少美一満美ほ火胎美鬼美 をい目若い ŧ n ばふ II < 成デ 1 1 達んたく 達 た つ み る て照京玉ろ 子子恵亭水進

> L1 光

> > T

な

舞

寸.

0 が華

裸婦像が

無人 

正

雪夕海出

小

すぎかなしか獲ね 美しく万華

雪美しく抱 映え貧しい

V 0

てく

貧しい

村

ヴィー 美しいうちが花よと見合責め サイーナスの美にシャッターを切りつづけ 白ゼィーナスの美にシャッターを切りつづけ 白ゼール はい故郷は脳事にナー 逆美フ傷美美想美魅 美 わ健美美 心ししいし ままな い海で小ざかなしか獲れ出 は 皆 美 しく 万 華いうちが花よと見合青いれた伝統美を織る機の 1 人と思う蘭 パンツの 10 蘭肌ま 花艷 一典可明寿サ右 恵子住水子子近 白ち 多石理

美しく 咲こう ね春を待つ 蕾美しい故郷は墓があるばかり散るさだめ沙羅はひと日の美に生きる散るさだめ沙羅はひと日の美に生きる美しい夕陽がお手々つながせる 究 極 0 の冬のが、 美を 競 12 合 う 0 2 0 先 元宵遊富杜 度 江明峰惠的

ゆのし

4.

の暗美のな落と

1 美だいる穴

美

L

嘘

盛

る

 $\mathbf{III}$ 

かい

欠

17

て

10

た

雄

17

る無 風も шш

眼

落

ち

椿

女

0

嘘

が

美

L

10

歩そ

脚元

線旦

白志武雀 踊

美

L

<

なろ

う

2

鏡

2

か

V

7

る

文

子

L 美いい愛

0

3

愛諷博軒渓信清

冬絵

もないに日

落 詩

とし があ

紅

#### 石 垣 花 子 選

紅紅墓紅仮女紅散散ほ口紅し紅潔何い迷紅紅修下 のバ りほ紅差 つい白時いつ白楓業積 n バ石白の ・敷いた紅 に を変えて は紅を変えて は紅を変えて は紅を変えて がりと本音 に 指いつし がりと本音 がりと本音 業 紅のルージュが知っている か は おなどらない ラの ラに粉世 どきを 人て粉葉僧 ほ を変えて非番となるし指いつしか女になってかりと本音を閉ざす紅む へを見つけた ぬばた 付紅を の紅落 た紅大 n して父 比紅白に 小指の 足 芯れて ったもみじは果報A 小指の血が紅! ぬ極 労 は はめ 自 紅が 形番 たてち散 分 娘が 避 いってる紅椿となる白衣になっている 経音となる白衣を となる白衣を はん て 庭 籍 かに 血が 通う が判 たのはる 史筆 た日の 罪 0 2 句う な 果報者が紅の色るえてる 朝ほ お 肌 京和信三ひでの子子義男の 智志喬達加恵重水子 重水子郎州人



— 76 −

一点方す

く女の

主張

してた妻

紅紅病大

む内

Ш

床

安い 楽屋 ほほ紅のないくらしです手も荒れる 子をふたり真紅の糸にぶらさげる父の味 母の味抱く紅生姜 n 台にころころルージュ亡母の唄 僧 の卒業まではとパート 10 Ш 母もまだ紅の小袖を持 血が かえてきた口紅がよく喋り 風呂ピエロの紅が浮いている 0 0 へ女は紅 て は気遣い 紅が茶碗の縁につい 画 騒ぐ真っ赤な薔薇もらう 布いっぱいに紅のあと 2 お 幽 玄さま ながら 紅を塗る 紅をひく よ ている な h し正艶公右 げ敏子弘近 雄 はるお みつこ 浪速子 文寿典 0 度 螢 17

で紅うすくさすお正月 十二ひとえの 紅 ほ 雀 溪 玉 声 恵

入院をすると 60 うのに紅をさし 文 六十路には六十路の彩でひくルージュ

職場の空気かるくする

正鉄

0

愛は

緋 姑 は 氈 12 Va 雛 0 2 П 思 紅 う 老 嫁 40 給 う 紅 あ 柳五郎 いやめ

靴愛不一或錯

吊な愛の・

1

丸

く転

が

母

に愛を

して送 す 詞

出 10

信

本る 覚 の実

は

-

味

0 Y 0 鞭

愛してから

紅

花へつぼみからもうラブコール

#### 原 寿 子 選

愛されています小さな灯は消さぬ 突き放すときにはそんな愛もある

しあわせ無限

大に す母

た ず 子 子 子 舟 正和石



愛 お 見 合花

0

叫び

抱いてあなたの海に佇つ

テ

便 直

りを頂

くことに

愛があ

3

す 右鉄

み子

性

う今

を ば

0 満

ち

この一石 愛の波紋をかもすかもたとう紙を開けば香る母の愛押しつけの愛には広い海がない 愛真乗 白 これでも 一 か 本冷爱飽 口き掌に一 りそ めた愛 ひと ŋ 筋 物 0 食 途 継 0 あ 0 めの愛なればこそ美しい 愛 燃ゆ る坂 地球にほしい愛の文字 つ身にさんさんと春 61 かこれでもかという母 愛を奏でる 雪止めそっと愛語する には汗がにじみ出る で愛確 苦渋で満たすモカの味 る心を抱 に か 力源 めに来た港 3 胸 がある L の鈴 の雨 の愛 8 規不風 IE 木高 重 元理 男 柏 坊 江 瑛 愛足してあげた満身創痍なれ 抱きした

善

積

んで一つの

愛に満たされる

素うどんを愛する父が好きである 愛と言うビンタが頰にとんで来る

痍なれど貫く愛もあり

たら渦に巻き込まれ

きしめて愛のあかしを知る涙

高

明

泉

くつ溶

かして流

の河 なる

街でひとつの愛ひろう 鞭と言う死語があ 愛とは聖書繰 う愛に咲き 地 to 3 3 多賀子 清新寿 諷 云児 柳 愛 響 海 平手打ちそんなきびしい愛もある i ひとつ と言 鳴りのり 3 ずくと愛の炎が燃えてくる 0 合 う 水 う 火の輪くぐって強くなる 形 ズムへ愛が疼き出 谺 B 乳 は 愛が 房 爱 3 0) あ < 証 る ま か + 重 る 3 彭 雀踊子 浪速子 白光子 京 富

はぐくんだ愛 休 止 符を 打つ 7 文束に棲んでいる to は 鳴 n 保 妻 子 州

芙美子 伊津志 子

惠

#### か步数室 栄 転

#### 进 白 渓 子

ず締切日を厳守してほしいと思います。 想が単純すぎて多数を割愛したことを諒解さ あり、編集部へ出稿するのが困難なので、 れたい。なお、締切後到着するものが若干名 栄転の単身赴任へまた迷い (栄転の年から増えた年賀状 栄転へ準備しておくのし袋 栄転に出してばかり居るのし袋 豆撒いて栄転鬼を寄せつけず 栄転もほしいが家族別れは淋しすぎ 栄転も単身赴任はちと酷い 栄転へくるわくるわの年賀状 栄転に独り豆蒔く鬼は外 今月の題「栄転」は、栄転に伴う単身赴任 家族との別居等が大半を占めたため、着 志 好 重 久 女 花

栄転の情報屋台の酒で聞き

、栄転は良いが別居は望まない

ミニ情報もう栄転に聞かす酒

ちず子

栄転に上司のまなこ突きささる

ふさ子

(栄転の辞令に家族引き裂かれ

治

江

渓

(会長)辛かに交長しに建っし	-		た云二月のまな一思なない
栄転の辞令に家族を引き難す			(独身の気分に栄転逆戻り)
(新築をしたが栄転待っていた)	里	侑	栄転で単身赴任若返り
新築へ栄転ジンクス生きている			(海外へ栄転学士かも知れず)
(栄転でないのに万才して祝い)	吾	金	海外へ行く栄転に気が重い
左遷じみた栄転へバンザイ白々しい			(栄転へ妻と一緒に祝う膳)
(栄転を餌に難題切り出され)	風	春	栄転へ妻が心づくしの床へ私
栄転をほのめかされて無理をきき			(栄転を祝う大盃受けさされ)
(単身の赴任栄転愚痴にせず)	子	静	栄転の大盃嬉し目の位置へ
栄転もいいが単身赴任です			(栄転の学士に序列などはない)
栄転に単身赴任と言うおまけ	弘	時	年功序列桂馬とびする社交性
(定年に近い栄転だと思う)			(栄転の荷にエプロンも入れておく)
定年の前に栄転やる気増す	子	和	栄転の地にエプロンを持って行く
(栄転の内示を嬉しく聞く背中)			(栄転のそれから運が向きはじめ)
栄転の内示背中が笑ってる	ヱ	マサエ	栄転で流れを変える椅子が待つ
(栄転へ老母が田舎離れない)			(栄転の赴任先には雪がある)
栄転へ老母を残して遠く住む	おさむ	おき	栄転も単身赴任で北の涯
(途中下車して栄転を尋ねて来)			(栄転と言う名で僻地へ追いやられ)
フルムーン栄転の地に途中下車	忠禄	忠	栄転と言う名の下の島流し
(栄転を家族が不満にする別居)	甲氏	幟	栄転に名を借り僻地飛ばさるる
栄転も別居の家族は不満顔			(栄転の社宅へ噂先につき)
(栄転の椅子にけむたい部下が居る)	枝	和	栄転へ社宅雀の地獄耳
栄転の椅子にきびしい風あたり			(栄転は良いが転校には困り)
(ライバルの栄転ホームへ送らない)	性	郷隆	栄転も子の転校に思案する
栄転のライバルだけは送れない			(慣れるまで栄転周りに気を使い)
(栄転をしても上司をけむたがり)	水	芳	栄転に闘志静かな胸の内

男

ようじ

吉太郎

				(単身の赴任寂しいご栄転)		(栄伝を知らずこ事故こ豊うた人)
白渓子	辻	村	杏	栄転だが単身赴任寂しいね	風樹	栄転の言葉は悲し知らず死に
19	宛先 〒59 高槻市桜ヶ丘北町3-19			(栄転がはずれて晩酌量が減り)		(栄転を喜び仏間へ座る母)
発表	題「目盛り」3月15日締切(5月号発表	雄	隆	栄転がなにより妻が酒を注ぐ	公子	栄転を喜ぶ母はほんまもの
	$\Diamond$			(定年に近い栄転とはさびし)		(栄転を同期の桜も来て祝い)
	イラクへの栄転ならば断る気	雄	高	栄転はきこえは良いが首近し	君江	栄転で同期の桜浮かぬ顔
白渓子	苦労して来いと栄転送り出し			(栄転の夢見つづける宮仕え)		(赴任地へ妻が布団を干しに来る)
	私の句	女	円	栄転をいつも夢見る宮仕え	ますみ	栄転地たまに妻来て布団干し
和子	栄転の椅子中東に置いてある			(お隣の栄転言葉まで変る)		(晩成と言う栄転の運が向き)
ふき子	栄転に祝辞に混じる蜂もいる。	之	みつえ	お隣さん栄転で言葉が変ってきた	明吉	大器晩成やっと捉んだ望む椅子
	栄転の噂がひとり歩きする			(定年になる栄転と自覚する)		(住み慣れた家栄転へ売り払う)
	着想と表現が巧みな句	名	失	栄転と同じ誇りある定年	康子	栄転か夫に従う外はない
	(栄転へとっくに名刺出来上り)			(愛犬も連れて栄転旅立ちす)		(栄転に罠があったとつい知らず)
春	刷りかえた名刺が語るご栄転	子	彩	栄転地に向う車にポチも乗せ	富喜子	ある筈の無い栄転が罠だった
	(栄転の報告しに来た墓参り)			(栄転の内示温めている屋台)		(栄転を断り好きな人と添う)
マサエ	栄転を待ってた亡母の墓参り	治	昭	栄転の内示足どりも軽やかに	ひでの	好きだから栄転断る口開く
	(栄転にはずれ屋台の酒に酔い)			(栄転を告げる仏間の灯をともす)		(女好きと言う栄転の噂着く)
(权)	栄転の裏で泣く人世の節理	子	民	栄転の喜ぶ顔を先ず亡母に	幸枝	栄転に小指のうわさ先に着く
	(栄転の野心は抱かぬ父の肩)			(ネクタイの派手さで分かるご栄転)		(新聞で見たと栄転電話くる)
芳	栄転の旗は振れない父真面目	子	友	栄転で派手なネクタイ多くなる	一乗	栄転を新聞で見て電話する
	(下っ端の汗へ栄転遠く居る)		3	(ネクタイをきっちり栄転締めてくる)		(栄転の日から続いた胃の不調)
ちず子	栄転が見ぬ工場の隅の汗	江	静	ネクタイと仲よくなった御栄転	みつこ	ご栄転それから続く胃の受難
	(はっきりと内助が利いたご栄転)			(同伴で発つ栄転を写される)		(バンザイで栄転都会から離れ)
友	栄転の裏に努力のあった妻	郎	太一	栄転で妻も奥さまらしく添い	すみれ	栄転のバンザイに送られて行く僻地
	(七光と言う栄転が狂わない)			(栄転の椅子ライバルの目が刺さる)		(年功と言う栄転を愚痴にせず)
	労車へ 家訓の 都カガリたす	ħ	-	栄転の椅子に馴れない肩かこる	(松	年巧で栄養の相子にある著別

#### 平成三年

# 新春おめでとう会

1月15日・大成閣

度の新同人の紹介と挨拶、遠来の出席者の紹 主幹から感謝状の贈呈が行われた。平成二年 さんと編集の史好さん(欠席のため郵送)に さんらからの祝電披露に続き、前会計の鬼遊 の奏月さんの司会で第一部が開会された。 今日、恒例の「新春おめでとう会」は、 よりまた増えて八十八名出席の盛会となった。 若者たち百九十四万人が、成入の日を迎えた 一十分に兼題が締切られ、 予定が盛り沢山のため十分早めて午後一時 大阪で万国博覧会の開かれた七十年生れの 披講となった。 薫風理事長の挨拶、 今回からデビュー 正朗夫妻、 昨年 绺

ことを一同、心の中で祈った。 人さんの手紙紹介があり、 「羊」の選者紫香さんから、 、回復の一日も早い 病気欠席の諷

新同人

の賞品も用意された。テーブルごとのジャン 年は岳人さんの尽力で趣向がこらされ、 部の懇親宴は、司会が天笑さんに代った。今 岳詩さんの乾杯の音頭により始まった第一

> のゲームを楽しんだ。 ケン勝抜き、年齢当てクイズなど、全員参加 一月本社句会天位者に

様本場仕込みの「安来節」、叮紅さんは寿美 場の「安来節」はきみえさん、鶴丸さんも同 り船」の映画説明と唄は笛生、 舌をまいた。 の川柳吟など玄人はだしの芸に笑い、酔い、 さんは詩吟の節まわしでの路郎、生々庵、栞 さんの唄をバックに「満州娘」の踊り、寿美 新同人二南さんは「国定忠治」の名セリフ、 トメ子さん「あこがれのハワイ航路」の踊り、 ーラスにより「ちびまる子ちゃん」の踊り、 んが桂香、朱夏、正子、輝子さんのバックコ が優勝、立派なトロフィーが授与された。 「貝がら節」は華子、熊生さん親子、「かえ 第二部のハイライトのかくし芸は、東雲さ 雪の朝妻の可愛い声はずむ 柳伸さん、本

む街を三三五五、 ぬままそれぞれ暖かいものを胸に、 予定時間はまたたく間に過ぎ、名残は尽き 帰路についた 暮れなず

# 奥田 みつ子 選

うぶ声は二十一世紀の光 女から母になる日の川光る 脇役が光りすぎてる喜劇だな 童話の星が光ってる 明日の光を見つめる日 川柳塔の光なり

成人式

子生

切り抜けてそれから光見えてくる 光らない部分で耐えるのはわたし ひとりゆく枯野に冬の光澄む 星光る罪ゆるす気の冬の天 光るのが好きですこうし無理をする 光追う少年の瞳は天を向く 今日も又余生光らすペンを取る 電光ニュース静かに世界の記事流 光るもの今年もやはり追うてます 光る鍋みがく女の城をみる 光るもの忘れた手だが老母達者 ストロボが光って素顔盗まれる イミテーション贈られ愛が光り出し 焼きたてのパンがピカピカおいしそう 雛人形光りはじめて春近し 真底に光るものありお人柄 行間の光に誘われているわたし 愛される証を指に光らせる 控えめな言葉が光る母の背

凡九郎

千万子

あれ以来一円玉がよく光る 二十一紀へ放つ光彩の中にいる 佳いことがありそう靴を光らせる 魚になりブルーライトの中踊る 光さす方へ祈願の絵馬掛ける 新春の陽がまぶし今年はがんばろう 月光にもらった影と初詣で 西方の光は亡母の星だろう 筋の光る涙に負けました しげお 武庫坊 叮 射月芳

福英 とみ子 理 IE. 瑛 男的 子

80

いわゑ

アリバイがほしくて羊 群を出る	ウール着て初春の羊に逢いに行く	群羊へ犬一匹の使命感	手触りの良さを羊になぞらえる	どんな年になるか羊の目をみつめ	カレンダーの羊だんらんの中にいる	紙好きの羊が札にそっぽ向く	おみくじの凶を羊が食べてくれ	翔んでいる羊二十一世紀を見詰め	目立ちたい羊で群の外にいる	角笛に羊はいつか慣らされる	J	羊	ひとすじの光のままにただ歩く	軸	縁の下の力が光おびてくる	天	風光る我が終の日もこのように	地	大根を洗う女の指光る	, A	もう二度と核の光のないように	内面を光らせたくて本を積む	絵の外で五枚こはぜを光らせる	佳	春が来た光を木の芽知っている	青春のときめき黒髪が光る	駅伝の中で光ったごぼう抜き	スカウトは磨けば光る人探し	
美房	与根一	芳子	二南	叮紅	花梢	悟郎	東雲	柳宏子	妻子	鬼遊		香選	みつ子		悟郎		楓楽		岳人		笛生	楓楽	幸		熊生	寿美	小路	東雲	
佳	群羊のひとりで温い和をもらい	のんびりと羊のように生きている	一匹ずつの羊数えて初春の夢	動物園 羊に年賀状が来る	羊みな平和な顔のミレーの絵	暖く包んでくれる羊の毛	気がつけば羊に貰っていたぬくみ	ひつじ年ですかやさしいお嫁さん	すぐ迷う羊へ地図を持たせよう	羊にも鈴をつけたいうれしい日	身ぐるみをはがされ羊甦る	分校の羊 子供の歌が好き	仔羊がまた増えました牧舎の灯	純ウールちょっぴり誇り持つ羊	仔羊のポンポコリンと母に従く	芽ぶくものあり小走りになる羊	人間の欲にあきれている羊	いつもやさしいものを見ている羊の日	羊より臆病者で生きてます	優しさが亡母につながる羊の瞳	山羊ひげが一番先に秋を知る	臍曲りも一匹はいる羊群れ	草原の起伏へ羊小さく群れ	おとなしい父です羊の生れです	結婚はもう決まってる羊年	食べて寝るだけの羊が家に居る	ラブレター食べた羊がクシャミする	太陽の温み羊の背に溜まる	

小羊の涙がひかる草の叢 子羊の寝顔に明日がある安堵 やさしさを羊にもらう毛糸編む 刈り取られ羊案外やせている 漉きたての和紙の質状も羊歳 正直な羊で群の中にいる 淋しいか羊はいつも群れたがる (清記 —美房) 千万子 華 小 美 生 7 路 房

多賀子

白渓子

# おててつなげば

小英 子

正過云児

栞

太茂津

美平紅

幸

シマ子

遠

Ш

可

住

三男

故小西無鬼先生のお供をしてデカンショを故小西無鬼先生のお供をしてデカンショを発りてバイバイの手を振るまで、みんなのに対するることなく続いていた。投句の方を降りてバイバイの手を振るまで、みんなのには対しいからである。果せるかな帰りの電車を降りてバイバイの手を振るまで、みんなのには対しいからである。果せるかな帰りの電車を降りてバイバイの手を振るまで、みんなのが情しいからである。果せるかな帰りの電車を降りてバイバイの手を振るまで、みんなのには対しているが、今には対しているが、今には対しているが、今には対しているが、今には対しているが、今には対しているが、今には対している。

雀踊子

登志実

寿恵子

ったかもしれない。年は珍しく一句抜けたことも、そのせいであ

来を実感するのである。 料を実感するのである。 無力に拍手が続き、岳人さんの企画にジャン がな線り返すまじめな顔、顔。私はそこに がなの「輪」をみつめ、温かいふれあいの はそこに がなり、一般である。 いのである。 にジャン

近畿各地をはじめ遠く山陰・山陽からはる近畿各地をはじめ遠く山陰・山陽からはるが立れた各地柳社の方々も、きっとこがる参加された各地柳社の方々も、きっとこがる参加された各地柳社の方々も、さて中東の湾岸危機の時間切れの今日、世界の平中への祈念が改めて頭によみがえる。

### ありがとう

### /.

子

今年は新同人の歓迎も兼ねるとのことで、今年は新同人の歓迎も兼ねるとのことで、大分遅れて夕刻、大阪のホテルに着いたり、大分遅れて夕刻、大阪のホテルに着いたところ、思いもかけず紫香・鬼遊・しげお・ところ、思いもかけず紫香・鬼遊・しげお・ところ、思いもかけず紫香・鬼遊・しげお・とうに嬉しく有難かった。翌朝は大阪市内を集智子の皆様のお出迎え、地獄で仏に会った美智子の皆様のお出迎え、地獄で仏に会った。

再会の握手をしてお別れした。 再会の握手をしてお別れした。

# みなさんからのおたより

新春おめでとう会に参加できなかった方に ■中原観人氏(鳥取県) 皆様からの温かい ■中原観人氏(鳥取県) 皆様からの温かい おたよりを頂きまして人工呼吸器につながれ おたよりを頂きまして人工呼吸器につながれ がれまりを頂きまして人工呼吸器につながれ おたよりを直きまして人工呼吸器につながれ おたよりを直きまして人工呼吸器につながれ おたよりを直きまして人工呼吸器につながれ おたよりをいただきました。

■大矢十郎氏(新宮市) 栞先生はじめ柳友当方もファミリー総勢29人、大変にぎやかな当方もファミリー総勢29人、大変にぎやかな

■桜井千秀さん(和歌山市) 寄書きお一人 ■上田黎光氏(奈良市) 寄書きなつかしく 拝見しました。1月8日、再び県立医大付属 拝見しました。1月8日、再び県立医大付属 拝見しました。1月8日、再び県立医大付属 病院に入院、胃の切除手術を受けることにな りました。孫の様なナース男の目でみつめ りました。私は左足を捻挫(全治2 新りがとうございました。まだまだ元気出さ ないと駄目ですね。

●ますのでよろしく。寄せ書きのお礼まで。知』誌友の能津幸子さん(神戸市)が誌友に知』誌友の能津幸子さん(神戸市)が誌友に

# 川柳塔社常任理事会(2月1日)

▽川柳塔社同人ならびに誌友を増やすことを ▽第16回全日本川柳大会(平成4年)の和歌 山開催に協力することを決定。 山開催に協力することを決定。 山開催に協力することを決定。

方策について審議

### ■各地句会だより

# 弓削川柳社の歩み

浜 野 奇 童

である。

「関山県の小さな町に川柳が芽生えて四十三円の山県の小さな町に川柳が芽生えて四十三円の山県の小さな町に川柳が芽生えて四十三円の山県の小さな町に川柳が芽生えて四十三円の場がある。

柳社結成の精神を表出しているのである。 MONDOである。川柳を定義づけ、 類という大きな意味を持つエスペラント語の ざまの象徴縄紋土器であり、 けて普及活動に踏み出した。 弓削川柳社を結成、 やるなら日本一の川柳町を」との夢を抱いて たことに始まる。翌二十四年一月には「同じ 支部の句会に足を運び、川柳グループを創 山弓削平、直原七面山らが、 町づくりをと、庶民の詩川柳に目をつけた丸 つの意味を持つ。 昭和二十三年、農村に文化の灯を、 一つは、 機関誌も『紋土』と名付 素朴な人間の生き 川柳雑詩社岡山 一つは、 『紋土』は、一 明るい 弓削川 世界人

一十五年九月、

時の指導者麻生路郎師の句

竹川柳大

碑が、 二代目会長福島鉄児の力に負うところが大き 進出に力を入れ、町の補助金まで約束させた。 育成等々、 員の増加を図るとともに、交通安全、 通り日本一の名を自負することになったのは き交う人々に優しく話しかけてくれている。 の句会九グループの句会があるが、 弓削川柳社がマスコミの寵児となり、文字 弓削では、毎月一回の例会と、遠隔地会員 彼は、 今に川柳町運動の支えとなり、 会員の奉仕によって駅前広場に建てら その人柄から多くの人を誘って会 町政へ積極的に協力、川柳の社会 その他に 朝夕行 青少年

めの「若 の会、中 の会、中 の会、中 の会、中 の会、中 の会、中 の会、中

> させる。弓削を訪れる人たちは、 された看板が立てられ、 店街を「河童通り」と呼ぶが、ここには、 缶ビールと握り飯の味はまた格別である。 が弛んでくる。 ら登山する来園者の姿に接すると、自ずと頼 五十三基の句を丹念にメモし、口ずさみなが 五十二年に始まった川柳の小径公園に建つ百 るべとなることも多い」と言っておられたが、 ちが何かの機会に句碑に触れ、 を記念するだけでなく、 特徴であろう。 これと並行して行われる社会活動が、 粉千翁氏のご好意による紋土の表紙絵が模写 柳に触れざるを得ないのである 川柳 への登龍門として喜ばれている。 毎月の草刈に汗を流した後の 路郎師は「句碑は、 石像河童が足を止め 川柳を知らない人た 川柳への道し どうでも川 弓削

民間川柳社創立の年に始まった西日本川柳 大会も、今年は第四十三回を迎える。全国の 名だたる指導者を選者として招聘、創立と路 郎師句碑の建立は、それぞれ五年目ごとに記 郎師句碑の建立は、それぞれ五年目ごとに記 郎は、それなりの素質と素養が必要である。 には、それなりの素質と素養が必要である。 には、それなりの素質と素養が必要である。 ることに喜びを感じ、鑑賞を楽しむ人たち、 ることに喜びを感じ、鑑賞を楽しむ人たち、 そんな人を大切にしたいものである。 新人対象

### ■句集紹介

### 両川洋々句集

# 枕木の詩

### 小 林 由多香

ます。
一両川洋々さんの川柳句集『枕木の詩』が発

彼には綿密な筋書きができていたのではあろうが、昨年十二月に実施された鳥取市議会西日本を惜しげもなく六月末で退職、選挙態勝に入った。完全な立ち遅れを覚悟してのことであった。

そんな最中の八月三日、「句集を出そうと そんな最中の八月三日、「句集を出そうと 協力頼む」との相談を受けた。格好のチャン 

成が頼む」との相談を受けた。格好のチャン 

本月前の九月二十日にやっと一件書類を速達 

作月前の九月二十日にやっと一件書類を速達 

を用前の九月二十日にやっと一件書類を速達 

を別一マン両川洋々。と称し、「その序文を発刊一マン両川洋々。と称し、「その序文を発刊一マン両川洋々。と称し、「その序文を発刊ーマン両川洋々。と称表の表のである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのである。流石スーパーマンらしい間というのであるが、一般に対している。

髪を入れざる妙技ではないか」と記されている。正にスーパーマン両川洋々の句集序文にふさわしい栞主幹のお言葉である。 高校生の時(十七歳)から始めた彼の川柳 高校生の時(十七歳)から始めた彼の川柳 も丁度三十年になり、その作品も五万三千句 に及んでいる。句集『枕木の詩』にはその中 に及んでいる。句集『枕木の詩』にはその中 から粒よりの一千句が、"鉄路の抄』"世相の から粒よりの一千句が、"鉄路の抄』で付て飾 から粒よりの一千句が、"紫庭の抄』で分けて飾 かられている。

うな作品を生んでいる。 での作風を栞主幹は「社会党の句」と、われれ川柳仲間は「洋々流川柳」と呼んでいる。柳歴三十年、個性と信念を貫き通した鋭い発想・表現でズバリ、ズバリきめつけたよい発想・表現でズバリ

\*鉄路の抄』には国鉄、JR時代の佳吟が

時事川柳を並べた "世相の抄"にはた時事川柳を並べた "世相の抄"にはた時事川柳を並べた "世相の抄"にはた時事川柳を並べた "世相の抄"にはたいます。

新米の値は汗かかぬ奴が決めが鋭い句が多い。

リクルートへ奏の紋を借りて来い 天皇バンザイいくさの罪はどうなさる 軍拡が僕の血税まで狙う 出雲弁で総理本音を吐きなはれ 校門に死刑執行官が待つ 紀子さんの新居にローン無いらしい 洋々さんを知る人は知る酒と女の句は "酒 代は安いものさと病んで知る たに油そそぐ酒とは知らず酌ぐ 良心の呵責ワンカップで消そか したたかな女で七変化を云むし 火消し壺へおんなの性を封じ込め 剝げかかるメッキへ女なにを塗る 絵の中の愛に女がひとり酔う

市議会へ風穴あける意気にもえ 立候補の俺のわがまま許されよ 直け犬の靴を黙って妻みがく 負け犬の靴を黙って妻みがく 子のために上げる白旗恥でない 洋々さんの持論、中八、中六などの句は欠 がある。そのことばどおり、この句集 には見当らぬ。終りに鳥取市議会議員選挙で には見当らぬ。終りに鳥取市議会議員選挙で

### 高須賀金太句集

## 夫婦傘

### 中 原 比呂志

川柳大阪五十周年に、高須賀金太さんが句集『夫婦傘』を発刊し、記念大会に花を添えてくれることになりました。 
「実の表紙を開くと、まず金太さんの似顔 
「事の表紙を開くと、まず金太さんの似顔 
「中華の表紙を開くと、まず金太さんが句 
「本本のです。」 
「本本ののです。」 
「本本のです。」 
「本本のです。」 
「本本のです。」 
「本本のです。」 
「本本のです。」 
「本本のでする」 
「本本のでする」

家族への愛情こもる句もあります。むつまじく聳える雌雄の阿寒岳道ばたに鹿や狐のお出迎え道ばたに鹿や狐のお出迎え

特徴は、後ろ向きの句がなく、

明るくて楽し

職場・自然・社会を詠んだ六百余句を貫く

すんまへん大きな声は地声だす

いことだと思います。

五十四歳。ますます油の乗り切った作句を

期待してやみません。

句読点きみのなげきを知っている 好いことがありそう鉛筆よくすべる 班場ではボーリングの名手であり、高校時 代はラグビー部と演劇部に籍を置いたことが あって、披講の折の透き通る大きな声は、皆 さんよくご存知のとおりです。大声での呼名 さんよくご存知のとおりです。大声での呼名 さんよくご存知のとおりです。大声での呼名 なんよくご存知のとおりです。

# NHK川柳九州大会

会

2000円(大会誌・記念品・句集呈

## と き 4月1日 (日)

宿 題(事前投句・各題2句)

◇投句先 NHK学園川柳九州大会事務局
◇投句締切 **3月2日** ◇投句料1600円
◇投句終切 **3月2日** ◇投句料1600円
「久しい」 堀口 北斗選 堀口 北斗選

# 記念川柳大会

き **3月3日**(日)開場午前11時

۲

(地下鉄谷町線・京阪「天満橋」西400m)

を持っているからです。

「信号」 中林酔虎選兼題と選者(各題2句・投句拝辞)

「のびる」 橘高 薫 風 選「テレビ」 河内 天 笑 選「清 員」 前川 千津子 選

#### 本 社 月 句 会

柳宏子・雅文・章久・典子・満津子・いわる

メンズファッションセンター 一月七日(木)午後五時半

がピンチヒッターに立ち、旧冬、 さしぶりで本社句会に出席した射月芳氏が代 しの天笑氏が病気欠席のため、選者の岳人氏 いういつもとは変った顔ぶれ。加えておはな 受付は男性二人、司会は奏月さん(女性)と 会場の都合で定刻より少しおくれて開会 退院してひ

が贈られて一同拍手、おはなしは週刊誌に掲 と稲本凡子さん(同)の二人、月間賞は田中 載された時実新子さん執筆の『艷話』が紹介 人部から栞主幹、紫香副主幹にチョコレート はじめにバレンタインデーを先どりして婦 司会—奏月) (羽曳野市) 初出席は森下千鶴子さん(大阪市) が獲得した。 (受付—美房·凡九郎 (清記―みつ子

年代·杜的·芳子·三男·吐来·二南·悟郎 出席者―笛生・勝美・金太・喜風・武庫坊

> 月子・諷云児・美房・〆女・凡子・比呂志・ 規不風・文・眉水・敏・重人・萬的・太茂津 はつ絵・みつ子・ただし・温子・友熙・房子 射月芳・半蔵門・しげお 奏月・凡九郎・洋敏・透太・冬葉・頂留子・ トメ子・昭子・美代子・白洋・愛論・おさむ 東雲・智子・弥生・蕗児・柳影・恭昌・寿美 勝晴・吸江・狸村・白渓子・たず子・シマ子 栞・小林英子・福本英子・紫香・利武・保州 憲太郎・正坊・千鶴子・柳伸・幸・度・鬼遊 文秋・岳人・章・白兎・一二三・寿子・庸佑

### はつ絵 選

おとなしい夫を立てて火の女 残り火がくすぶりだした恋六十路 灯の原点それは螢やも知れぬ 燃え尽きるまで遊び心を追い続け 嬉々として火の粉を浴びるどんど焼き 信心をすれば火渡り熱くない 火あぶりにされても不倫できますか 灰になる日まで気付かぬ火の驕り 恋人に逢う火の輪なら喜んで 火のような女が寒い部屋に居る 能面があやしく光る薪能 火の海を渡ることにはなれている 火は水を水は火を恋い春ぬるか 火花散らす夫婦喧嘩で若返る 一筋の道信じ切り火のおんな 射月芳 シマ子 柳 眉 保雅 勝 わる 景多 男 美州文房 男

> 両の手に火種をためている女 囲炉裏火をもやし続けて母は待つ 帳尻が合わぬ煙草の火もつかぬ 粥煮えて男わびしく火を止める 漁火がちちろ貧しい漁に生き マッチの火精いっぱいに生きようよ マッチの火愛しいものを見るように 火の酒を呷る夜もあるゴルバチョフ 三面鏡の一面にある火の眼 ひょっとこの面をかぶって火を抱く 火と燃えた誇りを胸に今日を生き 火と水の間でおんな涙涸れ 火祭の火に酔っている里帰 太茂津 武庫坊 太 シマ子 笛

火傷することを覚悟で逢いにゆく 捨て台詞火がついたので戻れない 燃える火に春の息づく二月堂 煩悩を集め大護摩燃えさかる 古手紙遠い恋の火かき立てる あと少し残り時間を火になろう 上り窯の火の色陶工の目が光る 残り火を炎やす合鍵貰ろてから 残り火を古い演歌で繋ぎあう 火を噴くと良妻賢母もただの女 火と燃えるおんなで隠す京なまり (小)英 凡 しげお 太茂津 たず子

老いて良心まだ青い火をもやす 意地ひとつ火種は明日の風を読 寿 子

はつ絵

ちびり飲めるお人が羨まし

選

明日という日を晩酌が連れて来る 人生はその日その日の酒の味 ぼつぼつと本音吐く頃酒を注ぐ ベンチの鳩と呑んでいる 射月芳 いわる 仙吐昭

ワンカップ

もう本音でそうな気配酒を注ぐ

晩酌が明日の夢に彩を塗る エリートと同じ銘柄飲んでいる 酒飲んでみたいと思う夜の河 **愛さ晴らすだけと限らぬコップ酒** 酒癖の悪い男の先に酔う 福英

酒吞まぬ男が馬鹿に見えてくる ゆっくりと酒が流してくれた鬱 たこの足こがらしを聴く屋台酒

失敗の酒を死ぬまで繰り返す 殺し文句を抑えにきたか酌ぎこぼす 奥さんが 飲めて 長居をする お酒 純のれん人の心のわかる酒 こだわりを持ってる盃伏せてある 雀踊子 太茂津

ワンカップ買い足して乗るひとり旅 酌ぎこぼす酒にも税金かかってる

夜の酒菊の香りにむせながら

上昇気流に乗って楽しい酒になる 喜びの酒なら大きな盃で 友だちは多いほどよし春の酒

栄転も左遷も同じ酒の色 少し世間がわかってからの酒の味

白渓子

バッカスがしきりに誘う春の宵 立飲みの酒は真直ぐ胃に落ちる 末席で銚子振ってる奴がいる 墓へ酒供えて不孝詫びている

みつ子

栄転へ昨日も今日も明日も酒

どぶろくはコタンの笛をききながら 春の夜の酒は悪女になりたがる 休肝日決めたら国旗あげてやる 医者の顔酒止められぬと見抜いてる コップ酒余程の事があったのか 柳宏子

樽からの酒は日本の音で出る 酒タバコやらず女にももてず

柳宏子

美代子

丁目の鬼と酒盛りしたくなる

雀踊子

武庫坊

葉

影武者も毒味もいらぬ酒が飲め

射月芳 選

ドラマから妻にかえって葱きざむ 言葉には出さぬが妻よありがとう 助手席の妻が口出しばかりする 奥さんが来たと受付から電話 妻はもう信用しない明細書 妻の出す料理にはないトリカプト 優勝の力士の妻を追うテレビ れ落ち葉妻に掃き出されぬように 福英 子 紫香 柳宏子 いわる 白渓子 どんたく

影坊 もう一度妻よ笑ってくれないか 妻病んで漬物の味変りだす 悪妻と言われ夫を太らせぬ しあわせの四文字に妻の夢がある ている妻の勘

柳 IE

躓けばそっと手を出す妻がいる 戦友で恋人であり母である オイコラと直通妻のよい返事 妻母女みんな落第しています 十年も亡妻の電話を待っている フルムーンの旅では妻がよく喋る

共稼ぎ妻には妻の預金帳 狂わない妻の時計を疑わず 妻に逢うために生まれてきたのです

Ż.

奥さんと呼んでも返事してくれぬ 本心は妻を美人と思うてる 相槌を打てば打ったで妻は拗ね 妻にするまでは知ってた誕生日 ナア妻よ我慢はお前だけやない 順番を妻よ間違えないように

度

ご自由にどうぞと妻の目が笑う おいしいと言うて病む妻食べ残し 連れ添った妻でも妻の鍵がある 杜的

し保寿げ 州子

愛称で呼べば昔の妻の顔 見合いした妻だと誰も信じない

潔く何でも捨ててしまう妻

公にしないが妻であるらしい

一杯のお神酒に妻が酔っている 新正 子 文美萬狸 子房的村 月文半蔵門子子門 憲太郎

目の届くところに老妻がいる安堵 (新) 正 凡九郎 たず子 昭子

彼の目が優しすぎます不安です 目こぼしをする母さんも同じ傷 ながい目で見てくれている友がいる 目の位置を合わすと相手見えてくる 極楽も修羅も見てきた埴輪の目 目には目を心に石をためている 目をそらす程の負いめはもっていず 目裏の戦火は消えることがない 目を伏せて一縷の希み訴える 振り向いて猫はゆっくり目を閉じる 心眼で見れば優しい仁王の目 目を伏せる男企む吹き溜り 長い目で見れば辻褄合う人生 それ以上言えない妻の目が叱る 熱い目で男の嘘をみな赦す 賽の目がお前に運は無いと言う 恩人の一人にわたしの妻がある 妻よりも先に死ねると信じてる 五十年添い女房がわからない 義務として妻が相槌打ってい ほどの器用になれぬ涼しい目 ほどにものを言うてる目が燃える の中に入れると痛い罪ひとつ 一つめねばあなたが消えてしまいそう が妻に二心はないと決めている 野村 太茂津 新正 シマ子 蕗 児 吐昭 射月芳 雀踊子 たず子 柳 保 規不風 昭紫 信 文 美 吸 信 度 度 南 影 子 房 江 コースのように水掛不動通り抜け 純白の雪解けてゆく水たまり 目を盗む卑劣あくまで赦せない 目には目を愛には愛の風を待つ 目配せが通じて語尾を濁らせる 偽りのない目でお辞儀してくれる 失った目にも季節の花が咲き 目がものを言うので返事迷いだす あなたの目わたしばかりを見てほしい つきおとす嘘へ鬼の目仏の目 叱られる予感ペットも目をそらす 泥棒と刑事と同じ目付きする なるほどと言う口許と目が違い 定年になっても光る私服の目 目をつむる訳にはゆかぬ橋渡る 目配せが優しいサイン出してい 人形の目から蒼い火がこぼれ 妻の目が秘密握っているらしい 医者の目は危機を越えたと言っている 言も言わずに彼の目が喋る 裏を合わせたらしい目の動き い目を知らず真ん中歩いてる 兼題 黒 JII 紫 香選 冬葉 太茂津 鬼 いわゑ 柳宏子 美代子 みつ子 おさむ 笛 寿 正吐 芳 螢 南 游 子: 子 郎 もう水も飲めない父の髭を剃る 喫茶店三度目の水に追い出され 井戸水をよく知っているのど仏 水の味知ってる私の逃亡記 腕白な顔に戻した水枕 断食も五日水にも味が出る 左遷地の水汲みに馴れ人に馴れ ふる里の水も帰れと唄ってる 先生と一緒に跨ぐ水溜り 仏壇の水替えに立つ独り言 酔いざめの水定年がもうちか コーヒー党水にこだわり続けてる 小鳥の水替えて近づく春を知る 水滴が走る一日の終止符 赤飯を炊く水加減母に聞く 蛇口ひねればあふれる水を疑わず いい知恵がありそう水をくださいな スーパーでおいしい水を買うてくる 赴任地の水に馴染んで根を下ろし 若いもんは近頃水を買うている 愛憎の水をのんでる午前一 水一杯飲む習慣で恙なし 勝ちいくさゴクリゴクリと水の味 水すこしきれいになって住む魚 若き日の挫折を思う水たまり なまぬるい水で本音は飲みこめぬ 蛇口全開水に晒して仲なおり 郷に家なし井戸の水涸れる い覚めの水に小言をつけ加え

背水の陣で女は化粧する 井戸水のぬくさ里には姉ひとり 水たまり月を宿して澄んでいる 塔見えるとこで名代のうまい餅 幽玄の塔見極めた薪能 塔の町匂い袋をふたつ買う 塔低く見える男の上り坂 視野に塔平和な古都の四季ごよみ 釘一本打つ隙がない古寺の塔 風止むと筧の水も冬の音 嫁姑コップの水が揺れてます 派手に水使い調理場綺麗好き 水たまり雲の動きが速くなる 大河に出た水ゆとり取り戻す カビ臭い水で生きてる大都会 山焼きに何時も影絵で映る塔 塔を指す方向オンチの道標 塔のある景色は春の恋模様 遠景に塔が聳える京の宿 管制塔のレーダーに特攻機 塔そびえモーツアルトの忌はめぐる 輪廻連声女人高野に黙す塔 西 尾 たず子 柳宏子 い寿い柳 わま美ゑ伸 たず子 白渓子 太茂津 諷云児 ただし 男 生体移植白い巨塔が揺れ動 塔の影斜めに踏んで初大師 逢いに行く女も私も塔の下 夕べの塔有情無情の風に佇つ 夕陽浴び五重の塔が浮きあがる 塔のある街でお手玉童歌 群集をちりぢりにする塔の冬 柿すだれ塔は大和の顔でたつ 逆風を耐え抜いてきた父の塔 ピサの斜塔約束はまだ果たされず 塔の影延びてあしたにつなぐ夢 見あぐれば塔天平を語り出す 五重の塔隠す京都のビル騒ぎ 相輪は悲し無常の風に鳴る 天王寺の塔を離れぬ鳩一家 シルクロード平山郁夫が描く塔 塔のてっぺんで叫んでみたい事がある 安らぎを一つ求めて塔に立つ 星はすばる塔は孤独な丘に立つ 羊雲五重の塔へ屯する 春夏秋冬塔には塔の佇まい 雷がとっても好きな古都の塔 塔仰ぐとき一匹の蟻になる 塔二月花の便りを待ちわびる 心に小石を積んで塔とする

# 古寺巡礼露伴の塔も冬景色

武庫坊 郎

透 太

栞

鳩居堂出て八坂の塔のおぼろかな 川 柳 あしなみ

福英

はつ絵

四百号記念川柳大会

シマ子

٢ ŧ 3月10日(日 午後1時締切 正午開場

ところ (各題2句 NTT姫路しらさぎ会館

頂留子

笛 はつ絵

中尾 草風選 飛鳥選 秋月選 一高選

\*読込み・熟語可 (席題なし) 百

西川

二青選

シマ子 諷云児

投 会

679 -41 3月5日必着で投句料500円 1000円 定額小為替)を添え、左記 竜野市揖保町西構225-1 (宴会費 2000円)

おさむ

川柳あしなみ会

高野さとる

房

子

萬

的

— 89



毎月25日締切厳守 原稿は川柳塔社事務所へお送りください 編集部

### 槻川柳サークル卯の花 辻白渓子報

間違いを素直に受けぬ反抗期 お隣が同県人でうまが合う 見送った駅から歩幅小さくなる 今日のこと明日にのばさず寒椿 陳列の仏像ぬく味のない微笑 退院へベビーベッドも用意する 誤字当字それでも温い母の文 年賀状に初孫出来たと書き添える 今度こそ誘ってみよう花時計 缶ジュース半分ずつで足る夫婦 母の愛いっぱい届くふるさと便 ウインドの値札に遠い暮し向き 退院をのばす理由があるナース 胎動に頼るダンナはもう来な 悔いの日のことさら赤き唇よ レモンスカッシュ軽い訣れが出来そうだ 河芳 子 退院をしてから癖が一つ消え 大きめのバッグを持って里帰り 松芳 よ志子 諷云児 花代子 白渓子 武庫坊 栄 礫 風 子

> たわむれのチークダンスに目が回る 間違いの轍は踏まないかたつむり 好きな絵の暦残して暮れになる 間違いでよかった人と半生記 間違いの元をたどれば痩我慢 退院が決まりナースにある名残り 悔いている証拠に顔を強張らせ 陳列の太古の知恵に目を見張り 通院が日課となって年も暮れ 返し針娘に悔いがないように

植村客遊子報

咲き切ったコスモスゆれる音に似て エリートも心を開く赤提灯 裏切の恨みをためた腹の底 もやもやがあるらし女のひとり酒 今日も無事一日長生きした証 汽車通る度に途切れるテレビ見る 来年もお世話になろう夏衣 期待した花が蕾のまま枯れる 夢ばかり積んでくずしてまだ嫁かず 真剣に生きて来た道悔いは無し 人生行路だんだん歩幅せまくする ふる里が素朴を消して他人めく

それらしい器に見えて来る不思議

とおる 体力がめっきり落ちて又ごろ寝 舞初めの晴着ヘビール飲まされる つれづれに知らぬ人に利巧ぶり

客遊子

おさむ 永

百合子

すみれ

暢

迎えたい春の息吹を知る平和 思い出の出湯に金婚迎えられ 温かく迎えてくれた亡母を恋う 残り火を懸命に焚く古希迎え 完走のどん尻拍手で迎えられ 校門にうれしい母の迎え傘 出迎えに紀子さま笑顔忘れずに この一年 十大事件の指を折り 大の字の鼾へ一家ぶらさがり 大声で嘘泣きまんまと祖母だます 見かけより大きい中味に包まれる 少年の夢は大きくとぶ宇宙 孫達にそっぽむかれる庭の 久世川柳クラブ

わが影を踏んまえてたつ仁王像 ぎこぎこと影を引きずる三輪車 ようおこし鹿の愛想にせんべ買う 小羊の群れは平和を迫い求め 転勤に語りかけたい渡り鳥 去年来た燕も待たず妻は逝く 京の水早や冷たかろゆりかもめ 柳クラブわたの花

> しげる シマ子

枝 雄 子

退院を追いかけてくる見舞客

古時計狂いながらも時刻む それぞれの趣ありて絵画展

はる子

影うつして身をひそめてるかくれ

笑いじわ一つ増やして誕生日 上げ膳へ憂いを忘れた旅の宿

この段差早や躓いて先案じ

好

ふさえ

顔見世の庵の看板藤娘 横文字の看板 御はきもの看板のまま靴ならべ 黒門の看板信じ河豚の味 キツネ目の男の影もある師走 目印の看板探す勘のずれ 看板を道しるべにして知らぬ十 たばこやの看板娘老いました 看板にカタカナ増えて国際化 看板を目当にたどる転居先 師年をとってか背 の味は落せぬ婿養子 の地酒にほれて店に寄る 勘亭流で師走知り 政治は怖いことをする 街が若返り 日が曲 抽

ますみ

みき子

トシエ

君

森下 愛論報

> 大和路に木枯し吹いて柿ゆれる 他人の振り見て我が振り直せな

伽名子

チカエ

明迷

佳

句

地

柳に風 やんわりと女が投げる変化球 傷つかぬようにやんわり断られ やんわりの誘いに魂胆見えて 黒子感じぬ人形に血が通う 傘さして居るから芝居雨ら 悪役の背を流してる楽屋風呂 花道を雪に二人は死の覚悟 芝居上手で仲がよい 人事課長のうけ答え 43 V 7

猪太郎

愛加

江の 辿る道山坂あって七曲がり はずみとは怖し顔を三針縫 財布ごと預け気楽な旅をする 腹巻に財布確かな父の旅 たどり来て見ればいずこも同じ風 白い風が財布の紐を解き Vi

初春英

もついらぬ夢だが見たさ捨て切れず 気の弱い私がかけるサングラス 臥す母の看護疲れの妻案じ 手の中の倖せこのまま逃げない 行く旅にこれが最後と思う旅 つきは悪いが丸いお人がら 白柳子

美津留

章

友

長生きをすればお国の荷が重 髪染めて心安らぐ紅葉狩り 特賞に輝く菊も手入れから ロックのはしか熱にも耐えている あの人もこの人にもと締めきれず 村おこし若妻達の心意気 成田からお国訛りを引込める

> いさむ笑 スミエ

迷観子 かおり

幸川柳教室 桜井 千秀報

不手際を叩かれながら役に解け 背のリュック歩くリズムで叩い 叩くほど意見も持たず黙視する らず口叩いて妻の粘り腰 てる 博

> 煩 行

悩

L

つも

吃水線を越

す Ľ

英

動のひとつ病床とて負け

やんわりと毒舌よりも効く皮肉

わりと核心衝いて妻の勘

雀踊子

に呼びやんわり言ってくれる姑

頂留子 文秋

> 覚然坊 度

喜

た愛は激しく燃えてくる

玉孝精

枝子子

松村迷観子報 よしみ しんじ ひかり マサエ 叩かれて身をひきしめる桶の箍叩かれた愛は激しく燃えてくる おおかたは義理で叩いている拍手 論を吐き叩かれたことがある

叩くより時には涙見せてみる 父と子の隙間やわらぐ冬の鍋 帯きりり付け 隙間からときどき邪心顔を出す 掃除機で隙間の愚痴も吸うてやる 叩かれて尚しがみつく母の膝 小さいミス叩いて器せまくする 入る隙間ない 女

隙間だらけの母で要所はしめてくる

芙美子 ダン吉 三千子 敬和 子. 子子

鉄

かなめ

#### 十選 前月号から 葉

や 柊 計 座 ピチピチの嫁が流れを変えてくれ しとやかになって婦警が茶に座る を吸った布団で不足ない寝息 さしさの深みで理屈丸くなる 0 時 報 2 ŧ T 香 さえ腹におさめて芸の鬼 る りに 忘れたこと だ 17 冬がわ で 家 す 0 ない の知 かず 立場 恵 白渓子 右 森 春 子 近 子 子 信 步 子

柿の実が熟れて在所の道しるべ 向き合って夫婦ゆとりの柿を剝く 紺碧の空へなじまぬ木守柿 柿好きな夫を偲ぶひとり部屋 熟れた柿カラスが先に味見する おさげ髪 おすましの少女と出会う花売場 新しい物見る少女目が光る 少女A今は一児の母になり 松茸を焼くので窓をちょっと開け 天と地の隙間へ翔んだだけのこと お祈りの指の隙間に欲がもれ 、ルスメーター踏み付けている少女 恋を恋とも気がつかず (中)幸 美 + 町 桂 夏 秀 子雄

### 柳塔鹿野みか月句会 土橋

玉乗りをしているうちに日が暮れる 朝早く雪かきをするおにいちゃん 今朝とれたばかりの海老がはねている 祝電は以下同文の仲間入り 野心持ち海の向うへ行ったきり 北風に向う眼の玉生きている 糸柳ゆらゆら春の風を恋う 朝の陽を条件なしに迎え入れ 野良仕事やれやれ今日は何処にゆ 元旦のあしたに誓う夫婦仲 宴たけて隣の箸が攻めてくる 一人居て苗三千と意気が合い 市の花だけを買う自家用車 あき子 石花菜 八重子 たけの IE

恵 江

朝帰りしたくてやったわけじゃない 母さんが朝を生んでる夜半から しあわせの波長が宿から呼んでいる ふぞろいの玉を磨いている私 旅行には割箸も入れ薬入れ 嘘つきのまんまで朝が来てしまい 朝霧の中で百度の石を踏む それぞれのリズムで朝の靴が出る 凍てついた愚痴が胸から離れない 落ち着いて受験の朝を迎えます 目の玉を引き抜くような法螺を吹 玉乗りの玉に操られて暮らす 仕方ない妥協で割箸が折れる 点滴として水玉が生命なり シャボン玉南の方へとんだきり 据膳の箸が一本見つからぬ あのひとと使うつもりの箸も消え 好物へ箸もふれ合うハネムーン 割箸を割るのが娘の娯楽です 箸を洗う今日の感謝の水の音 母さんの膝はいつでも温かい

岩原 喬水報

螢

真実は話せず口を結んどく 少年の火傷日ソに虹結ぶ 五時からの男結びはすぐ解ける 結婚難出雲の神は留守かいな 結ばれて波乱もあって古稀迎え 信号機が結んでくれた恋もある

司江 草 凮

定年へ妻もゆっくり朝を起き

しげる みさ子 喜与志 くに子 かつみ 三千代 かつ乃 盛 夕 平成の祈り平和の鐘が鳴る 名刺見て慌て挨拶やり直す 小羊になれば満足する男 まんまるい月が愉快な顔に見え 窓際で愉快な退社ベルを聞く 弔辞では愉快な人にしておこう 鳥取は愉快 男子出生愉快に朝の陽を拝む 岩美川柳会 街中お温泉が出る

善人の首へ濡れ衣結びつけ

多可

呼

旋

風 里涯

俊 山 友 粗 輪 多 人 夫 粒 朗

齢なんか忘れましたと百を生き 負け方も絵になる男だから惚れ 寒い部屋真夏の絵でも飾ろうか 素顔になってもうこの齢は騙さない いい齢で消火器きかぬ恋をする 美人画と妻を比べぬようにする 灯の消える寸前までも祈ってる 途中から妻が手を添え舵をとる 振っていた尻尾が凍り困ったぞ 愉快な話ふさぎの虫が逃げてゆ 食べ盛りマトンおいしく食べてくれ 小羊も輪になり防ぐ知恵を持つ 羽津川公乃報 美代子 由多香

### 柳ささやま社 可住報

頼まれてからの仕草が荒くなる 白い巨塔目ざす野心に家を食べ 着古しへわたしひとりのさようなら つつぬけの付き合いしつつ過疎守る とみ子 美

乳のみ児が食べるんですと秋の嫁 児の描く花はいっぱい陽を食べる いいはなしお針が出来ることも添え 好きで持つ針を哀れと見る他人 奥さんにとくと頼んである安堵 大会の拍手に冷えた掌も混じる 大会の顔ぶれへ作戦練り直す 大会の雰囲気 自分を見失う 水子塚食べたい菓子が積んである 可文テ 百合子 つや子 ヒサ子 美

# 吉岡きみえ報

冬の旅ぬり絵の蝶を追いかける 追い風を受けて絵になる日本丸 追い越して亀が一番不思議がる 追うて追われて未だに答え出て来な 民芸と呼ぶ手すさびに高値つく 藁沓は雪の深さを知っている 民芸の藍の深さを追い続け 竹人形やさしい部屋にしてくれる ほうれん草ぐらぐら茹でる反抗期 欠点にぐらぐらしてる志望校 父だからぐらぐらさせぬ母の杭 ぐらぐらと針千本をのまそうか ぐらぐらと来てもふんばる木の根っ子 大根がぐらぐら冬眠させぬモグラ の時のひと言今も追いかける 芙佐子 寿美子 多賀子 きみえ 知恵子 まこと 重 昭 7 丸良葉

夢を追う椿の花の片想い

七十五日耐えて噂の中に居る

う者がいるからファイト湧いて来る

黙っていて欲しい噂を喋る風 そうと決めもう噂には迷わない 他人の耳悪い噂を聞きたがる 噂には弱い女の過去がある 縁談が揺らぐ根も葉もない噂 噂を信じ話している女 落し蓋しても噂は吹きこぼれ 噂ばかり気にして窓を閉めている 肯定も否定もせずに噂消す 木枯らしの運ぶ噂は暗過ぎる いっそきれいな噂のままでおく情け 噂され一人前の飯を食う

寿文律 美子子

### 京都塔の会

松川

杜的報

子的

代仕男 叮紅

聞くだけの祭り太鼓よ街ぐらし 岸壁で首長くして待つダモイ 納め弘法古着をさがしている老婆 旗の波あれが見納めだったのか 母さんが犯人になりけりがつき 鈴付けた首が時どき家出する けん玉の妙技に首が加勢する 信心のついで集印帖を持ち 盆正月だけは信心深い顔になり Xが日記の後につけてある X線映らぬ恋の古い傷 二級酒でよし年金のクリスマス 左遷地で首の軽さを知らされる 首筋が冷えて保身を考える んびりへ晦日真直ぐやってくる はつ絵 てる 諷云児 武庫坊 白渓子 IF.

> 納まらぬ胸も師走で流さねば 迷信でもよいあの人に逢えるなら 信心で癌を治すと言うてくれ Xの救世主を待ちわびる 余生にも小さな風のあってよし 焼芋が観光客に売り切れる 信頼の目でせんべいを食べる鹿 全快へお札納めた深い空 年を納める三三七拍子

ちかし

童

リチエ

与根一

反対へ首を覚悟でする署名 除夜の鐘むかし昔をしまいこむ

# 政岡日枝子報

さむらいを鼻にかけては嫁きそびれ 敵前逃亡もうさむらいは死にたえた さむらいだくしゃみ鼻水など出さぬ さむらいと自負して淋し妻楊子 ちぎれてもよろいは昔偲ばせる さむらいの性根抜けぬ父の背な さむらいの見栄竹光はよう抜かぬ 武家屋敷といだ刀を闇におく さむらいで指の先まで骨がある お祭りは済んだ鎧も脱がされる さむらいに大奥という壁がある 冷やめしに慣れてしまったおさむらい さむらいの一人がガマの油売る 妻の持つ手綱さむらい斬り難い 本当のさむらいならば味方する 生き残り策にさむらい傘を張り 川柳塔きゃらぼく 千 春 富美子 八重子 恵 夕 8 松 てい子 日枝子 瑞 荒正 之 子 子子

的 坊

> 倫子 ただし 花代子 百合子 しげお 礫 求

残像の花をさむらい掃いている 金庫には若しもの時の用意あり もしもの時当布となる子のために 若し神様を無いがしろにしたら 小春日よ若しもと桜耳すます 遺言はさむらい捨てよ生きのびよ 朗 ふ登 栄 子代

淋しさへ山茶花が散る泣くまいぞ 我が子より嫁の助言が嬉し 初釣りの魚籠に嬉しい錦鯉 自画像に濃き口紅の妻の顔 脳味噌に無理をさすのかすぐ疲れ

正治旭

喜久亭

知らん顔苦手なカラオケ避けて食べ 歩いてるうしろ姿が亡父に似る

ふさ子

紅白に別れて競う喉自慢

友を待ちあぐむ時別の客 億円当らぬ先にどうしよう 痴美の娘となる日ああ哀し

ことわざが動く世紀が交替す

幾星霜静かに回る水車

### 岸和田川柳会 植山 武助報

おしゃべりが好きで明るいおばあちゃん 病室の花溜息も吸っている 溜息が出る程上手い嘘をつく もう固い話は止そうミルクティー 溜息をジョークにかえて生きてい 家族明るさ取戻し 3 子紋

> 吉日にこだわり続けしらけ顔 満足を知って暮しを明るくし 吉日はわが心です足るを知る

ポーズにはポーズでかえす女です 寝不足の顔が集まる朝の駅 信ずればこそ金婚へつづく愛 まとめ方忘れたような日が続き 虚飾とは一歩離れた身だしなみ 通い合う何か影法師が動

筋に生きて何かがもの足らず

急ぐことはないさとぼつぼつ蝸牛 掌の固さに父の過去がある 父ちゃんをぼつぼつ責める酒を酌ぐ 楊貴妃が国を揺がす咳をする 溜息が夫婦で違う面白さ 病んでいる時は明るく見せましょう 美しい咳ハンカチの中でする 溜息が出る程空が澄んでいる 緑消えて溜息をつく地球です わたしにもぼつぼつカボチャの馬車がくる いい夢が消えてしまった咳一つ 固い土もたげて小さい福寿草 頑固さが祖父に似て来た三代目 大阪商人ぼつぼつでんなと貯めている 恋人と歩く通りが明るすぎ 柳宏子 勝 ダン吉 すみえ 甘

晴

街頭で拾う安楽死の賛否

アサ報

吉日を祝う心の裏表 程ほどの足手まといも親子なら 満足なくらしが渕に立っている 大安の成田花嫁見失う 大安の日から子ばなれするつもり 吉日の父は無口になるばかり

神主の祝詞が寒い七五三

口下手と言って根回しするやから もつそろそろ二足草鞋に終止符を

足腰を鍛えて歩く長い旅

麻痺の児の生きる業持つ足の指 暦にはない吉日がつづいてる 地下足袋の素足師走の朝が冷え 吉日に派手に飛び交う熨斗袋 吉日と定めた日でも裏目あり

美枝子

永

年

八柄を夕陽に映ししのぶ影

吐田 与呂志

よそ行きのポーズ確かめる三面鏡 ウインドに写るポーズに背を延ばす はいポーズ八十路坂にも和みの輪 不足ひとつ言わない母がむつかしい 手話の娘の手は口ほどによく喋り 父だけは保守のポーズを崩さない 湯上りへそっと鏡に取るポーズ 何一つ不足ないとは他人の目 法の網くぐって火中の栗拾う 温もりを拾い出直す覚悟する 不足言う子にきびしき母の声 一人居を訪うコオロギと秋更ける テルミ 寿美礼 八重子 きくる do 史 子

よく動く妻に気兼ねをして昼寝 拾って来た仔犬の方が太り出し

JII 吉川

ライターに苛立ちぶつけ人を待つ

右公 近

# 八尾市民川柳会

(中) シー マ 子 枝 美津子 マリ子 п 傷痍恩給安い右手だなと思う 旋盤にお鏡飾る町工場 父からの年賀潮騒かなでてる 雑用が増えて病気をしてられぬ 景観を壊す京都のビルラッシュ 安物のなべがドラマを煮込んでる まっすぐな男に増える刀傷 安物でかためて妻のハイセンス いくさする気か昔羊を追うた民 お年賀も着流しでくる飲み仲間 平和への願いひつじは角を巻き ほろ酔いの機嫌で年賀の世辞をのべ 油断してたらだんだん狭くなる書斎 ストレスを増やして禁酒まだ三日 安い物探して孤老の足達者 バス電車乗り継ぎ安い蟹買いに お年玉もらえるうちは行く年賀 一筆で初春のひつじを描く卒寿

針仕事日課をずらす老眼鏡 歳末へ日課が重くのしかかる

鍋の中煮えてないのは私かも 黒豆がふっくら煮えただけのこと 煮つめると私に何が残るだろ 煮えるまでテレビで宇宙旅行する 黒豆コトコト女の年輪きざむ暮れ 大根が肩を並べて煮えてゆく 日課には空っぽの日も作っとく 母の味今日も日課の台所 朝刊がコトリ日課の一行目

れ合いが負担になった日課表

煮くずれをせぬよう角とる心にも 病院の日課に慣れず不眠症 のちの灯鎮めて神の樹が眠る 寿 美 みつ子 十三子

宮崎シマ子報

餅をつく音に悪意が消されゆく 絵に画いた餅と自答を繰り返す きねでつく餅が近所の子を集め 餅焼いて雪の家族の話する 風花が舞うとお餅が美味しくなる 先祖に叱られそうな鏡餅 作一郎 とみを 隆 伸

(柿)英

北風へ借りる夫の防寒着

友がいて寒い景色をやわらげる 寒風に首を晒して生きのびる

ひたすらに働く虫となる日課

主婦業は日課の鬼に追われづめ

鬼も寒いか時々くしゃみする師走 寒椿一輪 春を創りだし 寒いなど感じさせない腰まわり

ワイから寒さ知らずのエアメール

あさこ

シメ子

若き日の思い出秘める奥穂高 しぐれ雲来るたび一つ重ね着し

寒がりの犬一等席で日向ぼこ

シマ子 美津留 覚然坊 柳宏子 風

ごぶさたを年賀で済ます軽い義理 玄関にひつじが主役という年質 明日への一歩ふみだす初詣で

羊さんなんて鳴くのと子に聞かれ

西宮北口川柳会

運勢が変わるあなたに逢うてから 波乱万丈の運勢でした老母の皺 夢醒めて冷たいモカを飲んでます 夢だから遊びこころも許される 恋人も同んなじ夢を見てほしい 夢でしか逢えない人に距離をおく 叶わない夢を知ってる竹人形 運勢は大金持であったはず 運勢が其処まで来ている羊の子 静かな部屋で遺言書いてます 静かな夜遠く雪崩の音がする ピラカンサ活けて静かにひとり住む 終焉は静かに笑顔残したい 青春の夢は満州に埋めたまま ぼくの夢びっくり箱に入れてある 主役になる夢を一途に葱坊主 人居が好きで山茶花ひそと咲く 富久恵 たず子

集まると噂話が飛火する 集まる日は母の白髪が黒くなる えべっさん集めた賽銭気にかかる とても静かに女の始末考える 団結をすると雑魚にもある勇気 孫嫁の話で終るクラス会 よし津 しげお的 みつ子 武庫坊 はつ絵 きよ子 トミエ 富喜子

はつ絵報 頂留子 重

95

白渓子

いわゑ

母のこと覚えて三十三の厄 静かすぎて睡眠薬で眠れない お正月旗がないのかボクのうち 杵搗きの餅地方紙にくるまれて 遠い人も集まってくる遺産分け 群集の中の一人が背を向ける ひと言の温さ私を離さない 子守して遊ぶ子供の絵と遊ぶ の集まる方へ味方する

美智子

云兒

眉保 7

真っ白いお皿よ創作意欲わく 長い長い一日でした子守唄 念ずれば通じ合う夜の流れ星 わがままを言うなと一歩前を行く 生甲斐を一つ嬉しく今日が暮れ 母さんが好きだったなあ熟柿食 浄土へもただでは行けぬ寺参り 輪の中の鬼よいつまで耐えられる 三叉路に立つ娘へ贈る知恵袋 長女と次女のサンタさんにはまだなれる いつの間に五十路なりけり落葉焚く 除夜の鐘寝てる間に百八つ 一抜け二抜け小振りになったおでん鍋 こたつって冬の間の友だちだ 一日家を開けておく 私の心燃えてくる 中 小五昌 喜久恵 千年枝 静 ヤスエ 勲

船酔いが怖くて凪の日の旅路 夫の看護できる幸せだってある

豆腐屋が濡れ手で返す裸銭 寒に耐え水仙つんと胸を張り

懸命に生きて未来へ架かる橋 未来図が空へ空へと伸びて行く

男と女

未来永劫騙し合う

花の種子蒔いて未来へ夢を盛る

出すあてのない恋文を書くも秋 ひょっとこの素顔は誰も見ていない 神ならぬ身に恍惚のわらべ唄 軍歌ならうたえるマイク持たされる 宇宙から日本は灰の色に見え 平凡に生きたく候さつま汁 有料になって繰ってる電話帳 消えた火の温みを探す一人旅 角ひとつ曲がりそこねて福に会う 夫婦とやペアウオッチ光らせて 空白を少し残して僕の地図 歯ブラシを変えてみる 千代美 こうじ 貞 政幹新静

前田いわ

お報

狐

男厄 病明け生きてる証初詣 大安の縁起眩しい娘の荷 暖冬で毛皮みかけぬ初詣 縁起直しの絵馬を書く

ロケーション来たので騒ぐ過疎の 手足ないダルマに威張られ負けや 目を入れてだるま都で芝居する 朝帰り床のダルマに睨まれる 大学に通い始めて孫化粧 悪心を床の達磨の絵がにらむ 床の間のだるまにいつも励まされ 御利益に縁起をかつぐ初詣 車掌二役駆けまわる せぬ 駅 いわお 保 十四郎 昌向修 夢之助

> ズボンには小銭ばかりの寝正月 求愛の言葉ろれつが回らない ずばり地球は青かった宇宙船 父ちゃんは何時も重たい靴を履く 夜遊びの癖が猫にも夫にも 山を越えて疲れた靴を脱

柳塔わかやま吟社 緑良報

去り際も見事に演技して女

捨て石になって未来を信じ切る 保育器の中と約束する未来 眼帯を外せば明日が見えてくる 出土した古代の文化陽の目見る 秘書の見る地獄極楽紙一重 倖せへ他人の見る目が怖くなる 逆転を見た感激が止まらない 職退いて世間も妻も見えてきた ときめきの胸をしずめる茶一服 冬木立春のときめき抱いている ときめきを抱いて今年の彩を選る 姫鏡逢えぬときめきひた隠す ときめきの音で一輪梅が咲く ときめきの火を抱いて出る向 春を待つ花のときめき大切に 点を見つめ祝辞を受けている い風

柳宏子

杜芳石定 南的子舟人

由紀子

カズノコもクワイも未来請負わぬ お点前が見事で足が崩せない お見事な弁解背筋寒くなる ユーモアを交え見事に呆けておく 泣くという女見事な護身術 荒海の向こうにきっとある未来 神様は未来もきっといてくれる 夫唱婦随二人の未来凪いでいる 我が地球未来へ青でいて欲し 克 三千代 緑

千正紫保武克 寿 子博香州雄子 冗談に見事なうそが伏せてある

川竹

III

再会のドラマが育つ午後の雨 知

円周の中をもがいている庶民 再会をためらう古い傷がある 初夢の縁起かついで明ける年 利回りの背後にあった落し穴 よく回り隣へ越えた竹トンボ 小回りのよくきく夫で出世せず 回想の視野から消えぬきのこ雲 九ちゃんに又逢えそうで上を向 再会の女に時効の罪がある 秀才は出世してないクラス会 歳月へ憎しみを消す風が吹く

泉野風坊

萌

盆栽展どれも見事ないじけよう

まかされた苗を見事に育てねば 欲張りが見事に詐欺にひっかかり 旅の道見事葉ボタン時計です 仏壇へ一番見事な花をきる どん底を見事乗り切る男です

野

草政枝

言いわけを見事に言えるようになり まっすぐに夕陽が落ちるのは見事

寿美子

ライバルに見事に勝った玉の汗

終章を見事に飾る遺言書

打吹川柳会

弘朗報

ゎ かあゆ川柳会 松本はるみ報

柳風 みほの

螢 映

外食で迷ったあげくのメニューです ワイワイと外食した日のリフレッシュ こだわりが紋付袴でかけつける 想い出がひしひし重い日記帳 今日だけはこだわり持つまい敬老日 こだわりがまだ一パーセント敷ふとん 千代枝 ヒデ子 聖好 枝

方便の嘘が見事に実を結ぶ

少し呆けた顔で見事に裏をかき 三浪の執念見事さくらさく 敵を知り過ぎて見事に騙された 祖父の叙勲枯木に花が咲きました 爆弾を抱いて見事な踊りぶり 壺見事炎くぐった肌の艶

粗酒一献見事に足をすくわれる

たつみ

不器用な男定年平社員

利口にもなれず阿呆にもなり切れず

栄転の見事に父をこえた椅子 これがまあうちの娘か書道展 見事な絵かいた清を想像す うちの松見事な枝で金を喰う まぐれでも柳友は見事と言ってくれ 引退も見事後進に道譲 玲 妻 節

ひさ子

乾盃のお酒今夜はほろ苦

はるみ

こだわりを少しだけ持ちい

ざ乾杯

松風報 目のたかさ変えればこだわることでなし こだわりを捨てライバルと手を握り 小春日にこだわりすてた顔ふたつ

悦鈴民

泉利良江子

外食がつづき恋しいうちの飯 外食を根掘り葉掘りにただされる こだわりを捨てよう大事な人だから なんとなく追突したい人に会い 人民を喰い物にする多数決

尼崎いくしま川柳会 春城

千恵子

求

功

欠伸して涙の温い粗大ゴミ 完璧な言葉に妥協などはない 終電車駅には私一人だけ 紀子さまに似てると思う祖母のバカ 水枯れて追憶ばかり風ばかり 両親の死角にあった子の希望 そやけんどワテの希望はそこらへん 嫁さんへ希望消えたりつないだり 春おぼろ男ひとりをもて余す 噴水の水も枯れてた冬の駅 水枯れたあと一輪の夢も摘む 整形をしてから希望持ちはじめ エベッさん今年は希望叶えてや ふんぎりをつける一喝抱いて 二日酔いの薬五時前効いてくる いる 凡九郎 年歌萬澄

正 し げ っ お 代 六向 西

97

みち子

で希望に添うつもりだと言うておく 敬いた父ガンと知ってた日記帳 英子 かんどうなことは嫌いなフライバン 定 人めんどうなことは嫌いなフライバン 定 人の かんどうなことは嫌いなフライバン 定 大き かんどうなことは嫌いなフライバン 定 大き でき でき かんどうなことは かんどうなこと は かんどうなこと は かんどうなこと は かんどうなこと は かんどうなこと は かんどうなこと は かく と言うておく 敬 を 子

# 洋 会 中西兼治郎報

使い捨てカメラでおんな撮っている 明日のこと写せるカメラあれば買う 雪の街みな善人に見えてくる 出もならず炬燵へ戻る雪の朝 入選を狙うカメラは夕陽追う 餅焼く子マグマの世界覗いてる カメラまでつかい捨てとはおぞまし 時々はヌードもうつるファインダー 粗大ごみ捨場も被う白い雪 ディオールの靴も踵は減るのです 振袖を脱ぐとお餅がよく入り 焼餅を上手にやいて春炬燵 雪の日の氏神さまやあらとうと 近松の雪降る場には熱い愛 心あるカメラピントを甘くする 機嫌よく宴席出れば靴がない ひとり言やっぱり淋しい父の靴 この靴に家族五人の昔あり さと美 しげお すすむ みつ子 IE 真 雄

落ち椿 駒子と転ぶ雪の道 鬼 遊うつしてはくれたが見せてくれもせず いつをこの地球 軍靴のひびきまだ消えず 光 子この地球 軍靴のひびきまだ消えず 光 子にの地球 軍靴のひびきまだ消えず 光 子のしてはくれたが見せにつく靴を買いにいく 透 太

# 川柳 稲田 豊作報

知恵だけで渡れぬ世間の波がある 知恵者揃う内閣さえも足踏みし 過疎の村 咄嗟の知恵 知恵袋少し大きく生まれたい 子育てと共に育った母の知恵 知恵あふれ金もあふれてリクルート 生きとる間に知恵は使えと叱られる 知恵出して知の輪作ろう同障者 知恵捨てて祈る姿に神宿る 知恵の輪がとけて仏へ灯をあげる またしても逆さにふるう知恵袋 お年寄り貸して下さい世故の知恵 (間智いくつ積んでもバベルの塔 知恵を出し合い村おこし 犯人図星 珍妙人 真 みつる 健太郎 八惠子 柳 美乃留 晄 香

会 池 森子報

お見合いの日まで礼儀はとっておく 美 房親の真似 恋愛結婚 三姉妹 昭 水窓をも知らず召された従兄がいた トシ子恋愛も知らず召された従兄がいた トシ子冷淡な態度みごとにカンフル剤 側 勇冷淡な態度みごとにカンフル剤

# いさり火川柳会 尾崎三代治報冷淡な衣の下にある炎 森

いつみても恋愛中という二階

ートする妻でキッチン冷えてい

いる

花

来ないとは思うがすこし待ってみる 由多香発表会出番待つ胸さわぎ出す 八重子登表会出番待つ胸さわぎ出す 伊都子生徒での待ったはいかん気が抜ける 三代治生えしのび待ったはいかん気が抜ける 三代治生えしのび待った甲斐あり玉のこし 武 士子や孫を老いたる母が待つあかり 智恵子 大電をして飛び出せる春を待つ 豊 子

# 南海川柳会 飯田 悦郎報

同書の年賀の客がまた増える 庸 佑 同書の年賀の客がまた増える 庸 佑 原書の年賀の客がまた増える 庸 佑 原書の名素をっとかくした年賀状 信 博 もめる素をっとかくした年賀状 信 博 を がいる安堵 真 砂 がいこらえる威張りがソファを転げ落ち 度 改めて他人行儀にした年賀 年賀書くこの幸せを嚙みしめる 子には子の思惑があるお年玉 集金のように孫が来るお年玉 石段を登り滝にうたれて来た素足 観音様に逢う石段が高すぎる 父の年越えて雑煮の箸をとる お雑煮で下戸は正月らしくなり 雑煮餅あまる世帯になり始め 正月の酒の弾みへ待つ雑煮 食べ比べ雑煮の思いも初寿の ひと言を添えた年賀の温か お年玉あてに子連れでご挨拶 年玉も時代の額に悩む老い お年玉たった千円かと生意気な 石段をお遍路さんは重くつき 寄り添えば天国になる夜の石段 石段をひょいひょいとのぼったな 石段をのぼって青い鳥にあう 味ひとつ増えて年賀が重くなる 味 志 在 生 文 成 郎 秋 喜眉信真柳 正重東凡悦

凡九郎 美津留 文 秋 風水治柳伸 好 明 とんび悠々地上の憂さを言わ 記憶には無いと煙の中に居る 紫煙くゆらす女の深いふかい 思い出のコースを回るフルムーン 許すことばかりで回る夫婦独楽 前ばかり見ている首を回そうよ 回れ右子期してトップ走らない 空いたので座ると周り皆睨む 回転ドア手の温みなど知らぬまま 飽食のつけが回って二段腹 擦れ違う女にひかれた回り道 擦り減った絆歯車軋み出す 人格を少し変えたか回り椅子 回転ずし振り回されて胃に落ちた 雨は斜めに毛皮のコート鬱になる し徳さんの知らぬ煙が立ちこめる 球が回るいつかあなたに逢うために

ぬ舞

和たみ一吸三雅かのも立ま美

落葉焚く煙の中に芋がある

おさむ

しげお

菊を焚く未練心を燃え残

服の余裕煙の輪を作り

郎子代

### 高田美代子報 憲太郎 子供だと思う子供の目が恐い 柳塔まつえ吟社

叮紅報

悦

父ちゃんの拳骨子供待っている 顔知らぬ五十年忌の遠い縁 詫びた子の涙を母がふいてやり 子供見て躾の甘さ思い知る お隣の子供の背なはよく見える 昔の子供仲間入り

思案して煙たなびく会議室 嫁がせてやれやれ母の泣き笑い

敦キミ子

やれやれと思うとたんに肥り出す

やれとお開きになる披露宴 ナス日過ぎてやれやれ父の顔

治知修

7

きみ子 多賀子 友

> 眠りつくおもちゃの箱に虹がでる 思い出の箱は時々開けてみる 遠い道男に心の借りがある 句読点打つたび愛が遠くなる 威勢よく福をよびよせ初出荷 平成の春を寿ぎ初荷来る 威勢良く過疎にも走る初荷旗 九十のしわ笑わせて雑煮食う 空箱を思いきれずに山と積み 折箱にもうだまされぬ山の神 箱庭の中なら大将にもなれる 子に遠く住んでやる気の日々で足る 本年もよろしく初荷運び込む 湾岸の魚雷初荷として届 近頃の雑煮は少し他人めき 日本中雑煮祝うている平和 めでたさは雑煮へ揃う夫婦箸 旅の宿雑煮に土地の味を賞め 終列車郷里の雑煮を食べに行く 箱をあけると恐ろしい事もある ふり向くと皆んな遠いものになる 界中ふり回してる遠い国 ちかし 江 与根 代仕男

屯江夫美太一

自動化で味気なくしている初荷

#### Ш 大

高須賀金太報

義理三分有ってきっぱり断れ 掛けただけ年金貰う意地に燃え ここだけの話マル秘が動き出す 同好会枯れた同士が燻り 如 2

美津留 太 弘

悔いのない一日だった茜雲 日が暮れる地蔵の影に見送られ 片減りの靴一日の満足感 会席を前に演説あくびする 会席で話まとまるお国がら 継ぎ足した年代かたる仁王像 親馬鹿が追い銭してる百貨店 ビタミンを補うつもりビール吞む ひょっとこを補うおかめの目がきれい 若者の足に泣いてる通勤車 まだ夢は捨てず初老のボールペン の人と踊ろう地球最後の日

0 ±

地でも買っておこ 鉄心 本蔭棒 与呂志 比呂志 権八 重人 しげお 我川 司 吉 步 勝 導火線母が密かに消してゆく 煙幕が晴れて他人の顔となる 来年の船出覚悟の筏組む 信念を貫き通している孤独 自分史を貫く芯を見失う 十字架の向こうに覚悟の貌がある 少しふっくらストレスない職場 服の安堵の煙の輪が丸い 南大阪川柳会

### 金井 文秋報

練習のない人生だから迷いぬく 絵馬に書くゆれる気持の願い事 珍しい物買って行く下心 珍客へ一気に戻る青春譜 正座することから練習しておこう 落ちこぼれ同士の絵馬が肩を寄せ 祝出征の絵馬がくすんでいるお宮 負けたらあかん練習も自分にも 夫婦仲醒めない愛を祈る絵馬 偏差値が無理な願いをかける絵馬 絵馬堂に古びて絵馬の謎めきて 珍客をだしにとことん飲むつもり 珍しい事ねと本気にして居ない 珍しい風習過疎の平家村 珍しい父の涙は背なにみる 早起きをする雪は旅先

しんじ

寿美

喜

風

修實 男 夫 シメ子 あいき

子

頂留子

雀

月

宿の風

お国訛りが入りみだれ

落葉舞う瞼閉じれば亡母の詩 よく笑う客正月を醸し出し 異次元へホウホウ誘う雪の精

の血を日曜大工で見直され

たけ志

風

健一報

もみ消した不倫に一筋立つ煙 歳だなあ同じことを繰り返し だまされることもひとつの処世術 熟れ頃の女にだってある悩み

柳五郎

練習した通りに敵はきてくれぬ コチコチになって練習生かせな

スパイクが減ってトップの位置にあり

T 柳宏子

度

楽

勝手口まで通らされ

生真面目な私に曲り角ばかり 空想をボトルに詰めてキープする 余計な話はせずにつんぼは直ぐ帰り

佐 桃 義 浄 吟 恵 風 親 美 平

青信号一緒に渡る杖の人

秀 平則吾彦水 別枠という出し方がある予算 別れ道迷わぬ父の道しるべ 別々の心でかたい握手する 手ごろな枝に三足並ぶ白いくつ 生きのこるために切らねばならぬ枝 無造作に枝を切ってるように見え 枝も歴史が重 木

金夏玉健

横顔が別な方向を考える 別口の口座にあった罪ひとつ

正文吉

別口がとても強気にする収支

森消えた村に未練を断つ別れ

柳塔あおもり

子育てが終ると風の音ばかり 沈黙の後で大きな嵐吹き 沈黙の中でけんかの倦怠期 黙祷の間は咳もおさえこみ お茶うけの茄子に染まった舌の先 ばん茶でも人を愛した過去がある 茶が冷えて孤独の刻を重くする 夫でない男とコーヒー飲んでます 受験日の朝の茶ばしらうれしがり もうなにも言わずにお茶をいれてくれ 年老いて茶飲み話に花がさく アメリカも日本茶までは攻めるまい 息抜きのお茶をのんでる宮仕え お茶殼になって最後は畳拭く のんびりとお茶をのんでる粗大ゴミ 友と一 期一会のお茶の 味 オサオ 凡凡子 五楽庵 和香子 敏

雀踊子

シマ子

憲太郎佑 トミ子 月 伸秋 葉

波多野五楽庵報 喜久江

100 -

ホームスパン今は昔の語り草 目と顔が笑って沈黙のデート

衛峯

### 豊中もくせい川柳会(前月分) 田中正坊報 喜花

叱り手に逝かれてからのぬるいお茶 男のような先生だったけれど好き 飲み屋から犬ついてきた十二月 孫の守りテレビ漫画に任しとく 目の見えぬ我が子にせめてコンサー 親子逆に扱う知恵覚え 宇宙からお帰り待っていた空気 面目も無いがやる気もない男 騒音をさけてバイブル読むベンチ 地に還る枯葉が舗道歩む音 秒針の音に解答せまられる 人扱いみな平等に自動ドア 地に還る落葉落葉にある運命 運命も祈れば少し変りそう 運命を変えてしまった遺言書 運としか言いようがない生残り 滝の音いつかは私 無に還る 社の運命かけて社長の首を替え 運命とあきらめぐせのあるわたし 宇宙から見れば地球は問題児 根越し花苗贈り和平策 の中の紅葉によぎる秋の冷え (小)英 武庫坊 寿美子 福 登代子 つえ子 万之助 とく子 吉太郎 登志実 きく子

苦労など語らぬ母の掌が宝 豊中もくせい川柳会 田中 正坊報 光

> 正月がすんで普通の日が続 僕の口干すも奢るも妻次第 悟り開いたか表を掃いている

誕生日 色あせてペレストロイカ旗の 行商の苦労もあった社長さん もう一度声を聞きたい忌がめぐる 捨て石の一つに深い情けおく 憲法は平和日本の宝です 近松の女耐えることが好き 弟を社長と呼べず梯子酒 救済事業 粗末な政治さらけ出す 値上げした分はまるまる儲けてる 背な丸めますます皮肉きつくなる まるまると肥ったブタに罪はない まるまるは嘘でないのに信じない まるまると善人らしい顔で嘘 ドライから一番搾りに浮気する 馬頭観音 コーヒーへ道草をした万歩計 自分史に事業の修羅場特記して 回も美人と言われたことがな 猫にじっと子宝のぞかれる からの宝 声も弾んで九十五歳 蟻一匹の雨やどり 芸事に励んでる (小)英

全日本川柳愛知大会

会 日 第1部 3000円(昼食·記念品共 名古屋市公会堂 6月9日(日) 午前10時開場 (事前投句·5月10日締切 (鶴舞公園内 青木 晴嵐選

武庫坊

富

各題2句、 明記し、投句料1000円(定額小為 35×18 mの句箋1枚に1句ずつ記入。 替または現金書留)を同封して左記 大阪市中央区谷町7-1-新谷町第2ビル206号 無記名。 心 封筒に住所氏名を 山崎

とく子 明 芳

つえ子

日本川柳協会大会係

宿 題 第2部 緑 M 景 (当日: 出句·正午締切 鈴木 坂本 山本 藤本晴港子選 琴公選 雨山 寛六選

登代子 しげお 白渓子

乾き切った男が抱いた事業欲 平和馴れ釘づけされるテレビから 間違うた靴がきっちり足にあい

日本は平和な競馬記事

寿美子

各題2句・各部各題とも未発表作品

#### 定本 広文選 -101 -

登志実

吉太郎 きく子

### 柳贝 集部

★第25回記念真庭親睦

川柳

★番傘わり

③酒井靖子の各氏。 本千代子③遠山可住、 の年間賞を発表した。 日発行の句報で平成 やま賞は①家沢美智子②岸 力波柳壇賞は12森脇和子 柳ささやま社は1月14 2年度 また 2020

★高槻川柳サークル卯の花

勝山町大字勝山282・沼

は2月16日、

榎本信治へ。

武庫坊の3氏がそれぞれ秀 3氏が選者として参加 智子・浜野奇童・西山幸の の5氏を決定、表彰した。 ①黒川紫香・山本礫・田中 成2年度の最優秀賞に墨作 は1月17日の新年句会で平 ★第25回岡山県川柳大会は 正坊 4 松川杜的 5 阿萬萬的 島蘭幸・小出智子・春城 総合得点優秀賞に 邑久町中央公民 本社から小出 956 いる。 柳都川柳社 本正康へ。 000円 (記念品呈)、 万円)を授賞。投句料は 上三太郎賞1名 は4月20日で投句先は 新津局私書箱15号

館で開かれ、 1月27日

賞を受賞した。

ました。ありがたいことで

まだまだりハビリぐら

・激励のたよりをいただき

多くの先輩から見舞い

月5日必着で岡山県真庭郡 田千茶は各1句。投句は3 本田恵二朗▽特別課題 風来子で各題2句、 題・選者は、 日午前10時 10周年記念句会 公枝▽脱ぐ=三村川楽▽余 公民館で開催。 =河原加枝子▽雛 風船—長尾保▽朝—楢本 円·投句料500 (兼·本田恵二朗句碑 から勝山町中央 会費150 浅田双輪 は3月10 席題 一円で兼 ||大森 一岡

晴れ

会費2000円、

一合掌

は葉書で2句、

行方・

イホー

ルで開催。

乱の5氏が審査にあたり、 尾俊平・大野風柳・横村華 三太郎賞の作品を募集して ★柳都川柳社は第22回 佐藤正敏・河口弘・寺 準三太郎賞2名(同 雑詠5句(未発表) (副賞3 訓練にあけくれるこの頃で 和田市 の手術・入院ぐらしも三か 会大賞(特選)に輝いた。 ■岩佐ダン吉氏(同人・岸 寸. 今更に飾る気はない冬木

おたより▲

総合文化センター・サーテ 19日午前11時から大東市立 45周年記念川柳大会は5月 輪・師・たっぷり・ かくさ川柳会創立 宿題は、 ご親切にこたえて しは続きますが、 上げます」

月20日までに大阪市阿倍野 区天王寺町北2-5-21 太郎・合掌(各題2句)、 ・偲ぶ・継ぐ・笑う・ 事前投句 4 います」 を大切に生きるようにして ■恒松叮紅氏(参与·松江 腹切り2回、 ■谷岡芳枝さん(同人・島 日おきの通院、 いろいろありました 透析十年を迎えま 甲状腺とね。 日日日

★NHK学園川柳近畿大会 本社同人の次の句が大 芦屋市で開か 丸山よし津 頂きました」 天閣やその近辺を案内して 紫香先生ほか有志の方に通 市)「おめでとう会に初め い出になりました。 て出席させて頂き、 いい思 終了後

服」、P90下段6行目「植中段17行目「和服」→「**私**「遂に」→「**逆に**」、P88 中段17行目 事長)は1月20日逝去。 人・前大阪川柳人クラブ幹 ■木山雄幸氏 ■2月号—P83中段9行目 正 (川柳文学同

リハビリや歩行

椎間板ヘルニア

を借りて心からお礼を申 たいと思っています。誌上 皆さまの がんばり

岸和田川柳会	28日(木)午後 6 時から 焦る・椅子・うっとり・絵	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助
川柳東大阪	30日(土)午後 6 時から ハガキ・一杯・子言・火	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西 5 - 6 - 23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚

500円、投句料 310円 (62円切手5枚)、各題3句以内 予め決定している場合は何か月分でも結構です) ★特に記載がない場合 句会費 原稿送り先 (締切 · 毎月20日 〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宫園射月芳

#### 3月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
尼崎いくしま	1日(金)午後1時から 真直ぐ・囲む・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費300円 投句料62円切手3枚
川柳塔まつえ	9日(土)午後1時半から 靴 · 窓 · 酒	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅
堺川柳会	10日(日)午後1時から 並ぶ・痛い・全て・自由吟	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後6時から 人形・スプリング・雪・卒業	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔わかやま	10日(日)午後1時から 芽・女神・巡る・名案	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口川柳 会	11日(月)午後1時から 成功・親しい・飾る・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
南 海川柳会	15日(金)午後6時から 彼岸・気まぐれ・評価・代役	王造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	17日(日) 正午から ひたい・思いやり・やり手・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時から 三・奥の手・行く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南大阪川柳会	19日(火)午後1時から 安全・可哀想・妨げ・待遇	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(水) 正午から 偶然・鞭・交わす・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 句会費500円 投句料62円切手3枚 各題2句
富 柳 会	21日(木)午後1時から 我が家・綿入れ・割箸	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
京 都 塔の会	22日(金)午後1時から 磯・進 む・知 恵	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 句会費350円 投句料62円切手3枚
はびきの民 川柳 会	24日(日)午後1時から 慣れる・入り口・ベッド・(男)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

## 記

別クラス編制であった。 気がなく、小学校まで男女 嫁いでいたから母以外に女 が物心ついたころには姉は の七福神と同じ構成で、私 たのだろう。女一人男六人 だから、俳句のつもりだっ と出合うはるか以前のこと につくった私の作品。 母となっている娘の初節句 ひなまつり」一今は二児の ★「わが家にも娘一人あり 川柳

この句を思い出した。相手 戦好きの印象を与える。 悍な面がまえで、いかにも のフセインという男も、 いるのを見て、昔つくった 々としてテレビで発表して 軍がイラク攻撃の戦果を得 章)をつけたアメリカの将 柳。胸にいっぱい勲章(略 で恐縮だが、これは私の川 好き」―またまた手前味噌 本気で思っている。 ★ 「兵馬俑 男はみんな戦

できるだけ多くの諸姉に登 ろん」ワイドはじめ誌上に そこで今月号は「ひみこさ せず、川柳を始めてからは の魂なんとやらで今もって しかった。しかし、三つ子 い灯がともったようにうれ 時は、家の中にポッと明る いよいよ増幅する始末だ。 女性コンプレックスが解消 ★それだけに娘が生まれた 困ったものである。 たくらむ戦好きの男どもも にまぎれて自衛隊の派遣を に戦費を提供し、どさくさ 言われるままに湯水のよう 戦争は罪悪であり、他国に かなる名目があろうとも、 もふくめて男性である。 みどろで戦ったのは、私を ★古来、戦争を起こし、血 Œ

おける『川柳塔』の興亡は、 場していただいた。今後に にかかって女性にあると すれば、 当然であるが、趣味など、 かげで、 なりがちである。 え方の人たちとの交わりに ような環境、同じような者 風に触れても、割合に同じ 何らかのグループで、外の に触れる機会が少ないから やすい。 書いたが、専業主婦はとも ☆前回、主婦業の煩雑さを 直接、社会の波風 夫と言う防波堤の 世間知らずになり

ウイルスになって、心を、 が、自分でも思いがけない 他人の何げない言葉、態度 れが実感である。と同時に 何を今更と思われても、こ とを知った。いい歳をして さまざまな考え方のあるこ た遠くの人たちとも付合い てから、全然違う世界、ま にした。確かに川柳を始め とになる」という言葉を耳 て人生を何倍にも生きるこ ☆川柳を始めた頃、ある人 「川柳をすることによっ たいと思う。

終ると、先生が白墨のつい 思うのは、世事に疎い者特 皆それぞれ感受性豊かな方 ーシ!とほめてもらってか た手で頭を撫でてくれ、ヨ ひときわ軍鶏のような声 正。最後はキンジョーと、 ネイ、イトク……明治、大 何倍もの人生を楽しむこと ろなウイルスに免疫をつけ 有の自己中心的な甘い考え らえる、許してもらえると ばかり、何でも分かっても 体中をも駆け巡る は言わず、積極的にいろい 方。どうぞお手柔らかにと ◆ジンム、スイゼイ、アン ができるよう、 ☆人間諷詠の川柳人だから 川柳を詠み 国語は、今のように、そう だがよいことに、英語や外 という制裁があるので困る あてられて、ひんしゅくを ガミガミやらなかった。 は絶対やらないと、ビンタ を暗誦させられた。これら にさせようと、色々なもの 軍人勅諭をはじめ戦争好き 教練という科目があって、 しかし私たち大正生れは、 ることが多くなって弱った。 校の頃はまあ打率のよか 買った事もあったが、小学 むずかしくなるのと、憶え たことを記憶している。 と、手をあげたものだった。 ◆鉄は熱いうちに打て、 ♥中学校に入り、だんだん

好きな子にも見てもらおう いてきた時分であったから、 産業に産物、少し色気がつ 道府県名や山の名、川の名、 ら歴史の時間が始まった。 地理の時間になると、都 うな句を作りたい。 少しでも憶えてもらえるよ ことが多い。柳人諸兄姉に となつかしく、憶えている の頃のことを思いうかべる ったが、昔は熱かった。そ いう諺がある。鈍鉄ではあ ٤

#### 作品募集

茴 銀水川 課題吟 步教室 香の 河煙 (3句) 花 系 抄 月号発表 目盛り 剣黒 10 句 句 句 (3 (3月15 小河黑西 句 楊三月出内川尾 井宅原 締 二ろ宵 子笑香栞 南亭明 扣 選選選選選選

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌 友、茴香の花欄は女性、その他 はどなたでも投句できます。

「楽 器」「ロマン」 「慰める」

同人費・誌代などのご送金は、 川柳塔社事務所へお願いします。 所在地は下記奥付のとおりです 振替口座 大阪 8-33368 誌 代 半年分 3,800円 (送料共) 1年分7,500円(送料共)

同人費 1年

振替口座大阪8-三三二六八番

亚亚 ₹ 545 定 प्रत प्रत 印刷行人兼 価 **小阪市阿倍野区** 年年 六 ウエムラ第2ビル202号室倍野区三明町二―一〇―一六 藤西 百 月月 円 (0%)公元一六九一四番 原 (送料 童尾 Ŧi. 日日 心 発印 社厳 行刷

#### 本社3月句会

い形

投会席 題

塞

葉

1

句を書き、

同封のこと

女 くるくる

お は 題 な

会 日

3 午

3

後5

新人 咲

3 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口 月 ズフ 日 \*

500 4 関 cm 10円 19 発表 (62円切手5枚) CIII

各題 西宮 神松佐八 2句 尾西磯原 弥典寿奏 栞生子子月

本社 4 月句会 8日(月)

選選選選選代

紅 屑」「海 杯 「電 気

#### NHK川柳作品募集

課題「底」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 3月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町 3 -43 NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

3月24日(日)ラジオ第1放送 発 表 午前11時5分から

#### 西日本文字放送作品募集

課題「温泉」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 3月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20 大手前ウサミビル3階 西日本文字放送 川柳係



Perre Parchen



泣いて笑って…… 夜を通り過ぎたら また陽がのぼっていた 男のロマン



オーエスケーの 紳 士 服

株式会社大工工人ケー

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7 (06) 941-8018

#### 賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで 住居の事なら何でも相談できる店

#### 豐津住宅株式会社

代表者 大 矢 喜 一

豊 津 店

〒564 吹田市泉町 5 丁目11-14 TEL (06) 330-0006代 FAX (06) 388-6102 関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21 TEL (06) 388-6166代 FAX (06) 388-6886